わ-6-12

はたらく魔王さま！0

和ケ原聡司



Satoshi Wagahara
Illustration Oniku
イラスト 029
和ケ原聡司 0

女の子ゼロ!? 庶民派ゼロ!?
IKEMEN
イケメン魔王が∞!
ムゲンダイ

電撃文庫

進化宣言! 電撃文庫

少年時代のサタンを描いた始まりの物語!

初回限定
フェア特典
『魔法科高校の劣等生』
キャラカード付き!! 全4種(1枚入り)

FIGHTING フェア
特製グッズプレゼント実施中!!
応募締切 2014年11月28日(金) ※当日消印有効

詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

はたらく魔王さま！0

赤い空と大地が覆う魔界の地。弱小部族出身の少年悪魔が、かつて魔鳥将軍と恐れられた老悪魔カミーオと激しい口論をしていた。少年の名はサタン。後に魔王サタンとしてエンテ・イスラ征服に乗り出すが、今は非力な一悪魔であった。

サタンは二大勢力の蒼角族と鉄蠍族に対抗するため、強大な力を持つハグレ悪魔ルシフェルを味方にしようとしていた。

ルシフェルとの出会いからアルシエルとの激突までを描く、魔王達の始まりの物語を書き下ろしで収録。さらに勇者エミリアの旅を綴った書き下ろし短編に、魔王達が日本に来てすぐの年末年始を描く「電撃文庫MAGAZINE」掲載の短編をプラス。庶民派成分控えめの特別編！

進化宣言！ 電撃文庫FIGHTINGフェア

抽選で合計2,100名様に当たる特大プレゼント！

特賞 5ポイントで応募

著者サイン入りミニキャラクタースタンディPOP12枚セット …… 30名様

FIGHTING賞 3ポイントで応募

電撃文庫掛け替えカバー4枚セット …… 150名様

進化宣言賞 2ポイントで応募

特製しおり12枚セット …… 1,920名様

フェア期間中に発売される電撃文庫および電撃文庫書本 フェア企画が載っている期間各誌についている応募券で素敵なグッズをゲットしよう！ 応募方法と応募券は裏対側のオビ折り返しをチェック！

◆期間についての詳細は フェア公式サイトをご覧ください

9784048669009

1920193005905

ISBN978-4-04-866900-9
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価：本体590円
※消費税が別に加算されます



Wコミカライズも、それぞれ新エピソードスタート！

その1 シリーズ本編コミカライズ！アラス・ラムスも大活躍！

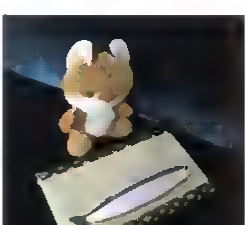


電撃コミックス
はたらく魔王さま！
①～⑥巻発売中！
作画 柊 暁生 原作 和ヶ原聡司
キャラクターデザイン 029
「月刊コミック電撃大王」（毎月27日発売）にて
好評連載中！

その2 スピンオフコミック！魔王と勇者の生徒会長選挙も佳境に！



電撃コミックスEX
はたらく魔王さま！ハイスクール！
1～3巻発売中！
4巻は2014年9月27日発売！
作画 三嶋くろね 原作 和ヶ原聡司
キャラクターデザイン 029
「電撃マオウ」（毎月27日発売）にて
好評連載中！



和ヶ原聡司（わがはらさとし）

「昼寝する和ヶ原を起こす相棒」

和「ゼロの自分に還ってます」
相「ゼロの自分て何」
和「一日12時間睡眠」
相「起きて半畳寝て一畳は慎みを心がけよという意味と知ってのことか」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま！ 1～11
はたらく魔王さま！ 0

イラスト：029（おたく）

男だけで飾る表紙は初めてだったのでどきどきしてます
絵面大丈夫カナー!?

応募要項

事便ハガキに、あなたの住所 氏名 年齢 電話番号 ご希望の賞を記入し、対象箇所から切り取った応募券（コピー不可）を必要ポイント数貼って、下記宛先までご応募ください

●宛先　〒102-8584　千代田区富士見1-8-18
アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部「富化通信」電撃文庫FIGHTINGフェア」係

●応募締切　2014年11月28日（金）※当日消印有効

このプレゼントの詳細は公式サイトをCheck!
http://dengekibunko.dengeki.com/fighting/

※応募は1回につき1口（1口＝応募券1枚）です。※応募券は1枚のみコピーしてご応募いただいても無効とします。※当選者の賞品の発送先をもってかえさせていただきます。※賞品について譲渡・転売しないことを応募・当選の条件とします。※応募者の個人情報は、このキャンペーンの賞品の賞品のみに利用し、その他の用途には一切利用いたしません。※応募者多数の場合は抽選となります。※応募・発送は日本国内に限ります。※賞品は2015年1月以降発送予定です

列島縦断ご当地ポスターキャラバン！

電撃文庫の人気キャラが、各地域の方言で喋った台詞とともに全国の駅に登場するポスター企画が展開中。詳しくはフェア公式サイトをチェックしよう！　※有効期間 2014年10月9日（木）まで

9月のオビキーワードは“は”

6UN 応募券 通化富貴 1ポイント

わ-6-12

はたらく魔王さま！0

和ケ原聡司

電撃文庫



はたらく魔王さま!0

赤い空と大地が覆う魔界の地。弱小部族出身の少年悪魔が、かつて魔鳥将軍と恐れられた老悪魔カミーオと激しい口論をしていた。少年の名はサタン。後に魔王サタンとしてエンテ・イスラ征服に乗り出すが、今は非力な一悪魔であった。

サタンは二大勢力の蒼角族と鉄蛎族に対抗するため、強大な力を持つハグレ悪魔ルシフェルを味方にしようとしていた。

ルシフェルとの出会いからアルシエルとの激突までを描く、魔王達の始まりの物語を書き下ろしで収録。さらに勇者エミリアの旅を綴った書き下ろし短編に、魔王達が日本に来てすぐの年末年始を描く「電撃文庫MAGAZINE」掲載の短編をプラス。庶民派成分控えめの特別編！

9784048669009

1920193005905

ISBN978-4-04-866900-9
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価：本体590円
※消費税が別に加算されます





和ヶ原聡司（わがはらさとし）

「昼寝する和ヶ原を起こす相棒」

和「ゼロの自分に還ってます」
相「ゼロの自分て何」
和「一日12時間睡眠」
相「起きて半畳寝て一畳は慎みを心がけよという意味と知ってのことか」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま！ 1～11
はたらく魔王さま！ 0

イラスト：029（おにく）

男だけで飾る表紙は初めてだったのでどきどきしてます
絵面大丈夫カナー!?



はたらく魔王さま！0

和ヶ原聡司

電撃文庫

2803


DENGEKI BUNKO


ヒーローバンド結成!?
和ヶ原聡司
TINKL ■ 029
Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku



CONTENTS

はたらく魔王さま達!
-a long time ago-
P011

はたらく勇者さま達!
-a long time ago-
P229

悪魔と勇者と女子高生
-A happy new year-
P279

デザイン ● 木村デザイン・ラボ


HATARAKU MAOUSAMA!
episode 0
EMILIA
EMILIA

CHARACTERS

魔王サタン



BEFORE



AFTER

真奥貞夫

弱小部族・黒羊族出身の悪魔だったが、知略と向上心でエンテ・イスラ征服まであと一歩と迫る。地球にやってきてからは、生活費を稼ぐためフリーターになり、正社員と世界征服を目指す。

悪魔大元帥アルシエル



BEFORE



AFTER

芦屋四郎

鉄蟻族の総大将として巨大な軍勢を率いており、サタンの率いる勢力と激突する。その後、魔王サタンの忠臣として悪魔大元帥となる。地球でも主夫として真奥に仕える苦労人。

悪魔大元帥ルシフェル



BEFORE



AFTER

漆原半蔵

荒野のハグレ悪魔として自由気ままに暮らしていたが、サタン達と行動を共にすることになる。真奥や芦屋を襲撃するために笹塚の町にやってきたが、その後一流ニートとして居候となる。

勇者エミリア



BEFORE



AFTER

遊佐恵美

勇者として各地で悪魔を退治し、魔王討伐の旅をしていた。討伐寸前で逃げられた魔王を追い地球にやってきたが、貨幣経済に揉まれテレアポのバイトをしながら魔王を探す日々を送ることに。

佐々木千穂



真奥のバイト先の後輩で、仕事のできる真奥に想いをよせる女子高生。真奥や恵美達の正体を知っても変わらぬ付き合いをしてくれる。

訂教審議官クレスティア・ベル
鎌月鈴乃



エンテ・イスラの訂教審議官で真奥達を討伐しようとしていたが、今は料理の差し入れをしてくれる真奥達のお隣さん。

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司
イラスト■029
Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

はたらく魔王さま！ -a long time ago-

勤め先からかかってくる電話というものには独特の緊張感があり、その内容に対して不思議と良い予感を抱くことは少ない。

それが休みの日のうららかな昼下がりにかかってきたのならなおさらだ。

夏の気配は完全に去り、涼しい風が吹き抜ける築六十年の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室で、真奥貞夫はそれなりの緊張感を持って真新しい携帯電話の着信ボタンを押した。

「もしもし、真奥です。お疲れ様です」

すると電話の向こうから飛び出してきた声もまた、若干の硬さを含んでいた。

真奥が電話を取るのと同時に、彼の同居人であり、また『忠臣』でもある青年、芦屋四郎がリモコンでテレビの音量を控えめに下げた。

真奥は目だけで芦屋に礼を言ってから電話に集中するが、どうも悪い予感は当たったようだ。

「はい、はい……え!?　インフルですか!?」

東京都渋谷区幡ヶ谷にある真奥のアルバイト先、マグロナルド幡ヶ谷駅前店の店長木崎真弓からの電話は、シフトに欠員が出た、というものだった。

「ここのところずっと新人研修も重なって出ずっぱりで申し訳ないが、今日夜からでも都合はつかないだろうか」

最近入ってきた、真奥にとって色々な意味で特別な存在である新人の研修を見るようになっ

てから、真奥のストレスはこれまでにないほど溜まっていた。
なので久々の休日にゆっくり羽根を伸ばしたかったのが正直なところであるが、真奥は一瞬心に差し込んだ邪念を振り払うと、部屋の隅にあるカラーボックスの上に置いてあった手帳から、今月のシフト表を取り出してしばし眺めた。
「……いや、アキちゃん休むなら遅くとも十六時半までには入った方が良くないですか？　そうじゃないと休憩回せないし、ディナーまで木崎さんが下に下りられないし。……はい、はい、四時に行きますよ。いえ、仕方ないですよインフルじゃ。はい。それじゃ四時に、はーい、お疲れ様です、はーい」
真奥は要請よりずっと早いタイミングで出勤することを告げて電話を切った。
「ご出勤ですか」
「インフルエンザで欠員だってさ。参っちまうよな」
芦屋の問いに、真奥は苦笑して頷く。
「でもほら」
真奥は芦屋に向けて、シフト表を見せる。
「今日、久しぶりに恵美がいねぇから」
「ああ……」
朗らかな笑顔を浮かべる『主』に、芦屋は複雑な思いを抱く。

エミリア・ユスティーナ。日本での名を、遊佐恵美。

彼女は真奥と芦屋にとって、決して相容れない『宿敵』である。

だが多くの紆余曲折を経て、今恵美は、真奥の『後輩』として同じ店で働く『仲間』になってしまっている。

その宿敵の新人研修を受け持ってしまった真奥は、人生で初めて『仕事に行きたくない』などと弱音を吐いたこともあったのだが、今日は、恵美が出勤していないのだ。

元から恵美不在のシフトが組まれていたのは確かなのだが、今の恵美はある意味世界の趨勢を左右しかねないほど重大な家族会議の最中であり、例え出勤することになっていたとしても満足に仕事はできないかもしれないが……。

「久しぶりに今まで通りの仕事ができそうだからさ、四時になったらちょっと出てくるよ」

「かしこまりました。では出勤前に軽く召し上がれるものを作っておきますね。ご夕食はどうされますか？」

芦屋は時計を見上げながら、変わってしまった予定に合わせてその日の食事の献立を頭の中で組み替える。

「晩飯は帰ってきて食うよ。人手が足りないのはディナーのピークまでで閉店間際は人足りてるみたいだからさ」

真奥はそう言うと、さっと立ち上がって休日用のくたびれたTシャツから、出勤用のあまり

くたびれていないポロシャツに着替えて気持ちを出勤モードに切り替える。
やがて時計が午後の四時を示す頃、真奥は颯爽とアパートを出て、裏庭に停めてある彼の愛車、シティサイクル・デュラハン弐号に跨がる。
「行くぞデュラハン弐号！　店の危機を救うのだ！」
雄々しくベルを鳴らして笹塚の町を駆けてゆく真奥の背に、芦屋は声をかけた。
「魔王様！　お気をつけて！」
道の向こうでこちらに手だけ挙げてすぐに姿が見えなくなった真奥を見送ってから芦屋は部屋に戻ろうとした。だがふと今真奥が走っていった方から歩いてやってくる、見覚えのある姿を認めて足を止める。
芦屋はアパートの共用階段を下り、郵便ポストを確かめがてらその人物を迎えた。
「どうも、こんにちは佐々木さん」
「こんにちは、芦屋さん！」
佐々木千穂。真奥のアルバイト先の後輩の女子高生で、真奥と、芦屋と、そして恵美の真実の姿を知る数少ない日本人。
そして真実の姿を知って尚、真奥に想いを寄せ、自分が知り合った皆がずっと仲良くしていられる未来を模索する、このアパートに集う者達の鍵ともいえる少女だ。
その手に抱えられているのは見慣れたランチバッグ。中にはきっと、彼女が真奥と、二〇一

号室に集まる皆のために心を込めて作った手料理が入っているはずだ。
「実はですね、先程魔王様が……」
「あ、もしかしてピンチヒッター行っちゃいました？」
千穂は先回りして言う。
「学校にいる間に木崎さんから、大木さんが休むことになったから交代できないかってメールが来てたんですけど、返信する前にすぐにピンチヒッターが見つかったって追加のメールが来たんで、もしかしてと思って」
「そうでしたか。なんでもその大木さんがインフルエンザにかかられたとのことで」
「インフルですかー。流行りはじめてるみたいですしね」
千穂は少し真面目な顔になって、頭二つ分は背の高い芦屋を見上げる。
「芦屋さんも気をつけてくださいね。大変なことがあった後なんですし、芦屋さんが倒れたら真奥さんや漆原さんだって無事じゃ済まないでしょうから」
「ははは、そうも言っていられません。これでも悪魔大元帥です。あの程度のことで体を弱らせていては、示しがつきませんから。でも、ありがとうございます」
芦屋は穏やかな微笑みで頷き返す。
千穂は、人間とはかけ離れた芦屋と、そして真奥の姿を知っている。
過去に、真奥達が何をしたかも知っている。

それを全て飲み込んだ上で、かつて一つの大陸を力で支配した悪魔大元帥相手の体を気遣っているのだ。

ふとした瞬間、芦屋はそれを自然なこととして受け入れている自分と、自分を取り巻く環境を振り返っておかしくなってしまうことがある。

一体あの頃、誰がこんな未来を想像しただろうか。

芦屋が思い出していたのは、不思議とずっと昔のことであった。

真奥が魔王サタンとして異世界エンテ・イスラを征服するべく侵攻し、人間の中から勇者として立ったエミリアと戦うよりも、さらにずっと昔。

「芦屋さん？」

「……ああ、すいません。どうしました？」

少しぼんやりしてしまっただろうか。これでは千穂が心配するのも無理はない。

真奥はもちろん、芦屋の身の回りもこの数週間で劇的に変化している。

やはりまだ疲れが抜けきっていないのだろうかと思いながら、千穂が差し出すものに目を落とした。

「これ、良かったら、シソ入りの卵焼きです。頑張って出汁から作ってみました！」

差し出されたのは大き目のタッパー。

千穂は芦屋の家事の手際や技術に敬意を払ってくれている。そして真奥への想いも手伝って

こうして頻繁に色々な差し入れをしてくれる。

今日は他にもタッパーが入っているようだが。

「鈴乃さんと、あとノルドさんにも良かったらと思って」

真奥と芦屋の部屋の隣、二〇二号室に住む鎌月鈴乃ことクレスティア・ベル。そして一〇一号室に暫定的に居を構えているノルド・ユスティーナ。

二人共、かつて攻め込んだエンテ・イスラで真奥や芦屋と敵対した人類であるが、故あって今は同じアパートに住むご近所さん同士だ。

「そうでしたか……でも……」

芦屋は少し困ったようにアパートを振り返る。

「その二人も、折悪しく出かけてしまったようです。永福町に……」

ノルドは先ほど話題に上がった恵美の実の父親であり、鈴乃は護衛役としてノルドが外出する際には常に付き添うことになっている。

真奥達が住む笹塚から永福町までは電車で十五分ほど。そしてそこには恵美のマンションがあり、今、ちょっとした嵐がそのマンションに吹き荒れているはずだ。

「え、そ、そうだったんですか。永福町ってことは、遊佐さんのところですか？」

間の悪さに、さしもの千穂も少し狼狽える。

タッパーはかなりの大きさだし、これをそのまま一度家に持って帰るのも間が抜けている。

「折角ですから、うちで待ちますか？　ベルやノルド・ユスティーナが出かけたのは午前中のことですし、もしかしたらそろそろ帰ってくるかもしれませんから」

「すいません、ありがとうございます」

千穂は苦笑しながらも、芦屋の勧めに従って二〇一号室に上がり込んだ。

「でも、お邪魔じゃないですか？」

「そんなことはありませんよ。漆原がいないと家事や仕事がはかどりまして。掃除洗濯は全て午前中に終えてしまいましたから」

「そ、そーですか」

悪魔大元帥ルシフェルこと、漆原半蔵もまた、真奥や芦屋と同じくこの部屋に住む悪魔だが、事情があって現在入院中である。

主である真奥のクレジットカードで勝手に買い物をしたり、働きもせずにゲームやパソコンで遊ぶ漆原がいないだけで、二〇一号室の主夫たる芦屋は漆原への説教に費やすエネルギーとパフォーマンスをよそに割り振ることができるのだ。

「タッパー、すぐに洗ってお返ししますね。ああ、これは美味しそうだ」

芦屋は千穂からの頂き物を皿に移してラップをすると、空いたタッパーをすぐにシンクで洗う。

千穂はそんな芦屋の背中を見ていたが、ふと、見慣れた部屋の中に見慣れない物があること

に気づいた。押し入れの前に、大きな布が畳まれているのだ。
「芦屋さん、あれ……」
「はい？　ああ、魔王様のマントです」
千穂が指さす先を振り返った芦屋は何げなく言うが、千穂は色めき立った。
「真奥さんの？　もしかして、悪魔だったときのですか!?」
「そうですよ。夏前に一度防虫剤を仕込んで片付け直したのですが、一ヶ月に一度くらいはこうして風に当てて陰干しした方が良いかなと思いまして。随所に貴重な素材を用いたパーツも使われていますしね」
「へぇ！」
千穂は近づいてまじまじと眺める。
綺麗に畳まれているので手に取るようなことはしないが、一見しただけで確かに良質な素材で織られていることは分かった。
その素材もきっと絹だの革だのといった、千穂の知る素材ではないのだろうが、それでも魔王型に戻った真奥が、あの巨軀でこのマントを羽織れば確かに悪魔の王としての威厳は十分だろう。
もちろんその魔王に攻め込まれたエンテ・イスラ側の人間達、特に今やかけがえのない友人である恵美や鈴乃のことを思えば手放しに『格好いい』などと言うことはできない。

だがとにかく真奥も芦屋も漆原も、千穂が知る普段が普段なので、どうしてもこういった彼らの過去に関わる物には興味を惹かれてしまうのだ。

「よければ、ご覧になりますか？」

そんな千穂の様子を見て、芦屋は布巾で手を拭いてからマントを持ち上げる。

「い、いいんですか？」

千穂は目を輝かせて、芦屋が広げていくマントに見入る。

「お、大きい……」

広げられたマントは、やはり魔王サタンの体躯に合わせられたものだけあって大きかった。六畳間の半分を埋めるマントの肩部分にはやはり詳細不明の金属で作られた肩当てがあり、徽章のようなものや留め具の一つに至るまで精緻に作られていることが分かった。

「魔王軍……かぁ」

そのマントに刻まれた真奥の人生に束の間想いを馳せる千穂だったが、ふと、隣の芦屋を見て言った。

「魔界って……どんな所なんですか？」

「どんな所、と言いますと？」

「真奥さんは『魔王』ですよね。でも、真奥さんって、王族の出とかじゃないですよね」

「そうですね」

「それで……えっと、なんて聞いたらいいんだろう」
千穂は少し腕を組んで悩む。
「その、エンテ・イスラで遊佐さん達や人間と魔王軍が戦争してたのは知ってるんですけど、そもそも真奥さんはどうやって『魔王』になったのかなって……」
「ああ、なるほど。そういうことですか」
「その、昔の話をあんまり聞いちゃいけないかなって思うんですけど」
「いえ、別に構いませんよ。特段隠すようなことでもありませんし。さすがに魔王様のご幼少期や、例の天使と出会った頃のことは私も存じませんが、魔王軍創立の経緯でしたらお話することはできます」
「お、教えてもらえるんですか？」
千穂は勢い込むが、芦屋は冷静に答える。
「ええ。『佐々木さんになら』魔王様も否とは仰らないでしょう」
「……あ」
芦屋から刺された釘を、千穂は敏感に読み取った。
「はい……あの、約束します。芦屋さんから聞いたことを『悪用』したりはしません」
千穂だから、話してくれる。
その代わり、恵美や鈴乃にこの話を漏らしたり、この話を使って二人を懐柔するようなこと

をしてはならない。
逆に恵美達から何か大切な話を聞いたとしても、それを種に真奥達を懐柔するような真似もしない。
それは人間と悪魔の狭間にあって双方を繋ぐ架け橋となるべく奮闘する千穂が、己に課した守るべき一線であった。
釘を刺しておけば、千穂は決して約束を破ったりしないことを芦屋もよく分かっている。
「試すようなことを言って申し訳ありません。魔王様も、最近妙にナイーブになっていまして。今日のピンチヒッターも、エミリアがいないから引き受けたと仰っていましたから」
「そう……なんですか」
千穂は少し複雑な顔をする。
千穂は、真奥と、恵美と、どちらも大切に想っている。二人と、二人を取り巻く面々が、いつまでも仲良く一緒にいて欲しいと願っている。
その思いに芦屋自身は決して賛成はしないが、千穂が自らの想いを達成するためにどう斬り込んでくるかは千穂自身が決めればいいとも思っていた。
「そうですね、何から話したものか。ああ、少し長い話になりますから、お茶でも淹れましょうか」
「あ、すいません」

芦屋は立ち上がると、ヤカンに水を入れてコンロにかける。そろそろ冷えた麦茶よりも、温かいお茶が美味しい季節だ。

湯が沸くまでの間、芦屋はキッチンに立ったまま話しはじめる。

「佐々木さんがご存じの魔王軍四天王、つまり悪魔大元帥の中で、私が魔王様の配下となったのは、三番目のことでした」

「そ、そうなんですか!?　てっきり一番最初からだと……」

千穂は大きく目を見開く。

日頃の芦屋の真奥への忠臣っぷりを見ていれば、旗揚げ当初から行動を共にしてきたものと誰もが思うだろう。

「旗揚げメンバーであるのは間違いないのですが、一番最初に魔王様に付き従ったのは誰か、という話なら、私、漆原、アドラメレク、マラコーダのうちの、誰でもありません」

「え!?」

「佐々木さんもご存知ですよ。もう一人、大悪魔の称号を持つ男が日本にやってきたことがあります」

そう言うと芦屋は体の脇で、翼のように両手をばたばたと仰いでみせた。

それを見た千穂は、ある存在に思い当たり大きく息を呑む。

「そうだった……私、聞きました。本人から……本人？　いえ、本鳥？」

千穂が首を傾げていると、ヤカンが湯気を吹きはじめる。
「ええ、今は『悪魔大尚書』と呼ばれておりますが」
芦屋はヤカンを火から外すと、しばらくそのまま置いておき、今度は急須と茶葉の準備に移る。
「魔鳥将軍カミーオ。彼こそが、本当の意味で最初の魔王軍四天王、悪魔大元帥だったのですよ」

※

赤い空と、黒い雲と、赤い大地が覆う魔界の北辺の地に響き渡る、二つの罵声があった。
かつてそこにあった山地が瓦解したかのように、広大な荒野に無数の巨大な岩が点在する通称『巨岩の荒野』。その片隅に、集落と呼ぶのも憚られるような、岩を組み上げて作られた家屋が寄り添う村落があった。
その中の一つ、瓦礫なのか建物なのか分からない小屋の中から、老人と子供の言い争う声が絶え間なく外に漏れ出していた。
「だから無茶だと言っておろうが！」
「うっせぇな！　やってみなきゃ分かんないだろ！」

「こういうことを火を見るより明らかだと言うのだ！　貴様のような小童が行ったところで奴の落とした羽根を見る間もなく、遠くから撃ち貫かれて終わりじゃ!!」

「ひょっとしたら意外と話通じるかもしんねぇじゃん！」

「奴の凶暴性といったら全盛期の吾輩ですらとても手に負えないものだったのだぞ！　話など通じると思うか！」

「お前の全盛期なんか知らね！もん！　じゃあ他に何か手があんのかよ!!」

「だからこれからそれを考えると言っておろうが！　聞き分けんかこのクソガキが！」

血と憎悪の臭いが渦巻く騒がしい風の中、老人と少年のけたたましい言い争いが響く。

「クソガキって言うなこのクソジジイ!!」

「クソジジイと言ったかこの小童が!!」

「あがが苦しい苦しい!!!!」

クソガキの暴言で頭に血が上ったらしいクソジジイが、クソガキの細い首を絞め上げる。

「悪かった！　悪かったから放せよ!!」

「フン！　反省の欠片も年長者への敬意も微塵も見えぬわ！　このまま縊り殺してやってもよいのだぞ!?」

「ごめん！　ごめんってば！　悪かった！　ちゃんと話聞くからさ!!　うぎゃっ！」

クソジジイの本気を聞き取ったか、クソガキが真剣に詫びを入れはじめると、クソジジイは

ゴミでも捨てるようにクソガキを地面に放り出す。
「げほっ……げほっ……ほ、本気で首絞めんなよ……カミーオ」
薄暗い小屋の中で砂利と砂埃で背を汚した少年悪魔は、涙目になりながら自分の首を絞めた悪魔を見上げる。
カミーオと呼ばれた手足が人間、頭が鳥、背に翼を持ち全身を漆黒の羽で覆われた老悪魔は、老いて尚鋭さを失わぬ眼光と嘴で、吐き捨てるように言った。
「敵と自分の実力差も分からんくせに、吾輩に暴言を吐くなど五百年早いわ！　よいかサタン！」
カミーオは、咳き込みながら立ち上がる少年悪魔を厳しく見下ろした。
だがサタンと呼ばれた小柄な体に二本の角と小さな翼、そして羊の蹄の下半身を持った少年悪魔は、カミーオの魔力と迫力に涙目になりながらも怖気づくことなく正面から見返してくる。
「吾輩にも勝てぬ貴様があの暴れ者を倒そうなどと、それこそ千年早い!!　バカなことを考える前に、もっと現実的に勢力を拡大することを考えんか！」
「むぅー！」
サタンはさらに数回咳き込んで息を整えると、カミーオに向かってまた、首を絞められる前と同じ熱量で反論した。
「だからカミーオこそ俺の話きちんと聞けよ！　誰が倒すなんて言ったよ！　味方に引き入れ

るって言ってんだろ!!」

「まだ分からんのかこの愚か者が！　ああ、少しでもこのバカガキの力を見込んでしまった吾輩の頭も耄碌していたか！」

「耄碌してもいいから聞けよ！　あとバカガキって言うなこの鳥頭！」

悲嘆に暮れはじめたカミーオに、サタンはまたも不用意な一言を吐き、

「もう許さんぞこのクソガキ!!」

「うるせー！　何が魔鳥将軍だこの鳥頭の石頭のクソジジイ!!」

再びキレたカミーオとの壮絶な乱闘が始まる。

「ちくしょー!!　放せクソジジイ！　尻尾掴むな!!」

「いいや今度という今度ばかりは貴様の話を聞くわけにはいかぬ!!　ようく聞けサタン！」

カミーオはやや息を切らせながら、つまみ上げた少年悪魔の顔を正面から睨みつける。

「あのルシフェルを、そこらのハグレ悪魔と一緒にするな！　奴は、たった一匹で貴様の一族を滅ぼした独眼刻印鬼の集団を無傷で壊滅せしめるほどの実力者なのだぞ！」

「それは何度も聞いたよ!!」

「なら何故分からん！　あのルシフェルは貴様の一族、黒羊族を纏めて十は滅ぼせるほどの悪魔なのだ！　そんな相手に貴様一人がのこのこ出ていって、勝負になると思うのか！」

「だーかーらー!!」

尻尾をつまみ上げられたままでサタンはじたばたと手足をばたつかせる。
「勝負しに行くんじゃねぇってのに!!」
「接触すること自体が危険だと言っておるのが分からんのか!!」
こうして二人の言い争いと殴り合いは、平行線を辿ったまま振り出しに戻る。

その悪魔は、かつて魔鳥将軍と呼ばれていた。
黒い翼と鋭い嘴。翼と同じ色の羽に覆われた肉体を持つパハロ・ダェニィーノ族の族長カミーオは、あらゆる魔術に通じ、概念送受と呼ばれる魔術を用い全ての悪魔の言葉を解し、さらには音に聞こえた剣の達人でもあったらしい。
らしい、というのは、サタンにその情報をもたらしたのがカミーオ本人なので、どこまで本当なのか確認のしようがないのである。
そもそもパハロ・ダェニィーノ族の悪魔としての力は、飛翔能力を除けば取り立てて注目するところもない上に、魔力を大きく失うと肉体が極端に収縮する性質を持っていた。
もちろん収縮することには意味があり、小型化することで敵から逃げたり隠れたりするのに有利にはなる。
だが先天的に得ている能力としても、魑魅魍魎うごめく魔界で生き残る戦略としても、極め

て後ろ向きな性質であることは否めない。

サタンが初めて出会った時点でカミーオはかなりの老齢に達していた。

パハロ・ダェニィーノ族自体も個体の弱さがそのまま種族の弱さに反映され、全体で二千人程度しか生存していない。

おまけに戦士と呼べる力を持つ者はさらにその四分の一の五百人程度。

その中で一番強いのが未だに老兵カミーオなのだから、もうパハロ・ダェニィーノ族の未来は推して知るべしであった。

それでもカミーオは、サタンがたった一人で魔界を彷徨する中で、初めて出会った『話の通じる悪魔』であったことも確かだ。

カミーオが語ることには『彼女』がサタンに語った事柄と重なる話も多かったし、『彼女』からも、折につけてカミーオの名を聞かされてきた。

カミーオもまた、弱小部族の少年悪魔には相応しくない程の知識と知性を持ち合わせたサタンを高く評価しており、既に二人が出会ってから十年が経とうとしていた。

「ぜー……はー……よいかこのクソガキ……」

「ひー……はー……な、なんだよこのクソジジイ……」

疲労困憊で地面に倒れ伏した二人は、息を切らしたまま睨み合う。

「貴様の『魔界の現状を変えたい』という思いは分かる。だが今の貴様は到底その器ではない。

小さな道も一歩からと言うであろう。大人しく吾輩の言うことを聞いて、今は勢力の拡大と地力の底上げに勤めんか」

「そんなこと言ったってよー」

サタンは口から血の塊を吐き出しながら言う。

「もうこの辺りのハグレ悪魔は大体潰しただろ？　でもどいつもこいつもパハロの若い戦士達と似たり寄ったりだ。このまま次はどこに行くって言うんだよ。勝てるような相手が他にいるのか？」

「……」

サタンの問いに、カミーオは即答できない。

サタンに言われるまでもなく、カミーオにも分かっていることだが、パハロ・ダェニィーノ族が衰退した原因の一つが、周辺の豪族の勃興なのだ。

カミーオ自身、パハロ・ダェニィーノ族の中では突然変異と呼んで差し支えない程に強い悪魔として生まれた。

かつてのカミーオは敵対する部族丸ごとを単独で撃退できるほどの力すらあったらしいのだが、近年になってカミーオのような突然変異と呼べる悪魔が、周辺で多く現れはじめている。

カミーオの力が衰えはじめると同時に周辺豪族の侵攻が始まり、パハロ・ダェニィーノ族は一気に数を減らした。

サタンの言うようにここ数年のパハロ・ダェニィーノ族は『ハグレ悪魔』と呼ばれる、部族を為さず単独で生きている者達に敢えて戦いを挑み、殺さずに勝利して一族の護衛戦力として集落に住まわせるということを繰り返してきていた。

おかげで集落全体の戦力は微増傾向にあるが、それでもカミーオを越える力の持ち主は未だ現れない。

もちろん現れてしまえばカミーオの天下は終わり、下手をすれば彼自身の命が危うくなるわけだが、今カミーオの下にいる者達は、カミーオの力が無ければ周辺の脅威から身を守る術すら持たない者の方がずっと多いのである。

そしてもちろんサタンも、カミーオの庇護の下で生き永らえている悪魔の一人なのだ。

「あんまり遠くまでハグレを狩りに行くと、豪族連中に察知されて潰される。もう安全に活動できる範囲には、誰もいないだろ？」

サタンはそう言うと、首だけある方向に向ける。

「俺達のいる『巨岩の荒野』は西の蒼角と東の鉄蠍の勢力の丁度境目にある、いわば空地だ。で、なんで空地になってるかって言えば、お前が敵わないっていうそのルシフェルって奴を恐れて、誰も近づいてこないわけだろ？」

サタンは指先で砂の地面にざっくりとした周辺の勢力図を書く。

カミーオは目だけでその指先を追いながら、嘴の奥でサタンに聞かれないように唸った。

ここまで何かとサタンの浅慮を糾弾してきたカミーオだが、この年端もゆかぬ少年が魔界ではごく一部の部族にしか残っていない失われた文化「文字」をごく自然に用いることが、既に尋常ならざる事態なのだ。

「ここが空地になってるのは蒼角や鉄蠍が俺達を恐れてのことじゃないってのは、俺達が一番よく分かってるだろ。もし今巨岩の荒野の北……この、砂塵の荒野からルシフェルにどっかに行かれたら、俺達も危ういじゃん」

「……うむ」

カミーオは苦虫を噛み潰したような顔で首肯する。

パハロ・ダェニィーノ族の土地から西方に根城を構える蒼角族は、見上げるような筋骨隆々の肉体と鈍色の鬣が特徴の、猛牛の頭を持った力自慢の豪族である。

人口もパハロダェニィーノ族全体の倍以上と見られ、剛毅な外見にも関わらず繊細な魔術も得意とする戦士の一族だ。

一方の鉄蠍族は、一人一人の力は蒼角族と比べるべくもないが、一族の名が象徴する通り、全身を覆う鎧のような甲殻の防御力と、二股に分かれた禍々しい尾の攻撃力は決して侮れない。

戦士の数に至ってはもうパハロ・ダェニィーノ族と比べるのも馬鹿馬鹿しいほどであり、間違いなく魔界北辺地域随一の大豪族である。

その二大勢力に挟まれて細々と生きているのがパハロ・ダェニィーノ族やサタンの出身部族

である黒羊族のような弱小部族、さらには話題に上がっている『ハグレ悪魔』と呼ばれる部族を為さない悪魔達である。

弱小部族やハグレ達は、余程のことがなければ蒼角や鉄蠍のような豪族を刺激しないよう細々と生きるのが常である。

ところが、先程からサタンとカミーオが言い争っているルシフェルというハグレ悪魔は、普通のハグレとは強さの次元が違うという。

蒼角族や鉄蠍族の領地でもハグレや弱小部族の土地でも構わず飛び回り、好き勝手に殺しまわってもはや自然災害として認識されている。

北辺地域の二大豪族が多くの被害を受けながら有効な反撃をしていないところを見ても、ルシフェルの強さが如何に桁違いかが推し測れる。

だが普通なら蒼角族や鉄蠍族以上に触れてはならないそのハグレ悪魔に、サタンは接触しようと言っているのである。

「だったらイチかバチか、ルシフェルがどっか行っちまう前に引き入れるしか俺達が生き残る道はねぇぜ？　このままこそこそハグレを集めたって、何時まで経っても蒼角や鉄蠍には敵わない。むしろ」

と言いながら、サタンはルシフェル、蒼角、鉄蠍と書かれたポイントを指し示していく。

「蒼角、鉄蠍、ルシフェルのどれか一つにでも目障りだと思われたら、その瞬間息の根止ま

るぜ？　それともパハロん中から、昔のカミーオぐらいの奴が現れるまで待つ？　そいつが俺やお前に取って替わろうとするバカだったら、その瞬間全部パァだ」

「……」

カミーオは今度こそ、はっきりとした声で唸る。

サタンの言うことは、一点の反論の余地も無いほど筋が通っている。

そして理論立った言葉で相手を納得させる能力が、この魔界に於いてどれだけ稀有なことかを、カミーオはよく知っている。

この稀有さが、魔界に住むほとんどの者には理解されないことも。

カミーオとサタンの出会いは、大混乱の中にあった。

鉄蠍族の当代の族長は、領土的野心を隠そうともせず周辺の部族を貪欲に侵略し、その全てを根絶やしにしてきた、魔界の悪魔には当たり前の気性の持ち主だった。

パハロ・ダェニィーノ族はその鉄蠍族に目をつけられて、攻め滅ぼされる寸前だったのである。

鉄蠍族に押し潰されそうになっているカミーオの戦士団を救ったのが、他ならぬサタンだったのだ。

鉄蠍族の侵攻を認識したカミーオは、一族の戦士を率いて返り討ちにするべく打って出たが、やってきた鉄蠍の戦士団の数はカミーオの予想を大きく上回っていた。

たかだか数百程度のパハロ・ダェニィーノの戦士を撃ち滅ぼすために、まさか四千もの敵が出てくるとは思いもしなかったカミーオ達は大いに苦戦し、犠牲者も多く出て、遂には撤退するしかなくなった。

だが、鉄蠍は追撃の手を緩めず、必死で逃げるもこのままでは一族の土地まで鉄蠍の殺戮の手を引き連れていくことになってしまう。

万事休したカミーオ達だったが、そのとき自分達が逃げる方向から巨大な砂煙が接近していることに気づいた。何か途轍もなく大きな一団が、逃げるカミーオ達目がけて接近してくる。

当然追いすがっていた鉄蠍族もそれに気づいたが、カミーオも鉄蠍の戦士も、一様に驚いたのが、その砂煙がどうやらパハロ・ダェニィーノ族の援軍らしいということだった。

空を覆うほどの砂煙を上げる軍勢が近づいていると錯覚した鉄蠍の一隊は、逃げることはしなかったが、その場で停止し追跡を中止した。

その隙に一気に距離を離して逃げ切ったカミーオが見たものは、地面すれすれを飛翔しながら必要以上に羽ばたいて地面の埃を巻き上げている、ほんの百人ほどのパハロ・ダェニィーノの族の若者達。

そして彼らを率いている見知らぬ黒羊族の少年悪魔だった。

「あんたがカミーオだな？　部族の土地を長いこと留守にしやがって。探したぜ」
得意げにそう言って見せた幼いサタンの顔を、カミーオは忘れられない。
「どうだ？　大軍勢に見えただろ？」
確かにカミーオですら、一瞬どこにこれほどの同族が隠れていたのか、と錯覚するほどだった。
それほどに、カミーオ自身もまたサタンの立てた戦略に嵌っていたのだ。
いや、戦略を立てる悪魔などというものの存在を、長い間考えすらしなかった、と言った方が正しい。
「今のうちに逃げるぞ。鉄蠍がもっとでかい軍勢を寄越したら今度こそ潰される」
「しかしこれほど派手なことをして、逃げ切れるはずが……」
「何言ってんだよ爺さん」
パハロ・ダェニィーノ最強の戦士を向こうに回して、少年悪魔は鼻を鳴らした。
「鉄蠍族が探すとすればそれは『空を隠す砂埃を巻き起こすほどの悪魔の軍勢』だ。たかだか百人程度の弱小悪魔の集団なんて『探してもいないもの』を見つけられるはずないだろ」
そうしてカミーオやパハロ・ダェニィーノ族の戦士達は、無事鉄蠍族の猛者達から逃げ切ることに成功したのである。
その後しばらくは鉄蠍族の攻撃が散発的に起こったものの、その都度サタンの機転で逃げる

ことができた。

カミーオの知る限り、ただただ相手を潰すための攻撃が全ての魔界に於いて、知恵で力の不足を補い敵に対抗しようとした者は、たった一人だけだった。

そしてカミーオは、この自分の何十分の一も生きておらず、自分が剣を一振りすればあっさり命を断てるような幼い悪魔に、そのたった一人の面影を見たのである。

カミーオが、そもそも何故サタンがパハロ・ダェニィーノ族の土地へとやってきたのかを問うと、サタンはこともなげに言った。

「あんたが話の分かる奴だって、人に聞いたんだよ」

そして次にサタンの放った一言は、決定的にカミーオの気持ちを揺さぶった。

「俺についてくれば、お前に魔界の新しい姿を見せてやる」

カミーオはしばし、言葉を返すことができなかった。

そしてようやく絞り出した答えが、

「……貴様にその言葉はまだ早い。吾輩が、貴様を鍛えてやる。吾輩の期待に応えられぬようなら、即刻貴様の首を撥ねる」

という負け惜しみのような言葉だけだった。

実際サタンは、カミーオも驚くほどの知識や頭の回転を見せるが、それを用いる力にはまだまだ修練の余地があった。

そしてサタンはカミーオの修練を受けて当初の期待以上に戦闘力、魔術共に大きな成長を遂げる。

だがそれでもまだカミーオの力を上回るレベルではないし、ルシフェルなど言うにも及ばない。

自らの老いをこれ以上ないほど自覚しているカミーオは、魔界を変えるなどという大それたことを考えず、いずれ自分の代わりにパハロ・ダェニィーノ族を守ってくれればそれでいい、くらいにしか考えていなかった。

だが今、サタンは、周辺情勢に大きく斬り込もうとしている。

ルシフェル、蒼角、鉄蟻の睨み合いの均衡を崩そうというのだ。

それがどれほど無茶なことか、分からないわけではないだろうに。

カミーオの意識は一瞬だけサタンと出会った頃の過去に飛ぶ。旧き日の面影をまたかすかに目の前の少年に重ね合わせている自分に気づいた。

勢力図を見下ろして周辺の情勢を分析するサタン。

その分析は一切の疑いを挟む余地も無くカミーオの胸に入ってきた。

現在のサタンとカミーオ、そして周辺のハグレ悪魔達を併呑したパハロ・ダェニィーノ族は、

三すくみの睨み合いの中で雪隠づめになっているのだ。

三すくみの一角の動静次第では、なんら主体的な行動も取れず、何かのついでのように潰されてしまうこともあり得る位置にいる。

そしてその均衡を一番崩しそうなのは、サタンがこれから接触しようとしている最強のハグレ悪魔、ルシフェルだ。

鉄蠍も蒼角も、大きな軍勢を抱えているため身動きは容易ではないが、ルシフェルはハグレ故の気軽さで、明日にはこの地を離れていくかもしれないし、逆にどこかに要らぬちょっかいをかけるかもしれない。

そうなれば周辺情勢は一気に動き、サタンとカミーオが根城にする土地はあっという間に蒼角と鉄蠍が全面衝突する戦場へと変わるだろう。

悪魔の豪族同士の戦いは、単純に滅ぼすか滅ぼされるかの二択しかない。

お互いがお互いを殲滅するまで戦いは終わらない。

戦いは終末に近づけば近づく程に激しさを増し、そしていずれか片方が全滅するのだ。

戦士達が全滅した部族は黒羊族のようにあっという間に根絶やしにされる。

特に蒼角も鉄蠍も他部族に対して苛烈な攻撃を仕掛けることで有名であり、一度火蓋が切られれば、北辺地域の他種族をも殲滅するまで戦いは終わらないかもしれない。

目の前の敵を倒すことだけを是とする悪魔同士の戦いには『戦略的撤退』や『犠牲は最小

限』といった考え方は存在しない。
ただ、暴威を振るう。ただ、相手を滅ぼす。
ただ、相手の命を奪う。ただ、自分と違う姿形の者を滅ぼす。
最終的にその地に命を保持したまま立っていた者が勝者なのだ。
知略に長けている自覚のあるカミーオですら、サタンに出会う直前の行動は『撤退』ではなく命惜しさゆえの『逃亡』でしかなかった。
そこにはなんら有効な策など存在せず、敵の牙から逃れたい一心しかなかい。
「貴様の言うことも分かる、だがなサタンよ」
カミーオは少しだけ声を抑えて言う。
「吾輩や貴様がこうしているのも、貴様の言葉に乗って有象無象とはいえハグレ悪魔達がパハロ・ダエニィーノの者達と共に暮らしていることも、奇跡と呼べる事態なのだぞ。それも吾輩の力あってのことで、誰かがわずかでも吾輩の力を上回れば、それこそ貴様の言うように我らを廃そうと考えはじめてもなんら不思議ではない。そしてあらゆる奇跡を起こしつつあのルシフェルが貴様の言うことに納得したとして、我らの寝首を掻かない保証がどこにある」
「……」
「悪いことは言わぬ。今は雌伏の時だ。貴様の力にはまだ伸びしろがある。ルシフェルとは言わずとも、いずれ吾輩と事を構えられる程度には鍛えてやれるかもしれん。そのときまでいら

ぬ好奇心で災厄を引き寄せるな」

カミーオの言葉を聞いているのかいないのか、サタンは眉根を寄せて地図をじっと睨んでいる。

そのしかめっ面は、カミーオの理路整然とした言葉に納得したのだろうか。

否、そんなはずがなかった。

カミーオの悪魔として最大限発揮した理性的な分析などまるで耳に入っていなかったかのように、サタンは言った。

「なぁ、強い強いって言うけど、実際ルシフェルって、どれくらい強いんだ？」

「……ンのクソガキ吾輩の話を……っ！」

「待てって！　聞いただけだろ！　分かってるよ、正面から行ってどうにかなる相手だなんて俺も思ってないー　ただ、全盛期のカミーオより強いって言われてもピンと来ねぇんだよ。実際どういうことができる奴なわけ？」

「本当に分かっておるのだろうな」

カミーオは疑いの眼差しでサタンを睨むも、自分が知る限りのハグレ悪魔ルシフェルの情報を思い出す。

「……確か、高濃度魔力の熱線を得意技としていたはずだ」

「熱線？」

「そう。岩も魔力障壁も貫く神速の熱線。どのような技をもってしても砕けぬと噂されていた鉄蠍の戦士の肉体を、苦もなく貫くほどだとか」
「へぇ。あのカタい連中を」
「吾輩が一度相見えたときには、その翼に似合わぬ飛翔の速さにも愕然としたものだ」
「翼で空飛ぶ奴なのか……そんなに速いのか？」
「うむ。およそ飛翔に適しているとも思えぬ姿をしておるくせに、飛翔に特化した肉体を持つ吾輩よりも空戦が巧みだった。空戦の最中は例の熱線の威力は弱まっておったようだから、恐らく魔力で推進力を強化する術を持っているのだろう」
「魔力で推進力？　どういうことだ？」
「詳しいことは分からんが、あの速さは断じて翼によるものだけではなかった。そうでなければあのように空気抵抗を受けやすい体があれほどの速度を出すとは思えん」
「ふぅん。魔力で飛ぶねぇ……考えたこともなかったな」
サタンはそう言いながら、自分の背にこぴりつくように生えている小さな翼をぴくぴくとうごめかせる。
黒羊族にも翼はあるが、これで飛翔できる者は一族でもわずかしかいなかった。
「肉弾戦も強かった。吾輩が剣を振るってようやく互角、といった感じで、もし素手同士であれば吾輩も負けていただろう。体つきも決して大悪魔には見えぬだけに不思議だがな」

「へぇ。小さいんだ。蒼角族や鉄蠍族がビビるくらいだから、でっけぇ奴なのかと思った」
「今の貴様とさして変わらん」
「へぇ、どんな見た目してんの」
これまですらすらとサタンの問いに答えていたカミーオが、一瞬言いよどむ。
「……うむ、それがの」
「うん？」
「……吾輩は、ルシフェルと同じ姿をした悪魔を、一人しか知らぬ」
「ん？　どういうことだ？」
「魔界のどの悪魔とも違った姿をしているということだ。さらに言えば、同じ姿形をしていた者は、吾輩の知る限り一人しか存在せず、その一人は遥か昔に死んでおる」
「死んだ奴の話なんかいいよ。ルシフェルはどういう見た目なんだって聞いてんの」
「……サタンよ」
「あ？」
「貴様、ニンゲン、という種族を知っているか？」
その瞬間、サタンが一瞬、虚を突かれたように息を吸い込んだのを、カミーオは見逃さなかった。
「知っておるのか？」

「……いや、それで？」
サタンは弱く否定したが、そんな嘘を見破れないカミーオではない。
サタンは、『ニンゲン』を知っている。
弱小部族出身の幼い悪魔のくせに、一体どこからそんな知識を得ているのだろうと思うことが度々あるが、今回のこれには久しぶりにカミーオも驚かされた。
「……ルシフェルはな」
「ああ」
「その『ニンゲン』という種族に、吾輩のような翼を背負った外見をしておる」
「……へぇ」
その瞬間、サタンの目に知性の光が灯った。
「なぁカミーオ。そのルシフェルって奴は、全盛期のお前が真正面から戦っても勝てなかったくらいに強いんだよな」
「うむ。先程から何度もそう言っているであろう」
「じゃあなんでお前今生きてるんだ？」
「それは……何？」
カミーオは応えようとして、思考が止まる。
「聞いてるとなまじの鉄蠍や蒼角よりもよっぽど厄介そうなのに、なんで負けたお前は今生き

てるんだ？」

「う……む、それはきっと、吾輩の力が奴の予想を上回っていてだな」

「でも負けたんだろ」

「う……む」

適当に言いくるめようとするが、サタンはカミーオのプライドを容赦なく砕きにくる。

「それにだ、どうしてそんなに強いのに、ルシフェルは未だにぐずぐずしてるんだ？」

「ぐずぐずとは……」

「独眼刻印鬼を纏めてぶっ殺せるほどの力があるのに、どうして蒼角にも鉄蠍にも本格的に喧嘩を売らないんだ？　あいつがいる辺りのハグレは皆殺しにされてるらしいけど、空飛べるってことは活動範囲も相当広いはずだろ？　そいつが一人だけで好き放題やらかす普通の悪魔だったら、この辺がこんな静かなわけがない。もっと色々な混乱が起こってるはずだ」

「う、うむ……それはそうだが……それはルシフェル本人でないと……」

「なら聞きに行くしかねぇな」

「……うむ……ん!?　待て待て小童！　またその話を……」

「待てって！　今の俺の話聞いてたか？　俺が見たところ、ルシフェルは普通の悪魔じゃない。『考え』がある」

「なんだと？」

「ルシフェルは蒼角や鉄蠍や、それこそ俺達とも違って、領土的な野心で動いていない。ルシフェルが動く理由は、もっと別にある。そこを突けば……」

サタンは不敵な笑みを浮かべて言った。

「むしろこの辺のハグレ悪魔達より、ずっと与し易い相手かもしんねぇぜ？」

何をどう考えれば与し易いなどと言えるのか、サタンの言動はカミーオの理解を完全に越えていた。

カミーオはそれから丸一日を費やして、ルシフェルとの接触を思い留まるよう説得したが、

「……あんのクソガキがああ！　吾輩があれだけ言ったのに!!」

翌日、目を覚ましたカミーオがいくら探しても、サタンの姿はパハロ・ダェニィーノ族の住処のどこにも見当たらなかったのである。

「おい！　あの小童はどこに……」

カミーオは手近な所にいたパハロ・ダェニィーノの若者を捕まえて問い詰めたが、

「……何？」

若者の嘴から出た言葉は、予想だにしない反応だった。

※

「もー少しだと思うんだけどなー」

サタンは小高い丘陵から周囲を見回す。

パハロ・ダェニィーノ族の住処から走ること一晩、サタンは自分が既にルシフェルの勢力圏内に入っていることだけは確信していた。

地面に陣地の境目があるわけではないが、辺りの空気が違うのだ。

大気の臭いや気温、気配というものは、一つ一つはあやふやな要素だが、全て集まったとき、それは明確な情報としてサタンの中に貯えられてゆく。

巨岩の荒野からさらに北方。固く乾いた砂の表面にかすかな草と、背の低い樹木が辛うじて張りついているような砂塵の荒野が、ルシフェルが塒にしているという土地であった。

「あれかな。ナメられてんのかな、俺」

ルシフェルという悪魔が本当にカミーオの言う通りの強さを持っているとしたら、自分の接近くらいは感知していても良さそうなものだ。しかしカミーオが危惧したような先制攻撃の気配は微塵もない。

注意深く遠くを眺めてみても、まばらに生える低木のどこかにルシフェルがいるような気配もない。

ルシフェルは強い悪魔を複数相手にできるほどだから、逆に自分のような弱い悪魔など捨て置くつもりなのかもしれない。

「それとも、もうどっか行っちゃったかな。だったらやべぇなぁ」

いないならいないで問題なのである。今この一帯はルシフェルの影響があるから平穏が保たれているのであり、ルシフェルの力が消えた途端に一気に大勢力同士の戦場になってしまうこともあり得るのだ。

「いや、それはマズい！　今それはマズい。なんとしてもルシフェルにはいてもらわねぇと！」

慌てたサタンはそれからまた半日ほど砂塵の荒野を駆け、ルシフェルらしき悪魔の影も形も見つけられず、いよいよ最後の手段に出た。

半日走っても空気の気配が変わらないということは、この空気を作ったルシフェルはまだこの地にいて、サタンの来訪も察知していて、その上でなんらかの理由で無視しているのだ。

目に映らないだけで、姿を消す魔術を使い侵入者を監視している可能性だってある。

「……よし！　となりゃぁ！」

サタンは腹を括ると、両手で頬を叩いて大きく息を吸い込む。

「おーい!!　出てきてくれよー!!」

そして、大声で相手を呼ぶという、非常に原始的な手段に訴えることにした。

周辺に、サタンを襲うようなハグレ悪魔はルシフェル以外にはいない。ルシフェルが全て殺してしまったからだ。

「ルシフェルー！　ちょっと話があるんだけどさぁー！」

人間の子供が友達を遊びに誘うような気軽さで、サタンは大声でルシフェルを呼びまわる。
「俺、迷い込んだわけじゃないんだよー！　お前に会いにきたのー！　聞こえてるんだろー！　出てきてくれよー！」
だが答えは無い。眠っているのだろうか。睡眠を必要とする悪魔なのだろうか。
「るしふぇーる!!　るしふぇるやーい!!　出てこいよー！　俺がお前を倒せるような悪魔じゃないってことくらい分かるだろー！　なんにもしねぇからさー！　なー！」
サタンは諦めずに、ひたすら大声を張り上げる。
絶対にルシフェルはこちらの動向を見ている。動向を見て多少なりとも警戒しているからこそ、塒と思しき土地にこれほど無遠慮に踏み込んでも、カミーオを圧倒するほどの魔力の気配を感じさせないのだ。
つまり、ルシフェルは近くにいる。
「なー、俺さー」
サタンは思い切って、その一言を口にした。
「お前が最高の暇潰しできるアイデア持ってきたんだよー!!」
その瞬間だった。
「うわっ!!」
唐突に無数の紫光の魔力球が、瞬く間もなくサタンを包囲するように出現したではないか。

一つ一つが自分を一瞬で消し炭にするほどのエネルギーを持っていることは一目瞭然で、サタンは身動きが取れなくなり、目が動く範囲だけを必死で見回す。

「……何か、気に障ったか？」

見える範囲に、悪魔の姿は見えない。だがまずは、ルシフェルを食いつかせることには成功したようだ。

後はどのようにして釣り上げるか、だが……。

「なんなの、お前」

声は、自分の真上から降りてきた。

「……上、向いていいか？」

サタンは声の主を誰何するよりも先に、自分の行動の可否を問う。

なぜならルシフェルはサタンよりもずっと力の強い悪魔で、妙な動きをすれば即座に命を奪われかねない。あとは単純に、上空を見上げることで自分の後頭部が魔力球に触れたりしないかどうか心配だったのだ。

「いいよ。ただ、変なマネしたら目ごと頭ぶち抜くよ」

「分かった。何もしない。見上げるぞ」

サタンは素直にそう言いながら、恐る恐る首を後ろに倒して真上を見上げる。

「ルシフェル……なのか？」

「お前が呼んだんだろ」
「や、そりゃそうなんだけど」
未だ指一本動かせないが、なんとかルシフェルの姿を捉えることができた。
本当に小柄な悪魔だった。
空から降り注ぐ太陽の逆光で面差しはよく見えないが、体格はサタンと変わるまい。
特徴的なのは背から伸びる翼だけで、角が生えていたり爪が巨大だったりすることもない。
全身を包む黒く長い上着は、サタンの見たことのない形をしていた。
そしてその姿は、思った以上にサタンの記憶の中のある存在に酷似していた。
「で、なんの用？　昼寝してるとこ叩き起こされたんだ。つまんない話だったらお前消し炭にして二度寝するから」
「あ、話していい？」
「いいよ」
いちいち行動に許可を求めるのも、身の安全を確保するためだ。
魔力球の放射熱で全身に汗をにじませながら、サタンはゆっくりと言葉を選ぶ。
「とりあえず、自己紹介させてもらう。俺はサタン。ここの砂塵の荒野の、少し南に行ったとこにある岩がごろごろしてるとこに住んでる。今日はあんたに話があって来た」
「話があるのは分かったからさっさと本題に入って。僕気が短いんだ」

ルシフェルがそう言った瞬間、サタンの尾が魔力球に触れて先端の毛先が焦げる。
それでもサタンは微動だにせず、真っ直ぐルシフェルを見、言った。
「……俺と一緒に、遊ばないか？」
「は？」
「暇してるんだろ？　遊ぼうぜ」
「……お前が何言ってるかよく分からないんだけど」
ルシフェルは首を傾げる。
「言葉通りの意味だよ。俺と一緒に遊びに行こうぜ」
「……何、僕と戦おうっての？」
「違うって。俺がお前に敵うわけないだろ。俺とお前と、二人でヨソに遊びに行くんだよ。お前、今ちょうど暇なんだろ？　楽しいこと、しに行かないか」
逆光で見えないルシフェルの表情が、このとき初めて動いた気がした。
「楽しいこと、ねぇ。今のところ適当にその辺の悪魔殺してるだけでそこそこ楽しいんだけど、それより楽しいことなんだろうね？」
「もし楽しくなかったら、そのときは俺を殺せば『そこそこ楽しい』ことだけは保証する」
「……面白いね、お前」
その瞬間、サタンを取り囲んでいた魔力球が現れたときと同じように一斉に消滅する。

「ぶはあぁっ!!」

サタンは詰めていた息を一気に吐き出し、脱力してその場にへたり込んだ。

「なんだよ、あんな程度でビビってたわけ?」

息を荒くするサタンの目の前に、ルシフェルが降り立つ気配がする。

その音はどこまでも軽く、本当に小柄な悪魔なのだということを改めて実感する。

「し、仕方ないだろ……俺、別に大して強くないんだからさ」

「ふぅん。そんな雑魚が僕にどんな楽しみを提供してくれるっていうの?」

サタンはそのとき初めて、自分の正面に立つルシフェルの顔を見た。

幼い。

それが第一印象だった。

魔界の悪魔の顔立ちというのは種族によってまちまちだが、顔の構造が比較的自分に近いルシフェルは、非常に幼く見えた。

とても蒼角や鉄蠍が警戒し、カミーオを遥か凌駕する力の持ち主には見えず「彼女」と比べても、明らかに若いのが目に見えて分かる。

だがそれでも、カミーオの全盛期と刃を交えたという話が真実なら、見た目通りの若さでは当然あるまい。

「彼女」も自分の年齢について、そのようなことを言っていた。

だが今は、ルシフェルの見た目のことは関係ない。なんとかルシフェルを話し合いの土俵に下ろすことには成功したが、依然として一寸先が死であることに変わりはない。

「……変化だ」

サタンは慎重に言葉を吟味しながら、ルシフェルの問いに応えた。

「変化？」

「そうだ。お前、相当強いって聞いたし実際そうらしいけど、普段どんな風に悪魔と戦ってるんだ？」

「どんなも何もないよ。他の連中と変わらない。目障りだと思ったとき、敵対されたときに殺す。それだけさ」

「でも、それなりに戦いは楽しいだろ？」

「まぁね。僕強いし。一方的に相手をボコボコにできるのは、やっぱり楽しい」

「俺はお前が楽しみたいと思ったとき、必要な状況や敵を、お前が望むだけ用意してやることができる」

「……へぇ？」

乗ってきた。こちらの言葉にわずかながらも興味を持ったようだ。

「もちろんお前がそのとき充実してて、やりたくないと思えばそのときは何もしないでいい」

「それがお前の言う『遊ぶ』ってこと？」

「いいや。それじゃ俺がお前のために、ただせっせと都合のいい生贄を用意してるだけだろ？」
「そりゃそうだ。ってかお前、見たとこまだチビっぽいのに随分複雑な言葉知ってるね？」
「よんどころない事情があってね」
サタンは軽くはぐらかす。
別に話してしまっても問題ないのだが、ささやかな秘密を作ることが相手の興味をわずかでもこちらに寄せる一助になる。
「俺とお前の力で、魔界の戦いを変える。魔界の悪魔が俺とお前の戦いを真似するようになる。それで最終的に、俺達が魔界のトップに立つ。もちろん面倒なことは俺が引き受けるから、お前は好きなときに戦ってくれればそれでいい」
「魔界の悪魔が僕とお前の戦いを真似るようになる？　そんなこと、どうやって」
「言葉で説明しても、多分分かってもらえない。俺と一緒に来てくれれば、身を以て分かってもらえると思う」
「……」
ルシフェルは、こちらの言葉を吟味するように少しの間黙り込む。
「ふん、まぁ、確かにちょっとの間の暇潰しにはなったよ」
「……は？」
本当に少しだけ考えた様子のルシフェルは、一つ頷くとサタンに向かって指を向ける。

その指先に魔力が集中するのを感じ取って、サタンは思わず身構える。
「でもさ、やっぱ色々面倒くさそうだからいいや。『そこそこの楽しみ』で我慢しとく。かったるいし」
「い、いや、その」
「そうだなぁ、お前さっき、僕が戦いたいときに戦いたい敵を用意するって言ったけど、僕今お前を殺すか、誰かと戦ってそこそこ楽しみたいんだ。今すぐ敵用意しろよ。そうじゃなきゃこの話はおしまい。あと十秒ね」
先程まで話に乗ってきているように見えたのに、次の瞬間にはあっさり掌を返す気まぐれぶりに、サタンはいっそ感心する。
もちろんこれくらいでなければこの魔界では生き残れないし、これほど長く『会話』できたこともある意味奇跡なのだ。
「今すぐ、敵を？」
「うん、そうだね。十匹くらい悪魔を都合してほしいかな。ま、できれば、だけどね」
残り十秒で十体の悪魔。
ルシフェルが制圧して悪魔の気配が微塵も無いこの地で、そんなことは不可能である。
「ま、お前が面白い奴だったことは認めてやるよ。でもできないことを言う奴は好きじゃないんだ。僕自身、そんなに頑張るタイプじゃないし、お前が僕を楽しませ続けてくれる保証なん

かどこにも無いしね」

今やはっきりと、ルシフェルの指先の魔力球は、圧倒的な熱量でもってサタンの体を貫こうとしていた。

「はい十秒過ぎた。ばいばい、雑魚悪魔くん」

ルシフェルの顔がこれ以上ないほど嗜虐的な笑みに染まる。だが、

「誰ができないなんて言った？」

「あ？」

死の光を目の前にして尚、不敵な笑みを浮かべるサタンの態度を不審に思ったルシフェルが眉根を寄せたときだった。

「ぐっ!?」

轟音と共にルシフェルの肉体に衝撃が走り、姿勢が揺らぎ口から呻き声が漏れる。

何が起こったかを確認する間もなく、空気を切り裂いて何かが飛来する音が連続して聞こえてきた。

「な、なんだよ!?」

ルシフェルはサタンから完全に視線を外し、背の翼を広げて上空に逃れる。

すると一瞬前までルシフェルが立っていた場所には、錐のように尖った巨大な岩が無数に降り注ぎはじめたのだ。

「おわわわわわっ！」

サタンも慌ててその岩塊から逃れる。

先程ルシフェルを襲った衝撃は、岩塊の一つが背を直撃したものだった。

「あれは……鉄蠍族!?」

ルシフェルは驚いて、岩塊から逃げるのに必死な少年悪魔を見下ろす。

攻撃を仕掛けてきたのは、周辺にいるはずのない鉄蠍族の戦士団。正確な数は分からないが、気配からして明らかに十体はいるだろう。

「ま、まさか……!?」

確かに自分は十匹ほど悪魔を都合しろと言ったが、まさか本当にこのわずかな間に要求した数の悪魔がやってくるなどあり得るのか？

いずれにしろ、身に降りかかる火の粉は振り払わなければならない。

これまで仕掛けてくる様子のなかった鉄蠍族が何故いきなりこんな暴挙に出たかは分からないが、自分を驚かせた報いは受けさせねば。

ルシフェルは翼に魔力を集中し、爆発的に解放すると遥か彼方から得意の念動力で岩塊を飛ばしてきた鉄蠍族の一団へと突撃してゆく。

「……一体何をした」
「何がだよっ!!　いってー！　畜生！　鼻に岩の欠片が入ったくそー！　ってうわっ!!」
数分とかからず鉄蠍の戦士団を消滅させたルシフェルは、鼻水を垂らしながら涙目になっているサタンの胸倉を掴み上げ、上空に引きずり上げる。
「な、なんだよっー　何すんだよ放せよっ!!」
「質問は僕がしている。一体どうやった。どうやって鉄蠍を連れてきて、僕にちょっかいを出させた。あいつらは仲間の悪魔以外の言うことなど聞かないはずだ」
「俺は連れてきてなんかいねぇよ！　あいつらがここに来るように仕向けたんだよ！　誰に言われるでもなく、あいつらは自分でここに来たんだよ！」
「仕向けた……？　自分で？　何を言っている？」
「こ、これ以上は言わねぇもん！　知りたきゃ俺んとこに遊びに来い！　そうじゃなきゃ種明かししてやんねぇもんね！」
「……フザけてるのか!?　僕をバカにすると……っ！」
「うげっ!!」
ルシフェルが怒気を孕んだ声でサタンの首を絞めつけようとした瞬間だった。
二人の体の間に紫色の鋭い光が走り、サタンとルシフェルは衝撃と共に引き離される。
「な、なんだ……今のは……？」

ルシフェルは自分の手に走った『魔力ではない何か』の力に目を見開く。
「いってえええええええー!?　な、なんだ今の!!」
サタンはといえば、放物線を描いて遥か彼方の地面に墜落し、痛みでもんどりうっている。
「あいつがやった……って感じじゃないけど、でも、今の力は……？」
ルシフェルはサタンの襤褸布のような服の胸元辺りから伝わった光と衝撃の正体に首を傾げながら、もんどりうつ少年悪魔の側にゆっくりと降り立つ。
「お前、僕を引き込んで何をするつもりだ」
「いててて……え？　何!?」
ルシフェルが問うまでサタンはしきりに自分の胸元あたりを探っていたが、その手がある一ヶ所で止まり、ゆっくりと下に下りた。
ルシフェルはサタンのその動きには特に注意を払わず、問いを続ける。
「僕がお前に協力することで、どんなメリットがある」
「……ん？　何、俺と一緒に来てくれんの？」
「答えろ。お前の目的はなんなんだ。僕の興味を引いたり、僕と遊ぼうなどと言うのも要するにお前の目的のために僕の力が必要だということなんだろう」
「あー、その、そう言って分かってもらえる相手かどうか分かんなかったし、少なくとも今まで俺が接した連中は皆分かってくれなかったし」

「……そんなことを言う悪魔がいるなんて、そもそも思わない。お前は本当に悪魔なのか？一体何を考えてる」

「……んっとさ」

サタンは起き上がると、埃だらけの体を払って、空を指さす。

「隠し事するつもりは無いから言うんだけど、お前についてきてほしいってのは間違いないから、そこは誤解しないでくれな。俺はさ」

ルシフェルはサタンの指さす先を思わず見た。

そこにはただ赤い空があるだけ。だがルシフェルは、サタンが指さす先に何があるのか知っている。

「あの先に行ってみたいんだ。ただ聞いた話だと、俺一人じゃ行けそうにないし、行ったらすぐ死にそうな気がするから」

「……聞いた話？」

「だから、今のままじゃ行けないから、しっかり力を蓄えた方がいいんじゃないかって思ったのと、あとは、魔界を変えたい」

「……また大仰な話を……」

「冗談じゃねぇんだって。聞いた話じゃ」

と、サタンはまた空を指さす。

「この先には俺やカミーオやお前よりずっと強い連中や、魔界一数の多い種族よりも数が多い連中がいるって言うじゃん。そんな奴に会って戦いになったら困るだろ。だから皆集まって、強くなればって思ったんだ」

強くなりたいというのは決して嘘ではないのだが、サタンは自分の内に秘めたさらなる本心は、大体の悪魔には理解されないということを身を以て理解していた。

サタンの秘めたさらなる本心は、遥か彼方の『この先』にいる者達は当たり前に持っている気持ちらしいが、魔界の悪魔にとっては弱さ以外の何者でもない。

一瞬だけ、サタンの一族の最後の記憶。血の海に沈む父と母の死体を思い出すが、すぐに胸の内でそれを打ち消した。

あの光景を、魔界から失くしたい。自分のようなガキを、二度と生み出したくない。

だがこの場でそれを打ち明けて、ルシフェルの気が変わっても困る。

「で、どうする？　俺と一緒に来ても、まぁ時間は取らせるけど損はしないと思うぜ。最悪お前が嫌になったら抜けたって俺を殺したっていいからさ」

「……」

ルシフェルは、一度だけサタンの顔に視線を戻し、そして再び空を見上げた。

「お前は、この先にいる連中のことを……」

誰から聞いた？

ルシフェルは、喉まで出かかった言葉を呑み込んだ。
「ん？　なんだ？」
「いや……なんでもない」
ルシフェルは首を横に振ると、大きく息を吸って、サタンを威嚇するように睨む。
「飽きたら、すぐ抜けるぞ」
「お！」
殺気を込めて睨みつけたはずだが、目の前の少年悪魔は一つ大きく手を打つと喜色を満面に浮かべる。
「っしゃあああ！　いや！ありがとう！　すげぇ嬉しいわ！　ありがとな!!」
「んあっ!?」
油断していたとはいえ、ルシフェルは突然手を取られて慌てふためく。
「何をするっ!?」
その手を振りはらうが、相手は動じない。
「ん？　あれ？　やっぱお前もダメなの？　嬉しいときって相手と『あくしゅ』すんだろ？　そう聞いたぞ？」
「……なんなんだよお前は……」
ルシフェルは一瞬とはいえ握られた手を見下ろして、顔を顰める。

死にゆく敵の血液でない命の温度など、一体何百年ぶりに感じただろうか。最後のその記憶はもはや自分でも思い出そうとしても思い出せないが、ルシフェルは奇妙な懐かしさを覚えて、はしゃぐ少年悪魔を見据える。

「……お前、名前なんだっけ」

「さっきも言ったろ！　サタン！　サタン・ジャコブだ。よろしくな！」

「うわ、普通の名前」

ルシフェルが知る限り、魔界ではありふれた名だが、その名を持つ少年の内に秘められたものは、ありふれたどころか、ルシフェルの過去にも無い不思議な輝きを放っている。

「ようし、もうこうなったらぐずぐずしてられねぇ！　とりあえず一緒に来てくれるかルシフェル！　これからは時間との勝負なんだ」

「お前ね、僕の方が力も強いし、年もずっと上なんだ。敬おうって気はないわけ？」

「……！」

サタンははっと目を見開いて、ルシフェルの顔を見、そしてにやりと笑った。

「他種族を『敬う』悪魔が普通じゃないってのは、お前も分かるよな」

「！」

「悪いけど、敬わないよ。そんな姿は誰にも見せない。それは普通の悪魔のすることじゃない。そして普通じゃないことを誰にも知られていないのが、今の俺の強みだ。お前にもきっと分か

ってもらえると思う。だから俺は、お前を敬わない」
「……なるほど」
その言葉はルシフェルの胸の中で、簡単に納得できる理屈だった。
「分かった。いいだろう。その代わり、僕を退屈させるなよな」
「任せとけ!!」
そう言うとサタンは意気揚々と前に立って歩き出す。
その後ろ姿を見てルシフェルは、大きくため息を吐き、
「……何日かかるんだよ帰るのに」
「わっ」
背後からサタンの襟首を掴んでつまみ上げ、一気に空に飛翔する。
「……どっち」
「あっちだ！　あの二本連なった山の手前！」
「……ああ、あの口うるさい鳥ジジイがいるところか」
「お前本当にカミーオのこと知ってるのか！　カミーオが昔お前といい勝負したみたいなこと言ってたんだ」
「へぇ、あのジジイ、僕との戦いを武勇伝にしてるんだ……久しぶりにビビらせてやるかな」
「そういえば聞いておきたかったんだけどさ、お前どうして昔カミーオに勝ったときに、カミ

ーオのこと殺さなかったの？」
「……何、ジジイは何も言ってなかったわけ？」
「何も。よく分かってないみたいだけど」
サタンの馬鹿正直な答えに、ルシフェルは苦笑して眉を上げる。
「あいつが覚えてないなら、僕もどうでもいいことで見逃したんだ。意味なんてないよ……飛ばすよ」
「おーーーー！　速えええ!!」
にやりと笑ったルシフェルがパハロ・ダェニィーノ族の住処へと飛翔を開始し、サタンの声がその猛スピードに流れて空に消える。

「ななななな!?!?」
「カミーオー！　帰ったぞー!!」
パハロ・ダェニィーノ族の住処は、突然のルシフェル来襲にパニックに陥った。
もちろんその筆頭は、カミーオである。
「る、る、ルシフェル!?」
「やぁ……久しぶりだねぇ、カミーオ」

サタンをつまみ上げたまま地上に降り立ったルシフェルは、慌てふためくカミーオを酷薄な笑みで睨めつける。

「な、な、な、何をしに来た！」

本気で慌てているカミーオの様子を見て、ルシフェルは手にしたサタンを地面に放り出す。

「いてっ！　おい、ちょっと扱い乱暴だぞ！」

「ふぅん、その驚きようじゃ、本当にお前の入れ知恵とかじゃなかったんだ」

サタンの抗議には一瞥もくれず、ルシフェルは冷めた目で慌てふためく老悪魔を見やる。

「な、なんの話だ！　吾輩がなんだというのだ！」

「ううん、別に。ただ、面白いガキに遊びに誘われたから、応じただけだよ」

「誘いに応じ……お、おいサタン、まさか本当に……」

「いてて……だから言ったろ！　意外と話せば分かるって。あんま機嫌損ねるようなことすんなよ。今んとこルシフェルは、俺の仲間なんだからな」

「『遊び仲間』だ」

「し、信じられん……」

カミーオにしてみれば、一人で鉄壁や蒼角に睨みを利かせ得るルシフェルを仲間に引き入れるなど想像の埒外の事態なのだ。

「そ、そうだ！　サタン貴様！　吾輩の部下に勝手に何をやらせた!?　鉄壁の領地に妙な動き

があると斥候が報告をしてきたのだ！」

サタンがいなくなったことに気づいて程なくして、一人の戦士が息も絶え絶えにどこかから帰還してきた。

カミーオがその戦士を詰問すると、どうも鉄蠍族の縄張りの近くまで足を延ばしていたというではないか。

問いただされたサタンは、なんでもないことのように頷いた。

「ああ、鉄蠍の領地の端っこで『ルシフェルが蒼角族についた』って大騒ぎしてもらった奴だな、それ」

「は？」

「なんだと⁉」

ルシフェルとカミーオは、予想だにしない話に目を剝く。

「あの鉄蠍は、ルシフェルの行動を確かめようとした斥候だろうな。でもまさか、問答無用で攻撃を仕掛けるとは思ってなかった。単にルシフェルに接近してくれりゃめっけもんくらいに思ってたのによ」

「……ああ、そういうことか」

得意げなサタンにルシフェルは感心するやら呆れるやら。

あの瞬間の鉄蠍の一団の暴挙が無ければ、今サタンの命は北の荒野で消し炭になっていた

ところだ。

「お前もし鉄蠍族が来なかったらどうするつもりだったわけ？」

「鉄蠍族の足と性格なら絶対来ると思ってたし、俺もその速さを計算しながら歩いてたし、鉄蠍族が先にルシフェルに手を出してたらそれ用のシナリオも用意してたし、それに」

サタンはなんでもないことのように肩を竦める。

「お前に殺されたら、俺は所詮その程度の命だったんだってことだ。俺の一族がそうだったようにな」

深い覚悟、とは誰も思わない。力によって命が消されるのは魔界の節理だ。

それでもカミーオは、諫めるように言った。

「自分の命を担保にするような賭けは、下策も下策ぞ。自重せんか」

「へへへ……」

サタンもそれは理解しているのか決まり悪そうに笑って頭を掻く。

「全くこの小僧は……ん!?　だが待て、ルシフェルが今ここにいるということは……」

カミーオが何かに気づいて再びサタンに詰め寄ると、サタンは大きく頷いた。

「そうだな。ルシフェルの『睨み』が消えて、蒼角と鉄蠍の全面戦争が起こる土壌ができた。鉄蠍が砂塵の荒野からルシフェルが消えたことに気づけば、戦いは一気に始まるだろうな」

「何を考えとるんじゃ貴様はあああ！　吾輩の一族を危険に晒すつもりかあああ!!」

「あげげげげげげ」
　サタンの首を絞めはじめるカミーオを止めたのは、ルシフェルだった。
「……待てよ鳥ジジイ。僕のこと忘れてもらっちゃ困るよ。今んとこ僕は、お前らの味方だ。サタンがバカなことさえしなきゃね」
「そ、そうだぞカミーオ！　ルシフェルは味方！　味方なんだ！」
「信じられるか！　第一こやつが味方だとして、それがなんだと……！」
「ルシフェルが一緒にいれば、蒼角や鉄蠍や、それ以外の小部族の連中も俺達がカミーオのワンマンじゃないってことが分かるだろ!!」
「それがどうした！　吾輩とルシフェルがいても、蒼角と鉄蠍の全面戦争に割って入ることなどできるか！　双方の族長も、取り巻きの戦士達も、十分突然変異レベルなのだぞ!!」
「おーちーつーけ！カミーオ！　誰が割って入るって言った！　放せよ!!」
　サタンはカミーオの翼から飛びすさって逃げると、絞められていた首をさすりながら涙目になる。
「割って入らないならどうすんの？　まさか、逃げるとは言わないだろうね？　僕を逃げるための用心棒に使おうっていうなら、この場で抜けるよ」
　ルシフェルの言葉に、サタンはちっちと指を振った。
「ンなわけないだろ！　まぁ、用心棒ってところは否定できないけど……」

言いながらサタンは、以前描いたような周辺勢力図を指を使って地面に描き出す。
さらさらと書き上げられる『文字』に、ルシフェルは目を見開いた。
「ジジイ、これ、お前が？」
「……いや」
カミーオは、ルシフェルの問いに首を振る。
ルシフェルも、生まれて数十年も経たない少年悪魔が魔界のほとんどの部族が失った文化である『文字』を書いていることに、驚きを隠せなかった。それがカミーオの仕込みでないならなおさらだ。
そんな二人の大悪魔に構わず、少年は図を完成させる。
「今までルシフェルと鉄蠍と蒼角の三すくみだったこの場所から、一時的にルシフェルが消える。でも鉄蠍と蒼角がそのことに気づくのにはしばらくかかるだろうから、その隙を突き」
サタンはそう言うと、『蒼角』と書かれた文字を、『俺達』に書き換えた。
「蒼角族を俺達で乗っ取る。魔界北辺を支配する構図を、鉄蠍と俺達の争いに変えてやる」
「……話が見えてこないな」
ルシフェルの言葉に、サタンはなんでもないことのように言った。
「究極的にはお前をここに連れてきたのと同じことをするだけさ。先に蒼角族をターゲットにするのは、空を飛べる戦士が多い俺達が戦うには相性がいいからだ。ここからの距離も近いし

な！」
「はぁ……」
「なんだと？」
ルシフェルとカミーオは、思わず顔を見合わせた。
そんな二人の驚く顔を楽しげに眺めながら、サタンは再び『俺達』と書かれた地図をぴしりと指さした。
「鉄蟻族がルシフェルの不在に気づく前に、族長アドラメレクと奴の率いる蒼角族に、俺達の『遊び仲間』になってもらう。なぁ、カミーオ」
老いた悪魔剣士は、その呼びかけに全身の羽が総毛立つ。
自分は、何かとんでもない者を拾い育てたのではなかろうか。
「はは、ビビってやんの」
ルシフェルに見透かされたことにも腹が立たないほど、カミーオは目の前の少年悪魔の見慣れた目に釘付けになっていた。
「パハロ・ダェニィーノ族の魔鳥将軍カミーオの名を、もう一度轟かせるチャンスだ。乗るか？」

※

そこだけ大地が空に向かって隆起したかのような恐るべき峻嶮さを誇る岩山。そこに空く無数の穴は、この岩山が『砦』であることを示している。

穴は窓であり、窓は外の景色を眺めるためではなく、外敵の襲来を警戒し、襲来した外敵に攻撃するためにある。

そしてその窓からは、無数の矢や投擲槍、さらには魔力球が空に向かって放たれている。

筋骨隆々とした牛頭の悪魔達が投擲する槍は、なまじの魔力球よりもよほど強力な威力を誇るのだ。

空にはそんな矢や投擲槍を嘲笑うかのように、パハロ・ダェニィーノ族の戦士達が散発的に魔力球を岩の砦に向けて放射している。

強力な戦士がいないとはいえ、そこは飛翔に特化した肉体を持つ魔鳥の一族。一直線に飛んでくる槍や投擲槍などにそうそう当たりはしないし、万が一のときにはカミーオが防御魔術で全ての攻撃を弾き返している。

強大な豪族である蒼角族に唐突に喧嘩を売った愚かな小部族、という戦いが繰り広げられている下で、こそこそ動き回る二つの小さな影があった。

「中から外に抜けてるってことは、外から中へも抜けてるってことで」
「お、おい！　本当にこんな狭いとこうわわっ！」
サタンとルシフェルは、小柄な二人が身を屈めなければ進めないような細い隧道を徒歩で進んでいた。
全く光が差し込まない隧道には水が流れており、足元も妙にぬかるむ。
「静かに。気づかれる」
「気づかれたからなんなんだよ！　うわぁ、もう足先が染みてきた！　気持ち悪いなぁ！」
もはや入口から光が差し込む距離ではなく、ルシフェルが顔を顰めているのかどうかサタンからは確認できない。
「気づかれたら話がややこしくなる。誰にも見つかることなくここのボスに会うのが目的なんだから」
「だからなんで見つかっちゃダメなんだよ！　僕が蒼角の戦士なんかに負けるわけないだろ」
「勝ってもらっちゃ困るんだよ、出てくる前に説明しただろ？」
サタンは若干うんざりした様子で応える。
パハロ・ダェニィーノ族の集落を出立する前に綿密に打ち合わせをしたはずなのに、何も聞いていなかったのだろうか。
蒼角族の総大将にして族長、アドラメレクと『同盟』を結ぶ。

それがルシフェルという強力な切り札を手に入れたサタンの次なる目的だった。

『同盟』という概念をカミーオとルシフェルに理解させるのはかなりの時間を要したが、ルシフェルを含めたハグレ悪魔達をパハロ・ダェニィーノ族のコミニュティーに迎え入れるのも狭義には同盟であると言うと、カミーオはなんとなく納得したようだった。

個人や集団が共通の目的のために協力し、同じ行動をとることが『同盟』。

ならばその目的とは何か。

カミーオとルシフェルは、蒼角族と協力するならば、次は近隣で最大勢力を誇る鉄蝙族の撃滅であると考えた。

「まぁ、現段階ではその方が分かりやすくていい」

サタンも否定しなかったが、そこは『話ができる悪魔』であるカミーオとルシフェル。

サタンの思惑がそこで止まっていないことは敏感に察知していた。

「ってかさ、この穴、本当にどっかに通じてるの？　途中で行き止まりとかになったら僕、その瞬間周辺爆砕するよ？」

「あのな」

サタンは抑えた声でルシフェルを振り返った。

「なんのために水が流れ出てる大きな穴を遡ってると思ってんだよ。悪魔が住んでいる岩山にある水の通り道なんだぞ。反対側があるに決まってるだろ」

「あ、そうか」
背後でルシフェルが手を打つ気配がする。
「とにかく急ぐぞ。お、ここから壁がかなり切り立ってるな。ルシフェル、手と足で登れよ。魔力は使わないでな」
「ええ!?」
ルシフェルの抗議の声を、サタンは受け流す。
「蒼角は見た目と違って魔術に秀でてる奴らなんだ。ここで俺達の魔力を察知されたら、生き埋めにされるぞ。あ、そのときはお前の力で吹き飛ばすってのはなしな。今回は族長に会う前に他の奴に見つかって騒ぎになったらその瞬間負けなんだから」
「……今僕はどっちかっていうとお前の方を殺したくなってる」
「我慢すれば楽しいことがもっと楽しくなる。ほら行くぞ。外のカミーオ達も心配だが、一番マズいのは蒼角族の領地でトラブルが起こってることを鉄蠍に気づかれることだ。距離が離れてるから滅多なことはないと思うが……お、ここが終点かな」
そう長く登らないうちに、上方向に向かう隧道の先から揺らめく炎の光が降りてきた。
「やっとかよ！」
「静かにしろって！　よし、出られそうだな。周りに誰もいない。いいぞ、上がってきて」
サタンは顔だけ覗かせて周囲を観察し、安全を確認してから穴から体を引きずり出す。

「なるほど、どういう仕掛けか分からないけど、砦の上の方まで引いた水をあちこちの水路から流してるのか……ゲスイとかいうのじゃなくて良かった」

「ゲスイ？　なんだよそれ」

「いや、なんでも」

後ろから上がってくるルシフェルの問いに、サタンはしらばっくれて首を横に振る。

流れる水から異臭はしなかったので下水道でないことは分かっていたが、それでも水が流れている理由が分からない以上『下水道』の概念はまだルシフェルには教えない方が良さそうだ。

どうやら二人が出たのは岩の砦の中腹にある通路のようだ。

蒼角族の体格に合わせて天井はかなり高く、かがり火もかなり高い位置にある。

穴に流れ落ちる水は、通路と壁に切られた溝を辿ってさらに天井近くにある穴から流れ出ており、その穴はまたさらに砦の上階に繋がっているとみられる。

「……変な仕組みだな」

サタンは首を傾げる。

水を高い位置に運ぶ灌漑設備を作るのは、手間も魔力もかかる。

『空の向こうの世界』でなら、標高の高い位置に真水を運ぶのには多くの理由が考えられるが、魔界の悪魔がこんな大がかりな設備を作る意味は、普通に考えれば無さそうだ。

「でも、何か理由があるんだよな。自然にできたものじゃないだろう」

わざわざ壁と床に溝を切ってまで、水を流しているのである。自然に湧いた水だとしても、建物の中に流れ水があって良いことはあまりない。

ましてや今この砦を根城にしているのは、生きるのに水も食料も必要としない悪魔なのだ。

「おいサタン。どうするんだよこれから。また穴か？」

サタンが天井近くの穴を見上げていることに気づいたルシフェルはうんざりしたような顔になるが、サタンはしばしの逡巡の後に首を横に振った。

「……いや、やめておこう。ここからはこの通路を進む。進むけど、さっきも言った通り、もし蒼角族の連中と鉢合わせても、絶対に殺すな。俺の指示通り動いてくれ」

「……わけ分かんない。まったく」

拒否こそしなかったが、やはり不満そうな様子を見せるルシフェルを見て、サタンは逆に思った。

「こりゃ早いうちに一度、見つかっておいた方がいいかもな」

機会はすぐに訪れた。

巨大な通路を進んでいく途中、武装していない蒼角族が通路をこちら側に向かってくるのと出くわしたのである。

炎の暗がりの向こうから大きな足音と、光る青い目が近づいてきて、サタンはルシフェルの手を掴んで咄嗟に通路の床の隅に伏せた。

蒼角族の目線に合わせるために松明はかなり上方に掲げられており、二人は大きく影が落ちている場所に息をひそめて伏せる。

だが、遮蔽物があるわけでもなく、向かってくる蒼角族が少しでも注意深く視線を動かせばすぐに気づかれてしまう場所だ。

「ルシフェル、戦うなって言った理由を教えてやるよ。今からあいつに襲い掛かってくれ。ただし、できれば殺さない程度に背後から首を絞めるような感じで」

「……は？」

小声でそんな指示を送ってくるサタンにルシフェルは眉根を寄せるが、

「……まぁいいか」

戦うなと言ったかと思えば突然不意打ちを仕掛けろなどと言うサタンの言葉の真意を知りたいという好奇心が勝ったのか、ルシフェルは音もなく闇の中を動きはじめる。

「……ん？」

通路をやってきた蒼角族は視界の隅で大きなものが動いたことに気づきそちらに顔を向けるが、次の瞬間には、

「うがっ!!」

背後から首を絞められていた。

「……それで、この後どうなるんだ？」

もちろん首を絞めているのはルシフェルで、彼の言葉は蒼角族ではなく暗がりにいるであろうサタンにかけられた言葉だ。

そんなことは当然知らない蒼角族はとにかく非常事態であることを知らせるべく息を振り絞るようにして口を大きく開き、

「ばぶがっ!!」

その口を上下から強い力で押さえ込まれて目を回す。口を押さえて蒼角族の声を止めたのは、当然サタンだった。

「今この砦の蒼角族の注意は外で暴れてるカミーオ達に向いていて、俺達がここにいることに気づいていない。こういう風に、本来の目的を悟られないために別の場所で派手に騒ぐことを『陽動』って言うらしい。だがもし俺達がここにいることが知られれば、奴らの注意がこちらに向いて陽動の効果は半減。俺達は先に進むのが難しくなって大勢と戦わなきゃならなくなる。それは面倒だろ？」

「……ふぅん、なるほどね。それで、殺すなっていうのは？」

「う、ぶ、ぐ、ぐ」

首を絞められている蒼角族にとってはたまったものではないが、サタンの講義はまだ続く。

「戦闘するなって話と一緒だ。殺すと血や戦闘の痕跡がどうしても残って俺達の存在が気づかれやすくなる。俺達はここにいることを蒼角族に知られちゃならない」

「死体どころか血の一滴も残さずに殺す方法もあるよ？」

ルシフェルの何げない発言に、首を絞められている蒼角族の体が引きつるが、それが恐怖によるものなのか単純に呼吸困難で苦しんでいるためなのかは分からなかった。

「それには魔力と魔術が必要だろ。それも結局は他の蒼角族に敵がここにいるのを知らせてしまう。それに、俺達の目的は蒼角族を皆殺しにすることじゃないんだ」

そのとき、二人の間にいた蒼角族の力がふっと緩んだ。気を失ったのだ。

ルシフェルはそれに気づいてぱっと手を放すが、サタンはそれを予見していたように蒼角族の背に回り込み、巨体が倒れることによって起こる振動と音を回避する。

「いいかルシフェル。戦いには目的に合った『勝ち方』ってものがあるんだ。それを間違えれば、うまくいくものもいかなくなるんだ」

そう言いながらサタンは、蒼角族の巨体を引きずりはじめる。

「おい、何やってんだよ」

「こいつをこのまま倒しておくわけにいかないだろ。さっき目につきにくそうな横穴があったから、そこに置いておくんだよ」

それもこの蒼角族の身に起こった異常を、他の者達に察知されないためだ。

「とはいえそいつが目覚めたら、僕らのこと触れ回るに決まってんのに」

「だからタイムリミットが今決まったんだよ。作戦完了はこいつが目覚めるまで。じゃ、ちょ

っと隠してくる」
サタンはそう言うと巨体を引きずって、来た道を戻りはじめる。
ルシフェルはいまいち納得できなさそうな顔をしながらもサタンに続いて、来た道を戻り、そしてふとあることに気づいた。
「あれ？」
自分達が見上げるほどの蒼角族の巨体。
ルシフェルは首を絞めるために、わずかな高さではあるが飛翔して背後に取りついた。
一方のサタンは、叫び声を上げようとした蒼角族の口を前から取り押さえた。
そのときのサタンは……。
「あいつ、浮けたっけ？」

山のような体、とはまさに今目の前にいる悪魔のためにあるような言葉だった。
蒼角族族長、アドラメレク。
サタンとルシフェルがこの岩砦の中で出会ってきたどの蒼角族の戦士達よりも大きく、強大な魔力を感じさせるその威容はまさにカミーオの言うところの『突然変異』に相応しい。
その威厳故か、大悪魔アドラメレクは、小さな侵入者二人が唐突に岩砦の最奥である族長の

洞に現れても動揺するようなことはなかった。

ただ一言、こう言ったのだ。

「如何にしてこの場に来た」

その問いの意味するところは、蒼角族しかいないはずのこの岩砦に他部族の悪魔二人がどうやって侵入できたのか。侵入できたとして砦の中の戦士達を如何様に退けたのかと尋ねているのだ。

ルシフェルはもちろん聞いには答えず、横目でサタンを見る。

ここはお手並み拝見を決め込むつもりだ。

「歩いてさ」

そして当然のようにサタンは、秘めた魔力の大きさではまるで勝負にならない相手に対して、変わらず堂々と言い放った。

「歩いてか」

「うん」

「外を騒がしておるという鳥共の手の者か」

「いや、どっちかっつーと、鳥共が俺の手の者。今お宅を騒がせてる集団の総大将は俺」

玉座、というには余りに荒削りな岩の座所に腰を下ろしたまま、目だけでサタンを睨むアドラメレクは、当然その威容と威厳に相応しい年月を経て今この場にいるのである。

齢百年にも満たないサタンなど吹けば飛ぶような相手でしかなく、それ故にアドラメレクは今、ルシフェルとは違った形でサタンが何者かを測っているようだった。

アドラメレクは鼻から生臭い息を吐くと、一瞬だけ意識を外に向けるように視線を動かした。

「ふん。パハロ・ダェニィーノの魔鳥将軍がこんな小僧にこき使われるとは、まさしく晩節を汚すというものだな」

「カミーオのこと知ってんのか⁉」

アドラメレクの言葉にサタンは心底驚いた。

音に聞こえし蒼角族を纏める族長の大悪魔がカミーオを少しでも褒めそやすようなことを言うのだから、サタンはカミーオに対する認識を少しは改めようかと思いはじめる。

だが、それもこの場を切り抜けてからだ。

アドラメレクはルシフェルほど短気ではないようだが、今の自分達は侵略者で侵入者なのである。

それではこれにて、というわけにはいかないし、初めからそんなつもりもない。

「魔界広しといえど、魔鳥将軍カミーオほど命永らえ、流れる時を見続けた者はそう多くあるまい。最も偉大すぎたがゆえに、後進には恵まれなかったようだがな」

褒めているのか嘲笑っているのかは分からないが、奇しくもそれはカミーオ本人が言っていたことでもあった。

パハロ・ダェニィーノ族には遂にカミーオを越える戦士は生まれなかったのだ。
それ故に老いて尚、一族を守るためにカミーオが奮闘しなければならないわけだが、蒼角族や鉄蠍族のように、突然変異とは言わずとも優秀な戦士が多く生まれる一族の物量にたった一人で対抗できるはずもなく、いつしか時代と血の影にその勇名は錆びていった。
「あのクソジジイがねぇ……」
アドラメレクの齢などサタンもルシフェルも知る由もないが、過去を懐かしむような顔になった牛頭にサタンはあっさり言ってのける。
「でもま、言うなれば俺がその後進だ。蒼角族の長アドラメレク。今日はパハロ・ダェニィーノ族族長カミーオの名代として、このサタンから頼みがあって来た」
すると初めて、アドラメレクが上体を動かした。
「ガハハハハハ!! 貴様が魔鳥将軍名代だと!? 小童がこの我に何を言おうとする!?」
「……意外な反応」
ルシフェルは小さく呟いて眉を上げる。
どうもアドラメレクは、サタンの言葉を面白がっているようだ。
「小さき翼の男よ、貴様が砂塵の荒野を荒らしまわっていたというルシフェルか」
そこで初めてアドラメレクが、ルシフェルに注意を向けた。
「そうだよ。蒼角の大将」

「噂通り、我に勝るとも劣らぬ力を持っているな。にも関わらずこんな小童に付き従っておる理由を、少しばかり探ってみたくなったのだ」

アドラメレクは楽しげな口調で続ける。

「それに小童とはいえ、砦の中の戦士達を退けてきたとなれば、我もそれなりの対応をせねばなるまい」

このアドラメレクの言葉にルシフェルはなぜか驚いたように目を見開き、そして傍らのサタンの横顔を見た。

するとサタンの方も、どうだと言わんばかりに目だけでルシフェルを見返し、すぐにアドラメレクに顔を向ける。

既に、アドラメレク程の悪魔がサタンの思考誘導に乗っている。アドラメレクは、サタンとルシフェルが多くの戦士達と戦いながらここまでやってきたと思い込んでいるのだ。

実際に最初の一人だけでなく、多くの蒼角族の戦士と砦内で鉢合わせたが、その都度ルシフェルとサタンは最小限の力と連携でその全てを不意打ちで気絶させ、戦闘らしい戦闘は全く行わずにここまで来た。

これには素直に感心したルシフェルは、自分もアドラメレクに視線を戻すと小さく頷いた。

「ま、その気持ちは分かる。僕も似たようなものだからね。この小僧が一体全体あんたにどんなことを言い出すのか、興味津々なんだ」

「ふむ、魔鳥将軍の名代にして魔界に普く広まる名を持つ小童よ。つまらぬ話であるなら、この場で貴様は我が槍の錆になるぞ」

言うなりアドラメレクは鷹揚に立ち上がり、そして玉座の背後にその丸太のような腕を伸ばす。

「うわ、でっか」

ルシフェルはアドラメレクが手にしたものを見て口笛を吹いた。

それは砦の柱と見まごうばかりの巨大な槍斧であった。

一族の長が持つに相応しい蒼い金属から成る穂先と戦斧部は、数多の悪魔の血を吸ってきたことであろう。

「我が一族に伝わりし魔槍は何者をも貫き引き裂く無双の槍よ。それこそ小童の命など、触れただけで消し飛ぶぞ」

アドラメレクはまるでいたぶるようにサタンの喉元に巨大な槍斧の穂先を向け、脅しをかける。

だがサタンは微動だにすることなくその穂先の向こう、アドラメレクの目を見て言った。

「アドラメレク、あんたなんのために、ここで部族を纏めてるんだ」

「何？」

「鉄蠍族を倒すためか？」

「問われている意味が分からぬ」
　牛頭で表情が読みにくいが、アドラメレクの困惑と苛立ちがわずかに増したことは分かる。
「じゃあ分かりやすく聞くよ。アドラメレク、あんたこの土地で将来お前に取って替わる蒼角族の若者か、どこかの悪魔に殺されて死ぬためにそこでふんぞり返ってんのか？」
「フン、我が力は蒼角族最強。我に取って替わろうとする愚か者など我が一族にはおらぬし、余所者に侵略を許す我が一族でもない」
　当然のことのように言うアドラメレクだが、サタンはその答えを予想していた。
「ああ、うん。その何百年後かの行く末が、あんたがさっき言ってた魔鳥将軍なんだけどな」
「む？」
「魔鳥将軍カミーオはパハロ・ダェニィーノ最強の戦士で、ルシフェルやあんたも一目置く存在だった。それが今はどうだ？　新たに興った若く強力な部族に押されて一所になかなか留まれない。一方で何時まで経ってもパハロの中からカミーオを越える戦士が現れなかったもんだから、部族の考えが改まらず、カミーオの負担も減らず、一族を繁栄させるどころかカミーオの老いに合わせてどんどん数を減らしてった。これについてどう思う？　自分と蒼角族がその未来を辿らない、って胸張って言えるか？　それともお前、不老不死なのか？　違うよな？」
「……むう」
　思慮深い牛頭の眉間にかすかに皺が寄る。

「蒼角族の戦士は一人一人は精強で優秀な戦士だが、余所の豪族に比べて全体の人口は多くない。少数対少数なら戦いの結果は戦士の質が決めるが、多数対多数なら、結果は戦士の数が決める。あんた」

サタンは一瞬アドラメレクから目を外し、外の光差さぬ玉座の間から正確に東方を見た。

「鉄蠍族に勝てるか？　鉄蠍族の戦士一人一人は蒼角族には到底敵わないが、とにかく数が多い。それこそ他に鉄蠍族と純粋な数だけで対抗できるのなんか、ここからずっと南の方に行ったマレブランケくらいだろうな」

「……そういう話、どっから仕入れるんだよ」

ルシフェルは小声で呟くが、とりあえず今自分が何を言っても邪魔にしかならないことは分かっているので余計な口は挟まない。

「色々あって、ルシフェルは今俺達と一緒にいる。蒼角族と鉄蠍族の間にいた大勢のハグレ達も俺達と合流して、今蒼角族と鉄蠍族の間には空白しかない。早晩戦いは始まるぞ。もう一度聞くがあんた、鉄蠍族相手に勝てるのか？」

「愚かな問いだ。我が蒼角族は魔界最強。東の毒虫共がいくらやってきたところで物の数では……」

憤然と言い放つアドラメレクをサタンは思い切り遮った。

「や、悪い、そういうこと聞きたいんじゃないんだ。蒼角族戦士総勢四千に対し、鉄蠍族の戦

士およそ二万。五倍の兵力差で正面から全面的にぶつかり合ったとき、あんたはどうやって戦うのか聞いてるんだ」

「単純な計算であろう。一人頭五人の敵を倒せば……」

「一人頭倒さなきゃいけない五人全員が、お前んとこの戦士の前に行儀良く並んで出てきてくれりゃ、それでもいいんだけど」

悪魔同士の戦いは、当然のように肉弾戦と魔術の複合的な戦闘に発展する。

武器や肉体を激突させる以外にも、遠距離からなんらかの魔術で攻撃を仕掛けてくることだってある。

それに戦争はルールに則って既定の人数同士が定められたフィールドで戦うような試合ではないのだ。

戦況には濃淡というものがあり、味方が薄く敵が厚い部分では、当然味方の被害は大きくなる。

一人で五人の鉄蠍の戦士を倒せる蒼角族のところに、二十人の鉄蠍が殺到することだってあり得るのだ。

一対五ならば敵の五人を倒すことも可能かもしれないが、一対二十では手数に押されて三人も倒せないかもしれない。

「そういうとこ、考えてる？」

「……結局何を言いたい。我が一族を愚弄しに我が座所まで忍び込んだのか」
「違うよ。あんた今一人頭五人倒せばいいって言ってたけどさ」
サタンは首を横に振る。
「俺なら一人頭一人以下で済ませる自信がある」
「……何を言っている？」
アドラメレクの顔色が変わった。
「俺が蒼角族の族長になってあんたと同じ条件で一族を指揮すれば、蒼角族の犠牲を最小限に抑えて鉄蠍族に勝てるって言ったんだ」
「なんだと……」
アドラメレクの全身の空気が変わる。
これまではただ忍び込んできた生意気なことを言うネズミの戯言に、それこそ戯れに付き合ってやっていたアドラメレクだが、今はっきりと、彼は指導者としての資質を面罵されたのだ。
「おいおい……」
アドラメレクの怒りが冗談でなくなったことを悟ったルシフェルは困惑したようにサタンを見るが、サタンはまるで動揺していない。
これも、彼の考えの内なのだろうか。
「そこでだ、蒼角族の族長アドラメレクよ。俺と一つ、勝負をしないか」

「勝負とな」

殺気が闘気に変わり、アドラメレクは柱のような槍斧で一度大きく玉座の間の空気を切る。

「ああ。蒼角族全員の命を賭けた大勝負だ。あんただってこんなクソガキに好き放題言われて黙ってられる器じゃねぇだろ？」

サタンは不敵に笑う。

「アドラメレク、蒼角族全体が生きるか死ぬかの分かれ目は、今この瞬間にあると思え。俺とあんたが戦って、俺が勝ったら蒼角族の戦士全員、俺が貰い受ける!!」

「本気かよ……」

今度こそルシフェルは困惑した。

アドラメレクの実力は、自分と同じか少し下くらいと見積もったルシフェルだが、いずれにせよサタンが真っ向からぶつかって勝てる相手ではないのは火を見るよりも明らかだ。

そこまで考えて思いついたのは、自分が戦力としてアテにされていること。

自分がアドラメレクと本気で戦えば、アドラメレクに勝つことも不可能ではないだろう。

だがそのとき、サタンがルシフェルを振り向いた。

「お前、今やる気ある？」

「……なんだか面倒くさいことになりそうだと思ってるから、あんまりない」

ルシフェルは素直に答える。



するとサタンは、さらに驚くべきことを言い出した。
「良かった。じゃあ、ちょっと入り口まで下がっててくれ。俺が負けたらそこから逃げてくれればいいから」
「あ？」
サタンは自分と二人でアドラメレクに当たるつもりではなかったのか？
困惑するルシフェルだが、動かなくていいと言われたなら、もう動くつもりはない。
素直に入り口の所まで下がって、事態の推移を見守る。
そんなルシフェルの様子を見ていたアドラメレクは、牛頭の口に邪悪な笑みを浮かべた。
「ルシフェルの助力もなしに、我に勝つつもりか？」
「まぁな。ってか、もう現時点で九割俺の勝ちだよ」
「はぁ？」
これは味方であるルシフェルの偽らざる疑問の声だ。
さすがにこの状況で、自分のときのように圧倒的な力を持つ敵との戦闘を避け得る状況が生まれるとは思えない。
「抜かせ小童！　蒼角の神祖より伝わる魔槍をこの我が振るえば、その力の前に命永らえる者などおりはせぬわ!!」
アドラメレクの怒号が、戦いの合図だった。

「ぬううううん!!」

牛頭の巨人が己の体よりも長い槍斧を頭上で振り回し、それを力いっぱい床に突き立てる。

と、

「ん？　水？」

槍斧の突き立てられた場所から、さらさらと水が染み出てくるではないか。

そして次の瞬間、

「うおっ！」

「わっ」

サタンとルシフェルは驚いて部屋中を見回す。

先程まで単なる岩作りであった玉座の全てが、一瞬にして凍りついたのだ。

「……なるほど、あの水はそのための……」

サタンは得心して頷く。そしてその推測をさらに裏付けるように、周囲の壁や床から氷が巨大な茨のようにアドラメレク目がけて伸びてきて、やがて牛の巨人の全身を包み込んだ。

魔氷の鎧と古の魔槍をその身に宿した戦士アドラメレクはその実、水と氷の魔術を得意とする蒼角族一の術者でもあったのだ。

砦に張り巡らされた水路を流れる水は生活のために流されているのではない。その全てが、アドラメレクの武器なのだ。

「如何な多勢の鉄蠍共といえど、いずれは我が槍の錆にしてくれよう！　今日はその前祝に、我が座所に現れた面白いネズミ共を屠るとしようか！」
「面白い、ってとこは認めてくれるんだな」
サタンはぺろりと唇を舐めると、小さく呟いた。
「さぁて、頼むぜ、クソジジイ」

「む？」
空を旋回するカミーオは、岩砦の中で強大な魔力が膨れ上がるのを感じ取った。
「これが蒼角族の当代族長の力か……」
明らかに今の自分を越える魔力に驚愕するカミーオだが、驚いてはいても動揺はしない。
なぜならこの魔力の膨張は、あらかじめ予定されていたことだからだ。
「むぅ」
カミーオは眼下で自分達を迎撃していた蒼角族の戦士達の様子を見て、思わずうなる。
岩砦内で膨張した魔力に、蒼角族達は明らかに動揺している。
魔術や投擲槍の放射が薄くなり、迎撃した者達の多くが慌てて砦内に駆け戻っていく。
全て、サタンの言っていた通りになった。

「合図だ！　陣形を変えるぞ！」
カミーオは事ここに至って、あの少年悪魔に全てを賭けることを決めた。
それまで空を統制もなくバラバラに飛翔して散発的な攻撃をするに留めていたパハロ・ダェニィーノ族の戦士達が、あらかじめ決められた五人一組の編隊を組んで纏まりはじめる。
「攻撃発射点のみを集中して狙うのだ！」
対空攻撃を放っていた蒼角族の一部が砦内の異常を察して引き下がったことで、カミーオ達を迎え撃つ攻撃の数が減り、槍や魔術の弾幕が薄くなり、結果的に攻撃の射出点が空からも冷静に判別できるようになった。
編隊を組んだパハロの戦士達は、その射出点目がけて同時に魔力弾を射出しはじめる。
「殺さぬ程度にな！」
カミーオはサタンの指示通りに、迎撃のために残った蒼角族を順繰りに潰しはじめた。
蒼角族達はそれぞれがなんとか奮戦して空を舞う五人一組のパハロの編隊を討とうとするが、散っては集まり、集まっては散るパハロの編隊飛行には矢も投擲槍も魔力球も当たらない。
逆に空から来るパハロの戦士達の攻撃が急激に味方に当たるようになり、ますますパハロを迎え撃つ弾幕が薄くなってゆく。
「そろそろ、かの」
砦周辺のあらかたの反応が消えたところで、カミーオは再び合図する。

「砦の入り口を固めよ!!」

パハロの戦士達が急降下し、無数に空いている砦の窓や穴から的確に中に通じる穴を選び、その前に着地する。

重要な穴とそうでない穴が分かるのは、先程砦内に戻った蒼角族の動きを見ていたからだ。

砦内部に通じる入り口であると判明している穴に、一直線に吸い込まれていくパハロの戦士達の編隊。

カミーオもその中の一つに二編隊を率いて突入する。

曲がりくねった細い道だが、それでも蒼角族の巨軀に合わせて掘られているのである。

蒼角族に比べれば体の小さいパハロ・ダェニィーノ達が飛翔するのになんの問題もない。

「き、来たぞ!!」

「外の奴らは何をやっておるのだ!?」

「ど、どうする！　族長の部屋に急がねば！」

「侵入者を放置してはおけまい!!」

一方の蒼角族は、完全にパニック状態であった。

族長が唐突に戦闘モードに入っただけでも問題である。

空の鳥達に気を取られている間に、族長が何者かと戦っている。

だがそちらに対応しようとした瞬間、今度は鳥達が外の者達を撃破して内部まで侵入して

きた。

どちらを優先するべきか判断できる蒼角族は、その場にいなかった。

「ふうむ、これが『指揮系統の差』か。ぬううんん!!」

まるで統制の取れていない蒼角族達に比して、やむを得ない理由があったとはいえ少数精鋭で指示が全員に行き届いているパハロ・ダェニィーノ達は、格上の敵を相手に好く戦っている。

そして老いたりとはいえ魔鳥将軍として名を馳せた実力は、今でも並みの蒼角族など相手にもならない。

飛翔の速度を乗せたカミーオの剣閃が、迎え撃つ四人の蒼角族の武器を粉々に破壊し、

「ぬあああああっ！」

ついでに足の筋肉を断つことで、機動力を奪う。

「ここはもう良い！　次に向かうぞ！」

カミーオは、四人全員が地に伏せたのを確認してから率いる二編隊をさらに通路の奥へと進ませる。

複雑に分岐する岩砦内の通路だが、各所を飛ぶパハロ・ダェニィーノ達は、カミーオが得意とする概念送受（イデアリンク）の技術でお互いの位置を常に把握し合い、地形に対する理解を少しずつ深めていった。

「おい！　砦内に鳥共の侵入を許した！　近接戦用の短槍を……うわあああっ!?」

一方で、パハロ・ダェニィーノ達の追撃を受けなかった者達は、別の脅威に晒されていた。

「ど、どうした！　何事だ!?」

武器庫として使われている部屋や、族長の部屋へと通じる通路の陰、とにかく日頃目立たない場所から次々と、気絶した蒼角族が発見されたのである。

そのほとんどが外傷こそ無いものの失神しており、抵抗もできないまま何者かにやられてしまっているのが見て取れた。

もちろんこれらは、サタンとルシフェルがアドラメレクの座所に至る途中の隠密行動中に無力化した者達である。

その数は決して多くはないのだが、明らかにパハロ・ダェニィーノ族にやられたものとは違うやり口に加え、指揮系統などなきに等しい蒼角族達の間で情報が交錯し、パハロ・ダェニィーノ族以外の侵入者に恐ろしい数の戦士達が殺された、という話に膨らんで皆の戦士達に流布してしまった。

「じゃ、じゃあまさか今族長が戦っているのは……」

「誰にも悟られずにこれだけの数を殺した恐ろしい悪魔なのでは……」

牛頭の巨軀達が雁首揃えて慌てふためくさまはいっそ滑稽であるが、皆の末端各所では次々に戦士達がパハロ・ダェニィーノ達に敗れており、未だ族長の下で何者が戦っているのかも分からない。

「と、とにかく族長の洞へ！」

無事な者達がそう判断してアドラメレクの下に急ごうとしたときには、既に砦内の半分近くの戦士達が倒された後のことであった。

そして、ほとんど逃げるように族長の部屋に飛び込んだ蒼角族達を威嚇してきたのは、

「わっ!!　なんだよお前ら!?　今いいとこなんだから邪魔すんなよっ！」

最初の瞬間とは打って変わって、好戦的な表情を浮かべるルシフェルだったのだ。

小柄な体と漆黒の翼、酷薄そうな表情を見て、彼がルシフェルだと気づいた者も多く、荒野最強のハグレが何故こんなところにいるのかと訝り恐れる間もあらばこそ、

「おおおお!?」

族長の洞を、他ならぬアドラメレクの驚愕の声が震わせる。

そして蒼角族達は見た。

貫き通せるのは族長本人の魔槍のみとまで言われたアドラメレクの魔氷の鎧が、今まさに粉々に砕けた瞬間を。

時間は少し戻る。

最初に攻撃を仕掛けたのは、サタンの方だった。

「おうりゃっ!!」

ごくごくシンプルな、魔力弾による攻撃。

サタンの小さな十指から放たれた光弾をしかし、アドラメレクは避けようともせずに迎え撃つ。その必要すら無かったのだ。

「今、何かしたか？」

サタンの光弾が直撃した魔氷の鎧には、傷一つついていない。

かすかに熱で表面の色が変わった程度で、それもすぐに魔力の氷が盛り上がり塞いでしまう。

「まぁ一応、攻撃を？」

サタンはひきつった笑いを浮かべながら、一歩下がる。

「ならば我も良いな？　一応、攻撃を」

そう言って振るわれた魔槍の速度は、その巨体に見合わぬ猛スピードでサタンに迫る。

「うわあああっ!!」

サタンは背後に跳躍することで辛うじてそれを回避する。だが回避したにも関わらず、振るわれた槍の穂先が発した風圧で、サタンは空中でバランスを崩して派手に転倒してしまう。

「くそっ!!」

転倒した瞬間を狙われないよう、不自然な体勢から魔力球を放射するが、それはアドラメレクの足を止めるに至らなかった。

「その程度で、我と事を構えようとは」
声は、すぐ傍で聞こえた。
「片腹痛い!!」
二撃目は、一撃目と同じ横薙ぎの軌道を、一撃目の遠心力を利用した圧倒的な速さとパワーで襲い掛かってきた。
「……死んだな、ありゃ」
ルシフェルは二秒先の未来を正確に予想した。
到底避けられるタイミングではない。
アドラメレクの剛腕と魔槍の硬度、さらに魔氷の魔力が乗った一撃でサタンの小さな体が粉々に砕けるのを、ルシフェルもアドラメレクも確信した。
だが、
「んんのあああああああああああっ!!!」
声は、振るわれた戦斧部の先端から聞こえた。
「ぬ!?」
まさか生きているとは思わなかったアドラメレクが目を剝くと、振り抜かれた槍の穂先のまた少し先の空中で、鼻血を出しながらこちらに手をかざしているサタンの姿があったのだ。
「でえええええい!!」

サタンの掌から紫色の光が迸り、アドラメレクの鎧をまたも撃つ。

「ふん！」

だがやはりアドラメレクはその攻撃を意に介さず撃たれるに任せ、槍の穂先目がけて左腕の拳を繰り出した。

サタンに向けられた拳であるにもかかわらず、遠くで見ているルシフェルの方にまで風圧がやってくる。

そんな恐るべき力を秘めた拳を、サタンは真正面から受けたように見えた。

事実サタンは殴り飛ばされて大きく吹き飛び、壁に叩きつけられる。

「む？」

だが、攻撃した側のアドラメレクが首を傾げた。

「あぎぎぎぎ……」

「……生きてた」

ルシフェルは、心の底から驚いた。

二撃目の槍に砕かれなかったのは、奇跡だと思った。だが続けざまに放たれた拳もまた到底回避できるタイミングではなかったし、事実サタンは拳を真正面から受けて吹き飛ばされた。

全身の骨が粉々に砕け、壁に叩きつけられる前から死んでいてもおかしくない威力だ。

「面白い真似をするな、小童」

「へ、そ、そりゃ、どうも……いてて」
だが、骨が砕けるどころか、サタンはその場で立ち上がりすらしたではないか。
なぜか鼻と耳、そして脇腹辺りから出血が見られるが、あのアドラメレクの攻撃の中でその程度しか出血が無いことの方が不思議である。
「おいサタン、さっきの……」
ルシフェルはといえば、サタンの無事にも驚いたが、全く別のことに気づきサタンを問いただした。
「あ……気づいた？　意外と、うまいだろ？」
アドラメレクの拳に吹き飛ばされる直前にサタンが放った紫色の熱線。
あれは、ルシフェルの得意とする魔術だ。
「体も、もうちょい、鍛えないとな。やっぱ、あの速度で飛ぶと、体にクる」
サタンは大きく息を吐くと、再び手に意識を集中させはじめる。
「待たせたな、ほら、続きだ」
そう言ってまたアドラメレクの方に向かって真っ直ぐ走り出す。
「……来いっ！」
アドラメレクの槍が三度唸る。
サタンの突撃の軌道に合わせてピタリと突き出される槍。だが突如、サタンの視界が塞がれ

る。

「我が槍技、魔氷傘の前には、先程のような小細工は通用せぬぞ！」

まさしく巨大な氷の傘とでも言うべきものがサタンの行く手を塞ぐ。

もちろん氷は広がるだけではない。サタンに向けられた面すべてに氷の刃が無数に突き立ち、それが氷の傘から切り離され一斉にサタンに襲い掛かる。

「おおおおおおお!!!」

だが、数百にも及ぶ氷の刃を前に、サタンはひるまなかった。

「こうだな!!」

サタンは突撃の勢いのまま、前方に宙返りをして、片手を地面に叩きつける。

すると次の瞬間、まるで初めからその場に埋まっていたかのように、サタンが地面から一振りの剣を引き抜いたではないか。

「な、何それ!?」

「むう!?」

ルシフェルもアドラメレクも、サタンの奇手に目を見開く。

だが驚きはそれだけでは終わらなかった。

サタンは向かってくる氷の短刀の群れの中に自分から突っ込み、生み出した剣でそれを叩き落としながらアドラメレクに向かってそのまま突撃しはじめたのだ。

「な、何っ!?」

魔力で動く数百の氷の短刀は、勿論サタンの体に刃を突き立てんと高速で動いているのである。

だが少年悪魔はその全ての軌道を見切り、体にほんのわずかの切り傷を負っただけで、魔氷傘の結界を破ってみせたのだ。

「せいっ!!」

驚きで次の一手が遅れたアドラメレクの魔氷の鎧の胸元に、さらにまたルシフェルの術であるはずの紫光の熱線が放たれる。

アドラメレクは敢えてそれを無視し、肉迫してきたサタンが振りかぶる剣を槍の柄で受けとめた。

だがそこでアドラメレクは、さらに驚くべきものを目にすることになる。

「そ、その剣は……氷!?」

剣に見えたのは、その実氷でできた単なる棒でしかなかった。

アドラメレクの魔氷の鎧に比べれば、魔力が通っているとはいえ強度はたかがしれているし、何よりこんな棒切れが体に当たったところで大したダメージではない。

だがそれでもアドラメレクは驚きを隠せない。

なぜならこの部屋の氷と水は、アドラメレクが魔力を行き渡らせ、支配下に置いているはず

だからだ。

その氷を敵の干渉で奪われたことなど、これまで一度もなかった。

「初めてにしちゃ、上出来だろ！」

サタンは一瞬の鍔競り合いの後に、今度は自分からアドラメレクと距離を取り、たった今アドラメレクを驚愕させた氷の棒を、自分の力で粉々に砕く。

だが砕けた氷は、その場で落ちたり溶けたりはしなかった。

サタンの周りを守護するように浮遊したまま、

「いけっ!!」

アドラメレクに襲い掛かったのだ。

サタンの握り拳の半分程度の氷の礫。当たったところでさしたるダメージはない。

しかしここまで数々の予想外の手でアドラメレクを驚愕させてきたサタンである。

アドラメレクにももはや油断は無く、氷の礫と侮らずにそれを槍で叩き落とそうとする。

金属と氷がぶつかる耳障りな音が連続して響き、そして、

「おのれっ!!」

次に上がった音は、アドラメレクの叫び声だった。

槍に砕かれた氷は、霧消することなくそのままアドラメレクの顔目がけて殺到したのだ。

微細なガラス片のような氷でも、サタンの魔力が残った氷が眼球に当たれば無事では済まな

い。

もちろんアドラメレクの肉体は普通の蒼角族とは桁違いの強度を誇っており、サタン程度の魔力がこもった氷なら、瞼を閉じればそれだけで眼球へのダメージを防ぎきることは可能だろう。

だがアドラメレクは、そうしなかった。

一瞬でもサタンから目を離せば、またどんな奇手を出してくるか分からない。

アドラメレクはサタンを視界に収めたまま、氷の薄片から逃げるようにして後方に跳躍し、大きく距離を取った。

「ちぇー……やっぱうまくいかないか」

サタンは目論みが外れたことを悔しがるが、傍から見ているルシフェルにしてみれば、あのアドラメレクを一瞬とはいえ後ろに退かせたことに驚嘆せざるを得なかった。

無論、アドラメレクを手玉に取っているように見えて、身体的なダメージを負っているのは圧倒的にサタンの方だ。

先程の横薙ぎの槍や左腕の正拳突きを食らって生きていたのは、サタン自身が槍や拳の進行方向に向かって『飛翔』したからに他ならない。

力に逆らわなければダメージは減るが、さりとて蒼角族最強のアドラメレクの槍と拳である。完全に力を受け流すこともできず。飛翔に追いついた風圧だけでも、サタンの脆弱な体を傷

つけるには十分な威力を持っていた。
自分の体を無茶な速度で飛翔させることも、体に大きな負荷をかける行為だ。
回避をしても、ダメージは免れない。それが今のアドラメレクとサタンの、如何ともし難い実力差である。
だがそれだけの実力差を認識して尚、アドラメレクはサタンから距離を取った。
仕切り直さねば危ない。そう思わせたのだ。
そして何よりルシフェルが驚いたのは、ほんの数日前まで飛翔術を持たなかったサタンが、今アドラメレクを相手に飛翔している、という事実だ。
「ちと油断したわ」
アドラメレクはそう言って槍を小さく振るい、魔氷傘の術で槍から消えた氷を補充し直す。
「我も見たことのない術の数々、なかなかに楽しめたぞ」
「そうかい。蒼角の大将にそう言ってもらえるとは、光栄だね」
「だが奇手を用いるということは、裏を返せば正攻法では我に敵わぬということでもある」
アドラメレクはそう言って構えを直すと、大きく息を吸った。
「遊びは終わりだ。我は貴様を、全力で戦うに足る戦士と認識したぞ」
言うなりアドラメレクの魔力がさらなるうねりを見せ、魔氷の鎧がより厚みを増す。
「油断はせぬ。鉄蠍族の甲殻に勝るとも劣らぬ我が最硬の鎧を見るが良い！」

アドラメレクの魔氷の鎧が、肉体を覆う範囲を広げてゆく。
玉座の間の気温が一気に下がり、魔の氷がアドラメレクの全身に吸い寄せられ、巨大な体軀を全身鎧のように覆い尽くした。
「ふううううううっ！」
先程サタンが狙った顔だけに留まらず、見上げるような牛頭の巨人は、氷の巨人として生まれ変わっていた。
「ゆくぞ！」
「おわわわわっ!!」
氷の仮面の奥からのくぐもった声が耳に届くや否や、アドラメレクは先程とまるで変わらぬ速度でサタンの目の前に迫っていた。
これほどの巨体がこれほどの密度の氷を纏いながら、まるで速度が衰えない。
サタンは慌てて横っ飛びに回避するが、アドラメレクはサタンが逃げた方向目がけて軽く腕を振るう。
するとまるでアドラメレクの腕が伸びたかのように、床に張った氷がサタン目がけて鋭利な氷柱を覗かせて突撃してくる。
「こんのっ!!」
サタンは紫光の熱線で迫りくる氷柱を迎撃しようとするが、

「げっ！」

細く頼りない光は、透明度の高い氷に吸収拡散され、氷柱の切っ先すら溶かすことはできなかった。

「うわうわわわわわわわ!!」

「逃がさんっ!!」

氷柱の切っ先から必死に逃げようとするサタンを挟み込むように、アドラメレクの巨体もまた氷柱の軌道の先に恐るべき速さで回り込む。

「おわあっ！」

サタンは慌てて熱線を放射するが、先程よりもずっと分厚い氷に覆われたアドラメレクはその攻撃を無視し、サタンに致命の一撃を与えるべく槍を横薙ぎに振りかぶった。

先程のような大振りではない。サタンの戦法は優秀だが、サタン本人の体力や魔力はアドラメレクには遠く及ばない。

なればこそ、全力の大ぶりを当てる必要はない。これは決して侮っているわけでも油断しているわけでもなく、サタンを殺すのに過剰でない程度のパワーの方が、隙の無い的確な攻撃をすることができるのだ。

サタンもアドラメレクのその意図を敏感に察した。

察したところで、傍から見ているルシフェルからも、状況はどうしようもないところまで来

ているように見えた。
サタンの背後からは追いすがる魔氷の錐、正面からはアドラメレクの魔槍。
絶体絶命の状態でサタンが取った行動は、再び熱線を放つことだった。
サタンが繰り出した攻撃の中で、唯一なんの効果も現さず、アドラメレクの注意すら引くことのできなかったルシフェルの模倣である熱線攻撃は、やはりこの瞬間もアドラメレクの突進になんら影響を与えなかった。
「万策尽きたか！　死ぬが良い!!」
必中のタイミングだった。
いや、よしんば外したとしても、一度見た回避方法でもう一度やられるほど、アドラメレクはぬるい戦士ではない。
サタンがどのような回避行動を取っても追跡できるよう、意識は十分に配っていた。
だが、
「やなこった」
サタンが突撃する方向はそのままに、その場で体を振り返らせることまでは想像できなかった。
「なっ!?」
アドラメレクは小さな悪魔の予想外の動きに対応が一瞬遅れた。こちらに背中を見せた行

動が意味するのは降参なのか、回避なのか、諦めなのか、思考が一瞬廻った。

そしてサタンの意図するところは、その中のどれでもなかった。

「うぐっ」

サタンは背後から迫る氷の錐に自分の脇腹を晒して、あろうことか体を貫通させたではないか。

「な、何っ⁉」

「おいっ⁉」

これにはさすがに傍観していたルシフェルも驚き、泰然と組んでいたはずの両腕を解いて思わず駆け寄りそうになるが、戦いは、まだ続いている。

「いってえええええええ‼」

サタンは痛みに絶叫しながらも、自分を貫いた氷を両手でしっかりと掴むと、そのまま後方、つまりアドラメレクに向かって飛翔しはじめた。

氷柱に刺し貫かれたサタンは追撃していた氷柱の推進力も手伝い、アドラメレクに予想を超えた速度で迫り、そしてサタンは、これまでで最も効果の無さそうな、『背中から敵の武器を露出させての体当たり』を敢行した。

もちろん、アドラメレクが自分の放った魔力の氷に貫かれるような間抜けなことにはならない。サタンの行動を苦し紛れの一手と解したアドラメレクは氷の軌道を変えようとするが、

「!?」

またも驚愕したのはアドラメレクの方だった。

氷の軌道は確かに変わった。だが、変わったのは氷の錐の後ろ半分だけ。

サタンの体を貫いた部分だけが鋭い音を立てて元の氷から切り離され、サタンの体を乗せてそのままアドラメレクに突っ込んできたのだ。

アドラメレクの魔力で動くはずの氷の先端が、アドラメレクの意志に従わなかった。

「うおおおおお!!!」

串刺しにされたまま雄叫びを上げるサタン。その体を運ぶ氷の切っ先が、わずかも勢いを失わずアドラメレクの体に激突する。そして、

「う、嘘だろ……」

ルシフェルの口から、驚嘆の声が漏れる。

まるで小柄なサタンを背後から父親のように抱きしめる形になったアドラメレク。

そのアドラメクが纏う魔氷の鎧に、亀裂が走った。

その亀裂は、サタンの脇腹辺りを中心として、アドラメレクの胸部から背中まで一週するように走り、そして、全身鎧を真っ二つに割り、次の瞬間魔氷の鎧はダイヤモンドダストのように微細な欠片となって砕け散ったのだった。

「ば、ばかな……」

アドラメレクもまた、起こったことが信じられなかった。
アドラメレクの魔力によって集められている氷がそんな簡単に割れるはずがない。
そもそも今のサタンとの戦いの間、如何なる魔術も剣も通さぬ魔氷の鎧が真っ二つに割れるほどの衝撃を受けた記憶は無い。
だが現実には、小柄なサタンが氷柱に貫かれるがままにアドラメレクに激突しただけで、蒼角族の長の全身鎧は割れてしまったのだ。
「氷ってさ、一ヶ所割れると、弱い、んだよ」
気がつけばアドラメレクの腕の中でぐったりとしているサタンがうめくように言う。
「その一ヶ所を丹念に突き続けて、最後に、氷と同じか、それより、強いもんで一気に力入れると、簡単に割れる、んだ。そうやって、氷取って、生活してる、生き物が、どこかにいるんだとさ。なぁ、アドラメレク……そんなことやる奴ら、見てみたいと、思わないか……？」
あまりの事態にアドラメレクもルシフェルも理解が追いつかないが、外部からのパハロ・ダエニィーノ族の攻撃に追われて蒼角族の戦士達が玉座の間に乱入してきたのが、丁度その瞬間だった。
「わっ!!　なんだよお前ら!?　今いいとこなんだから邪魔すんなよっ！」
ルシフェルは驚いて、援軍と思しき蒼角族の戦士達に向き直る。
「邪魔すんだったら僕が相手になるぞ。いいところなんだからちょっと黙ってろお前ら！」

何も言っていないのに、蒼角族は突然のルシフェルの出現に本当にどうしていいのか分からなくなってしまう。

慌てて族長に注意を払えば、二つに割れた魔氷の鎧が粉々に砕け散った瞬間を目にしてしまう。

蒼角族最強の族長の鎧が砕かれた。

それを為したのは状況から言って、どう見てもルシフェルではなく謎の少年悪魔だ。

「一体どうやって、我が魔力の行き渡るこの鎧に干渉した」

「いや……うぐ……ごくごく普通に、光と、熱と、楔と、ほんのちょっと、俺の魔力……がはっ……」

サタンは苦しげに言う。

「熱線を、丹念に、同じ場所通せば、熱線による温度変化と、あんたの魔力による再凝結の繰り返しで、その、部分だけ、氷の密度が、他のとこと、変わるから、あとは、そこに、楔をガンって打ち込んで、やれば……ああ、楔は、これ、ね。さっき氷の、棒作った要領で、俺の、体通った氷は、俺のものにして……」

言いながらサタンは、脇腹を貫く氷柱を叩き、体に伝わるわずかな振動でまた顔を顰める。

「あとは、割れた所をくっつけられないように、さっき、あんたの、顔、狙った、がはっ、氷の、粒とか、俺の、血とか、隙間に、潜り込ませて、邪魔させて、なぁ、アドラメレク」

サタンは荒くなる息でアドラメレクを見上げた。
「クズみてぇな魔力しか、持たない俺でも……戦い方次第で、あんたとここまで、戦り合える……なら、あんたが、今よりもっと賢く戦えば、鉄蠍とも、もっと楽に渡り、合える。あんたら蒼角の名も、魔界に轟く。あんたも族長なら、一族を、無駄死にさせるなよ。な、俺と一緒に、皆を連れて、もっとでかいもの、見に、行かないか……俺は、お前より、弱いから、気に入らなきゃ、いつでも、俺、殺して、抜けていいから……」
「貴様は……」
戦いの最中とは打って変わって穏やかな声色になったアドラメレクは、小さな悪魔に問う。
「我らを使って、鉄蠍を滅ぼそうというのか？」
「……はは、まぁ、すぐ理解してもらえると思っちゃ、いない……ああ、あんた達の力を、アテにはしている、けど、それは、鉄蠍の連中を滅ぼすためなんかじゃ……うぐふっ!!」
サタンは息も絶え絶えになんとか言葉を続けようとしたが、全身を貫くダメージに肉体が悲鳴を上げはじめる。
このまま然るべき処置を施さねば、サタンの命は間もなく尽きるだろう。
「おい、蒼角の大将、そいつを放せ。まだ戦い足りないってんなら僕が相手になる」
「……ルシフェル」
先程のやる気のなさそうな様子はどこへやら、今やはっきりと戦う意志を示しているルシフ

エルを、アドラメレクは目だけを動かして見る。
「正直今の今までどうでもいいって思ってたけど、本気でそいつに興味が湧いた。何か面白そうなことをやりそうだから、そいつの命をしばらく永らえさせたい。嫌だって言うんなら、そいつがやったのの何百倍もの威力の熱線を浴びせてやることになるけど」
「……」
アドラメレクはすぐには応えず、腕の中で血を吐く小さな悪魔を見下ろした。
そのとき、
「うわあああ!!」
「アドラメレク様!!　敵が!!」
玉座の洞に通じる回廊から、戦闘の音が聞こえはじめる。
パハロ・ダェニィーノ達が岩塊のほとんどを制圧した印だろう。
ルシフェルの迫力に固まっていた者達が、雪崩を打って駆け込んでくるが、やはりアドラメレクは微動だにしない。
「サタン！　ルシフェル！　無事か!!」
そこに、一人も数を減らすことなく編隊を率いて到着したカミーオが飛び込んできた。
「むぅ!?」
そしてアドラメレクの手中で血まみれになっているサタンを発見すると、カミーオは瞳に怒

りをたぎらせて剣の切っ先をアドラメレクに向ける。
「蒼角の長よ！　その小童を放してもらおう！　戦い足りないというのなら、ここからはこのカミーオが相手仕る!!」
　老いた気迫を腕に込めて、ルシフェルと全く同じことを宣言するカミーオの言葉に、またアドラメレクが少し動いた。
「音に聞こえた魔鳥将軍カミーオ。この小童は、パハロの隠し玉か」
「ふん、そんなクソガキ、吾輩の一族などには相応しくない。その者は」
　カミーオは剣を斜めに切って言った。
「魔界を変える可能性だ！」
「魔界を変える……」
「どんな風に変えたいのかは僕らもまだ見えてこないけどね。でもこの砦はサタンの計画通り、パハロ・ダェニィーノ族の手に落ちた。それでいて、恐らく死んだ者はほとんどいない」
「そんな、ことが」
「それがその小童の指示なのだ。逆らう者は徹底的に痛めつける、だが、決して殺すなと」
　アドラメレクは瞑目する。
「それが、『勝ち方』か」
　自分の何分の一も生きていないような少年悪魔の言葉が、脳裏に響く。

「……それで、我らの力を使って、この小僧は何を望む」
カミーオとルシフェルは、思わず顔を見合わせた。
お互いの表情には、自分達が辿ってきた道ながら、信じられないという思いが渦巻いている。
あのアドラメレクが今、サタンの軍門に下ろうとしている。
「とりあえず、お前らがいれば鉄壁の軍と真正面から睨み合える!!」
まるでその言葉を待っていたかのように、傷の痛みに瀕死の状態だったサタンがカッと目を見開き叫んだ。
「なぁアドラメレク、カミーオもルシフェルも、俺よりずっと強い。二人には、気に入らないときには俺を殺していいって言ってある。お前も、そうしてくれていい。だから、今だけ」
サタンはまさしく血を吐くように、魂の乗った言葉を牛頭の巨人に放った。
「俺と、遊びに行こうぜ」

※

この瞬間、アドラメレクと蒼角族は、サタン・ジャコブの意志で動くことを決めたのだった。

「だから時期尚早だと言っておろうが!!」
「うるせー！　兵は神速って言うんだよ！」
「何が神速だ！　その兵はどこにおる!!」
「お前遂にボケたか!?　頭大丈夫か!?　こんだけいるだろ今まで見たこともないような兵力がさ！」
「黙らっしゃい！　こんなものは兵力とは呼べぬ！　ただの頭数だ！　血が抜けて冷静になるかと思えば余計に血気逸りおってこのクソガキが！」
「うるせぇボケジジイ！　この場でお前の時代終わらせてやろうか！」
「言うたな小童！　その体で吾輩に物申すなど百年早いわこのクソガキが！」
「何を！」
「なんだ!!」
「……なんだあれは」
「割とありがちな光景」
アドラメレクは、サタンとカミーオの売り言葉に買い言葉という表現が最も相応しい低次元な言い争いに、元から丸い目をさらに丸くしている。
ルシフェルにしてみればわずかな間にいい加減見慣れた光景であるため、特に気にすることもない。

蒼角族の岩砦。

アドラメレクとサタンが激闘を繰り広げた族長の洞で、サタンとカミーオ、ルシフェルとアドラメレクは今後の方針について話し合っていたのだが、アドラメレクとの戦いの傷が癒えない内からサタンが鉄蠍族と戦いたがるので、カミーオが全力でそれを制止しているところなのだ。

サタンの言葉と、実力を上回る戦いを見せた戦略に感服したアドラメレクは、サタンの『遊びの誘い』に乗ることを決め、この時点でサタンの味方と呼べる勢力は、これまでの五倍以上に膨れ上がったことになる。

元々パハロ・ダェニィーノ族の戦士達約五百人に加え、ルシフェル以前に取り込んだハグレ達が百人強程度の手勢だったのが、一気に蒼角族の戦士だけで四千人である。

ルシフェルとアドラメレクも戦力としては一騎当千の名に相応しく、魔力総量や兵力数でも、なかなか見られない規模になったことは間違いない。

もちろん、各種族分の非戦闘員も抱え込んだことにはなるが、彼らも最悪のときには剣や魔力で以て戦うことを覚悟している魔界の悪魔である。

だが、こうやって所帯が大きくなったが故に起こる弊害もある。

「よいか小童！　ルシフェルにしろアドラメレク殿にしろ、話の分かる者であったからこそ今貴様は生きているのだぞ!?　今の貴様の純粋な力は、はっきり言って蒼角の雑兵以下じゃ！

そのことを分かっているのか!!」

「だからなんだよ！　次の鉄蠍との戦いは、今回みたいにいきなり俺が総大将と戦うようなことはしねぇって説明したろ？　アドラメレクも納得したよな！　俺がここに集まった悪魔全員の指揮を執るってことは」

「う、うむ」

サタンにいきなり話題を振られ、アドラメレクは思わず頷く。

サタンの次の目標は、当然の如く蒼角と並ぶ魔界北辺の巨大勢力である鉄蠍族だ。

ここまで来ればカミーオもルシフェルも、サタンの腹積もりが敵の殲滅ではなく敵の懐柔であることは想像できる。

だが今は、いや、今だからこそそれは無理だろうという確信がカミーオにはあった。

「ほら！　アドラメレクが言うんだから蒼角族だって……」

「このバカモンが!!」

サタンの言葉をカミーオは一蹴する。

「アドラメレク殿の威勢に頼ってどうする!?　ルシフェルもアドラメレク殿も、貴様の新しい考えに興味を覚えただけで、我らの軍門に下ったわけではない！　ただお主の言う『同盟』の盟約者であるだけだ！」

「う、うん？」

「貴様の指揮などに従いたくない、と蒼角の者共が土壇場で言い出したらどうする？　アドラメレク殿を勝負で負かしたとはいえ、それはアドラメレク殿がそう認めたというだけであって、決してお主の力がアドラメレク殿を上回ったわけではない！」

「そ、それはそうだけどさぁ……」

「貴様の頭の回転は吾輩も認めるにやぶさかではない！　だが！　手勢が多くなればなるほど、纏めるには大きな力が必要になる。貴様はこれから『ソシキ』を作ると言っておっただろう！　だが貴様のような脆弱な悪魔の統率力で、五千の悪魔達を二万の鉄蠍にぶつけて好く動かし得るのか!?」

ここまで言われて、サタンもカミーオの危惧を理解しはじめた。

「あー、そっか、まぁそれは確かに」

「将が弱さはそのまま全体の弱さに繋がる。吾輩が長年指揮してきたパハロの者らを動かすのとは訳が違うぞ。まして貴様は、その鉄蠍すら巻き込んで、何かをするつもりであろう!?　ならば今度こそ雌伏の時ぞ！　今の貴様には、知恵を完璧に生かすための力が全く足りぬ！」

「……」

久々にカミーオに言い負けて、サタンは口を尖らせるが、今回ばかりはカミーオに助勢が加わった。

「まぁ、ジイさんの言うのも一理あるよね」

「ルシフェル！　貴様にジイさん呼ばわりされる覚えは……！」
「サタンお前、アドラメレクの槍食らいそうになったときに、自分が飛ぶ速さに耐えられずに自分がダメージ受けてただろ。あれはいただけないよ。いくらなんでもダサすぎる」
アドラメレクの大槍の初撃を回避したときのことを突かれて、サタンはまたも押し黙る。
「むむむ……」
「ふむ、ならば我も言わせてもらおうか。如何に計算の末のことであろうと、自爆覚悟の反撃というのは戦に於いては下手の下手。少なくとも将を自任する者の行動ではない」
アドラメレクは、サタンが氷柱で肉を切らせて鎧を断ったあの攻撃のことを言っているのだろう。
三者三様に突っ込まれて、サタンはぐうの音も出なくなってしまう。
「あのさ、一つ聞きたいんだけど」
「……なんだよ」
黙り込んでしまったサタンに、ルシフェルが問う。
「お前、いつの間に飛べるようになってたの？」
「……あ？」
「あとあの熱線。あれ僕の術だよね？　一体どういうこと？　お前ここに来るまでに、何かやったの？」

「……ああ、そのこと」

三人の大悪魔に言い負かされてスネ気味なサタンだが、ルシフェルの問いがそれなりに自分を評価してのことと理解し、とりあえず口を尖らせながらも応える。

「ただ真似してみただけだよ。見たり食らったり感じたりしたことを色々自分の中で試行錯誤して、飛ぶのは意外と簡単だった。熱線は、多分ルシフェルよりずっと弱いけど……」

「他部族の魔術を真似した、だと？」

この答えに驚いたのはアドラメレクである。

「では聞くが、まさか我との戦いの間に貴様が使ってみせた氷の棒術は……」

「ああ、まぁその、あんたがすげぇことやってっから、真似できるかなって。本当はきちんと刃が立った剣にしたかったんだけど、やっぱ見様見真似じゃ全然綺麗にいかないよな」

「……そんなことが、可能なのか？」

「まぁ、こいつは実際やってみせてるわけだけど……僕もあまり聞いたことないね」

アドラメレクもルシフェルも、それなりの時を生きている自負はあるが、サタンのような小器用な真似をする悪魔については、心当たりは無いようだった。

「この小僧は、本当に小さい頃から吾輩が色々と稽古をつけたが故、他者から学ぶということに特別長けているとも言えるかもしれぬな」

悪魔が、他種族にものを教える。

このこともまた、サタンとカミーオの間で自然に発生していたが、さりとて魔界ではまず見られない奇跡の光景だったのだ。

そしてサタンは、再びその奇跡を起こそうと考えた。

「そうだ！　なぁなぁ！　俺もうカミーオから何か教わるの飽きたからさ、いい機会だから二人共、俺に戦い方教えてくれよ！」

「「はぁ!?」」

これにはルシフェルとアドラメレクは声を揃えて目を剝き、

「何が教わるの飽きただこのクソガキが!!」

カミーオはまたも激昂する。

そもそもカミーオのようにサタンの完全な味方というわけでもない二人である。

アドラメレクに至っては手を組む、と口約束をしてから二日と経っていないのだ。

「……ふうむ、それもまたよしか」

「「えぇ!?」」

だがそのアドラメレクが思いのほか前向きな反応を示し、今度はルシフェルとカミーオが声を揃えて驚く番だった。

「形だけでも、我と蒼角族は此度の戦いでサタンに敗北した。だが蒼角の者の中には、サタンではなくカミーオ殿やルシフェルの力に負けた、と思っておる者は多い」

「あのさ、さっきから気になってたんだけど、なんでお前ら二人、僕だけ呼び捨てにするわけ？」

ルシフェルのささやかな疑問は、この場では無視された。

「だが実際に今後の『指揮』を執る者、つまり我らを負かしたのがこのような脆弱な悪魔だと知られれば、確かに不満や離反を招くやもしれん」

アドラメレクは自分の言葉に自分で頷いてから、大儀そうに立ち上がった。

「このアドラメレクと蒼角族に上から物を言う男が、これほど弱くては困る。強くせねばなるまい」

「あー、まぁそういう理屈なら、僕に色々言う癖に弱いのは、一応気にはなってた」

「お、おい、ふ、二人共？」

妙な眼光の鋭さを見せるアドラメレクとルシフェルに、サタンは少し怖けづくが、さらに新たな眼光がサタンを射すくめた。

「ふむ、こやつも吾輩から教わるのも飽きたと言うし、最近物事がうまくいきすぎて調子に乗っておるところもあるようだしのぉ。ここは一つ、クソガキの身柄を二人に預けるのも悪くはあるまい」

「か、カミーオ!?」

「なぁに、安心しろって、僕らまだお前がやることに一応興味あるからさ」

「殺しはせん。死にかけはするだろうが」
「えええええええええええちょっとせめて怪我がもうちょい治るまで……！」
「さっきその足で鉄蠍に攻め込もうとしてたろ？　大丈夫だって」
「ルシフェルの言う通りだな。どれ、先の襲撃でパハロにやられた鬱憤の溜まっている者を数名集めようか」
「おいいいいいいいいいいいいいいい!!!!」
巨人と小人に引きずられて岩砦の何処かへ連れ去られたサタンをカミーオは翼を振って見送ると、
「さて、と……吾輩も、アドラメレク殿に魔鳥将軍と呼ばれる程度の働きはせぬとな」
そう言って、パハロ・ダェニィーノ族の戦士達を二十名ほど呼び出し、彼らを率いて何処かへと姿を消したのだった。

※

「砂塵の荒野のハグレが？」
薄暗い洞窟の奥で、低い声が確認を取るように響く。
「は。ルシフェルの姿が、突如消えました。同時に我が鉄蠍の戦士団が何名かやられたようで

ございますが……」

「何処かに飛び去ったか……」

「最後に接触した者達が全滅した故に詳しいことは……が、あ、ぞ、族ちょ……」

報告を上げる若い者の声が、唐突に苦悶の表情を浮かべる。

洞窟の闇を、魔力による息詰まる緊張が支配した。

「そのようなどうでもいい話をわざわざ伝えにきたのか」

「い、いえ、そ、それが、その、が、ががが……がはっ……はあっ、はあっ！」

その瞬間、洞窟に満ちていた魔力が消える。

報告の若い声は、何か強い力に解放されたかのように荒く息を吐きながらも、命じる声に答えた。

「は、はあっ！　それがその、最後にルシフェルの魔力が観察された地点の周囲に、奇妙な痕跡が残っておりました」

「……？」

「足跡でございます。我らでも、蒼角の者でもない足跡が南方からルシフェルのいた砂塵の荒野にまでずっと続いておりました」

「砂塵の荒野の南方……巨岩に巣食う魔鳥共の土地か」

「御意。足跡はパハロ・ダェニィーノ族とは明らかに異なる形状をしておりましたが……」

「ルシフェルが魔鳥共に味方した、と？」
「考えにくいこととは存じますが、一応の動きとして、族長に報告申し上げるべきかと判断致しました」
「……覚えておこう。下がれ」
「はっ！」
暗闇の中で、刃のような鋭さを持つ男の声が、若い報告の声を下がらせた。
「あの荒くれ者がどこかの部族に味方することなどあり得るか……？」
族長、と呼ばれた男は、薄暗い洞の中から大儀そうに立ち上がると、すっと体を浮かせて洞の天井に空いた穴から外へと出る。
強風吹きすさぶ山脈の中でもひときわ高き赤い峰から現れた族長は、四肢と顔を黒い鉄のような皮膚で覆われ、二股に分かれた尾を持つ長身の男であった。
峰々を渡る風を真っ直ぐ見据える瞳は、鋼鉄の皮膚の冷たさを宿したような刃の視線。
その視線を山脈の裾野の遥か彼方に向ける。
その瞬間、見えるはずのないもの、聞こえるはずのない音を、彼は見て、聞いた気がした。
「まぁ、良い」
彼は温かみなど微塵も感じさせぬ笑みを浮かべ、頷く。
「どのように魔界が動こうと、最後に立っているのは、私だ」

圧倒的な魔力と武力、そして普通の悪魔にはない知性で魔界北辺でも最大級の豪族、鉄蠍族を纏め上げる族長の名はアルシエル。
自分と一族に迫りつつある魔界の波の気配に、彼は己を奮い立たせたのだった。

※

二十年という月日は、悪魔にとって決して長い月日ではない。
地球で言うところの一年と魔界の悪魔達が認識している時のめぐりには大きく差異があるし、暦を数えよう、刻もうと考える悪魔がそもそもいないのだから、意味があるのはせいぜい今、昨日、明日くらいのものだ。
それ以外は、ずっと昔。或いは、明日の先。
ずっと未来、でないのは、それを考えることに意味が無いからである。
自分より強い敵が目の前に現れたときが、自分の生が終わるときなのだ。
もちろん悪魔だって死にたいわけではないから、同じ部族の者達は身を寄せ合って外敵から身を守る術を考えるが、それが実を結ぶかどうかは実際に敵に出会ってみるまで分からない。
敵も必死なのだ。
敵にとっては自分も敵。お互い殺されまいと必死に力を振り絞り、必死に殺し合う。

そして勝ったどちらかは、さらに自分の安全を確保するために、目の前にいる敵全てを殺さねばならない。

そうでなければ、目の前にいる生き残った敵全員が自分を殺しにかかるからだ。

誰も数えない長い暦の中で。数えるのも虚しいほどそんなことが起こり続けた魔界で。

そのような所で運良く全ての敵に打ち勝ち生き続け、今まさに豪族として名を馳せている者達。

或いはハグレと呼ばれ、わずかな生き残りの同族達と共に流浪の生活を続ける者達。

だが、魔界全土を区分して『北辺』と呼ばれる砂塵と巨岩と岩山の支配する広大な土地に、これまでの魔界の常識を覆す、新たな『部族』が生まれようとしていた。

「ふっ!!」

「ぬううう!!」

「そらこっちだ!!」

三人の蒼角族の戦士に囲まれているのは、頼りない木の棒一本だけを持ったサタンである。

対して蒼角族の戦士は全員が金属の槍を構えており、体格差もあって傍目には明らかにリンチの光景にしか見えない。

だが、サタンは蒼角族三人の連携から繰り出される変幻自在の槍の穂先を、その木の棒一本だけで軽々と捌いてみせた。

「よっと、そらっ!!」
「ぎぇっ!!」
一人の槍がサタンの木の棒にわずかに食い込んだ瞬間、奇妙な叫び声と共に体がかすかに光って倒れる。
「おお？　木の棒で雷撃？　どうやったのだ？」
「棒を意識させてから、棒を介さずその周囲に魔力の雷撃を纏わせたのだろうな」
一人が倒されたというのに、切迫性に欠ける残る二人の分析。
するとそのことを見抜いた別の声が、外側から激しく飛ぶ。
「今日も負けるのか貴様ら！　これでは三人組から四人組に格下げだぞ！」
「は、はいっ！　族長！」
「くそっ！　族長仕込みの相手に勝てるかよ！」
身も凍る叱咤に若干涙目になりながら、二人の蒼角族は改めてサタンに向き直るが、
「よっ……と！」
「ふぐっう!!」
わずかに動揺した隙を逃さず、サタンの棒の切っ先が一人のみぞおちに繰り出され、さして力を込めたとも見えぬのに、衝撃が分厚い筋肉を抜けて内臓に響く。
最後の一人になった蒼角族はその背後から襲い掛かろうとして、

「あっ！」
「ようし、俺の勝ち！」
こちらを見もせずに首筋に突きつけられた、魔氷の刀の殺気で身動きが取れなくなってしまう。
「はぁ……なんたるザマだ」
遠くからの呆れ半分、感心半分の声で、一気に勝負の場の緊張感は霧散した。
「お前達……情けないぞ。それでも蒼角族の戦士か！」
サタンと三人の戦士の戦いを離れた場所から胡坐をかいて見ていたアドラメレクがのっそりと立ち上がる。
「お、お言葉ですが族長、こ、こいつ強いっすよ！」
魔氷の刀で動きを止められた戦士が、冷や汗を流しながらその場に尻もちをつく。
「前は……勝てたのに……最近……てんで……」
「……うぇぐ」
みぞおちをやられた戦士は大の字で倒れ伏したままうめき声を上げ、雷撃でやられた戦士はまだ意識が戻らない。
「そりゃ俺だってやられっぱなしは嫌だからな！」
一方のサタンは氷の刀を消滅させ、木の棒を地面に軽くつくが、そのとき響いた音と重さは、

明らかに木のそれではなかった。
「そ、その音……」
「あ、これ？」
倒れた男に、サタンは得意げになって棒を見せる。
「木の棒に擬態させた魔氷の棒。得物が弱そうだと、それだけで油断するだろ？」
「う……」
「まったく」
痛いところを突かれて歯ぎしりする若い戦士と、サタンの策にまんまと乗せられた配下に呆れるアドラメレク。
「貴様らが不甲斐ないと、我ら蒼角族は本当にこの小童に乗っ取られてしまうぞ。気を引き締めぬか!!」
「畜生！　次は、次は負けねぇぞ!!」
「は、はいぃ……」
「……うぇぐ」
三人の若い戦士達が退場してから、サタンは大きく息を吐く。
「あんま言ってやんなって。あいつらだって頑張ってんだからさ」
「我は我が部族がこれほど腑抜けているとは思いもせなんだのだ」

負かした三人を庇うようなことを言うサタンに、アドラメレクは鎮痛な面持ちで首を振る。
「貴様がいなければ、十年前に蒼角族は滅びていたかもしれぬ。今のままではあの日の悪夢を再現しかねん。鉄蠍共とまともに刃を交えることすらできずに一方的に古強者共が滅びるのを見るのはもうご免なのだ」
「ああ、まぁな」
サタンの相手をしていた三人は、蒼角族の中でも比較的若い戦士だ。
アドラメレクの言う十年前。つまりサタンとアドラメレクの同盟が結ばれた十年後。
蒼角族は滅亡の危機に瀕した。
「あいつら、強かったもんなぁ……」
サタンは十年前を思い出す。
蒼角族と鉄蠍族の初の直接対決は、とても戦と呼べるようなものではなかった。
蒼角族の戦士達は、鉄蠍族によって一方的に虐殺された。
もしその戦いが従来の魔界の戦のように全戦力を投入した部族間抗争の最終決戦であったとしたら、それこそ蒼角族はアドラメレクを残して全滅していたことだろう。
原因は様々にある。
当時の蒼角族が、サタンやパハロ・ダェニィーノ族との同盟という考え方を理解できなかったこと。

理解できた者も、豪族の長たるアドラメレクが老いた魔鳥将軍と名も知れぬ少年悪魔を対等に扱うことに異を唱えたこと。

異を唱えた者達が『余所者に腑抜けにされた族長』たるアドラメレクと袂を分かって、多くの戦士を率いて鉄蠍族との戦いに突入してしまったこと。

だが何より一番の原因は、鉄蠍族の『軍』としての強さだった。

鉄蠍族の戦士一人一人の強さは、それほど際立ったものではない。

魔界最硬の皮膚を持つ防御力の高い部族であることは有名だが、それほど特異な魔術を使うわけでもない。

そしてそのことは、他ならぬ鉄蠍族が一番よく分かっていた。

鉄蠍族の戦いは、極めて組織立った統率されたものだった。

戦士の一人一人が勝手に敵を見つけて戦うのではなく、指揮官が戦う場所や場面、相手を指示し、その指揮官に対しさらに後方から上位の指揮官が大局的な合図で指示を出す。

鉄蠍族の戦いは、そんな戦いだった。

配下の暴走に気づいたアドラメレクが、サタンとルシフェルとカミーオ、そして残った若い戦士達を率いて援軍に駆けつけたときには、全てが遅かった。

一騎当千の戦いを是とし、目の前の敵を蹴散らすことだけを考えていた蒼角族は、鉄蠍族の組織だった『作戦行動』に返り討ちに遭った。

巨象が小型の肉食獣にまとわりつかれ引き倒されるが如く、一人五人を倒すどころか、三十人に囲まれて、一人も倒すことなく倒れる者が続出した。

奇しくもサタンが懸念し、アドラメレクに提言したことがそのまま起こってしまったわけだが、さらに蒼角族を慄かせたのが、鉄蠍族の念動魔術による『砲撃戦』だった。

鉄蠍族は、無数の岩を砲弾のように飛ばしてくるのだが、その砲撃が全く途切れないのである。

一人の悪魔の魔術には当然限界があり、それこそ突然変異レベルでもなければ魔力球による連続攻撃にも限度があるが、鉄蠍族の岩の砲弾にはそれが無かった。

援軍に駆けつけてすぐに撤退戦に移ったため、サタンは鉄蠍族の戦いを詳細には検分できていないが、それでも広範囲に渡る岩の砲撃が二十分は連続していたように思う。

この念動砲撃とでもいうべき攻撃の直撃を食らって死んだ者も多くおり、鉄蠍族との戦いではこの岩の砲撃についても勘案せねばならなかった。

とにかくあらゆる意味で規格外の鉄蠍族の戦いを目の当たりにした蒼角族は大きく戦力を目減りさせながら、一矢も報いることなく撤退を余儀なくされた。

だがもちろん鉄蠍族は降りかかった火の粉の火種まで潰さなければ収まらない。

ついには本拠地の岩砦にまで攻め込まれたのだが、戦場の様子を聞いたサタンが出したある案で、蒼角族の生き残りの戦士達は命からがら鉄蠍族の猛攻から逃れることに成功した。

「まぁおかげでこんな僻地まで逃げるハメに陥ったけどな」

「何、岩砦はまた奪い返せば良い。父祖の地を離れて過ごすのは初めてのことだが、貴様と過ごすようになってからそれも良いと思いはじめている」

サタンがアドラメレクと出会った蒼角族の本拠地とも言える荒野の西の岩砦は、鉄蠍族の追撃を逃れるために放棄されていた。

敢えて砦の入り口を開け放ち、中の待ち伏せを警戒させ、その隙に別の通路から脱出するという『空の向こうの世界』では空城の計と呼ばれるありふれた策略。

結果的には手痛い負け戦となったが、空城の計の成功により鉄蠍族の中に、策に『引っかかるだけ知恵を巡らせることのできる』悪魔がいることが分かった。

鉄蠍族にはアドラメレクやカミーオとは全く違う性質の『将』或いは『指導者』がいて、組織だった戦略を取っている。

そしてその悪魔こそ、サタンが思い描く未来の野望を成就するのに欠かせない重要なピースなのだ。

「次こそ向こうは油断しちゃくれねぇぜ？」

「分かっておる。こちらに貴様のような『策』を用いる者がいるとあちらに知れてしまったということだろう」

アドラメレクの答えにサタンは感心したように頷いた。

「お、分かってきたな」
「貴様と過ごしていれば嫌でも分かる。これでも蒼角の長ぞ」
アドラメレクは鼻を鳴らす。
「なればこそ、あの鉄蠍の長アルシエルめには色々と返さねばならぬものがある。次は勝たねばならん。頼りにしているぞ」
そう言うと、アドラメレクは二十年前よりも体がずっと大きくなったサタンの肩を一つ叩いて去った。
なんとか鉄蠍族の猛攻から逃れた蒼角族は、ルシフェルがかつて暴れていた荒野の中にある、大きな湖の近くの岩山に穿たれた天然洞窟に籠っていた。
アドラメレクの魔術の要ともいうべき水が豊富にあり、洞穴や岩山も天然の要塞として働くが、いつまでもこんな所に籠っているわけにもいかない。
アドラメレクに言われずとも、二十年前よりずっと成長したサタンは次の鉄蠍との戦に負けるつもりは微塵も無かった。
ルシフェルと変わらない背丈だったサタンの体格は、この二十年でルシフェルの倍ほどにも成長した。
種族的にも大柄な蒼角族には至らないものの、サタンの出身部族である黒羊族も、体格はそれなりに大きい部類に入る。

今や少年悪魔サタンは、若いながらに将としての風格を備えた立派な戦士となっていた。
「おーい、サタン」
と、アドラメレクと入れ替わりにやってきたのはルシフェルだった。
「おう、ルシフェル」
「……なんかまた背、伸びた？」
「さぁ？　自分じゃよく分からんが」
「ムカつくなぁ。この前まで同じくらいだったのに」
「この前ってお前、二十年も前のことだろ」
「僕にとっては二十年前なんて一昨日と変わらないよ。忘れてるみたいだけど、僕お前よりもずっと年上なんだからな」
ルシフェルは忌々しげに、遥か高くなってしまったサタンと視線を交わらせてから言った。
「それよりも言われた通りにしてきたけど、本当にいいの？　アドラメレクやカミーオは知ってるわけ？」
「知ってると思うか。相談したって止められるのがオチだ」
「……あのさ、それでお前の片棒担いであいつらに怒られんの僕なんだけど」
「いつも悪いな。後でちゃんと言っておくから」
「後でちゃんと言って、結局二人して怒られるのがいつものパターンじゃないか！　全く！

あのクソジジイも、ワイバーンのことがなかったらさっさと冥土に送り込んでやりたいよ！いつ死んだっておかしくないトシのくせに！」

「……まぁ、そりゃそうだなぁ」

ルシフェルの抗議をサタンは曖昧に受け流す。

ワイバーンのこと、とは、カミーオが二十年前から準備していた騎乗獣のシステムのことだ。ワイバーンと呼ばれる飛行する巨大なトカゲの魔獣を、大柄な蒼角族の戦士達を一度に大勢運んだり、空から地上を攻撃するための機動力にしたりする目的で飼いならしはじめたのだ。

獣の飼育、という発想自体はサタンにもあったものの、その対象に気性の荒いワイバーンを敢えて選び見事飼いならしてみせたのは、さすが空を熟知したパハロ・ダェニィーノ族といったところか。

カミーオは今、このワイバーンの飼育方法を蒼角族に伝授し、かつワイバーンを制御し空を駆けることのできる戦士の選定を任されている。

十年前の戦いで間断なく降り注いだ念動魔術の岩砲弾を回避するにも、このワイバーンの力はかなり重要になってくることが予想されている。

それはルシフェルも分かっているだけに、力で劣るカミーオの小言にもなんとか暴力で抗うことを抑えているのだが……。

「ま、これからのことは、その辺りを解決するための布石でもあるんだ。もう少しだけ、カミ

ーオの小言に耐えてやってくれよ」

「何、じゃあお前が今考えてることが解決したら、カミーオ殺してもいいの？」

「違ぇよアホ」

カミーオの力が、相対的に弱くなっている。

もちろん年齢によるものも大きいが、サタンを鍛える、という名目の下、多くの蒼角族やパハロ・ダェニィーノ族はもちろん、アドラメレクとルシフェルの力も相対的に上昇したからだ。異なる種族同士が、殺し合わずにお互いの技術を高め合う、という魔界の歴史を見回しても例を見ない事態のおかげで、鉄蠍との戦に敗北したのちの十年、サタン、カミーオ、ルシフェル、アドラメレクの率いる悪魔達の力は飛躍的に向上し、さらに多くのハグレや小部族を併呑するに至っている。

もちろん最も伸びしろの大きかったサタンの力は二十年前の比ではなく、今ではアドラメレクやルシフェルとも、一対一ならば互角の戦いを演じられるまでに成長していた。

それはとりもなおさず、サタンの力がいつの間にかカミーオを越えた、ということを意味する。

剣術では未だカミーオに分があるが、それも長くはないだろう。

だが今、カミーオにのしかかる負担は大きい。

古豪も認める魔鳥将軍の勇名と、重ねた年月で培った豊富な知識や魔術で大勢の悪魔達を

『教育』する役割を、今のところカミーオ一人が負っている。
それでいていざ戦が起こったら、カミーオはパハロ・ダェニィーノ族やワイバーンを駆る者達を指揮して戦場に出ることになるだろう。
ルシフェルはよほど強く言わない限りは気が向いたときしか動かないし、アドラメレクはカミーオほど物事に対する理解が深くない。
そして実力者達が力を認めているサタンも、まだまだ末端の悪魔達にとっては少年悪魔のイメージが強いせいか、侮られる気配が残っている。
蒼角族を中心としたサタン・アドラメレク同盟軍とでもいうべきこの多くの悪魔の集まりは、詰まるところカミーオが陰から支えることによって成り立つ部分が多いのだ。
「なんとかしてやんなきゃな」
カミーオの力は今後も益々重要になるが、一人にあまりに多くの重要事を任せすぎると、万一その者が欠ける事態に陥ったときの混乱は計り知れない。
「まだスタートラインにも立っちゃいないんだ。ジジイには長生きしてもらわねぇと」
と、そこに計ったかのように噂のカミーオがやってきた。
「おおサタン、丁度良かった。今しがた例のワイバーンの調整が終わってな。お前に試し乗りをしてもらおうと思っておったのだ」
「おお！　そりゃこっちもちょうどいいや」

「何？」
「早速乗らせてくれ！」
「う、うむ？　まぁよかろう。お前の言う『鞍』に『手綱』に『鐙』も試作品だが新しい物を乗せてある」
「よっしゃよっしゃ！」
サタンは舌なめずりせんばかりの勢いで、カミーオを促してワイバーンの下へと向かう。
その姿にルシフェルはなぜか嫌な予感を覚えたが、とりあえずやることもないので二人の後をなんとなくついていった。
「おお、なんか色つやよ良くなった？」
待ち構えていたワイバーンは、漆黒の鱗を赤い太陽の光に照り返し、凶暴そうな頭部の無数の角の下にある瞳をじろりとサタンに向けた。
「一度脱皮したからの。お前の言うように食わせるものも変えてみた」
ワイバーンと呼ばれる魔獣は、巨大な翼を持つオオトカゲのことで、サタン達が根を張っている魔界北辺には広く分布する魔獣である。
他の魔獣や魔虫を捕食する傾向にあり、生きるにあたり悪魔のように大気に満ちる魔力に対する依存度が低いらしい。もちろん何も食わせなくても生きてはいけるが、食事を与えるとより成長度合いが高まることが分かり、カミーオに餌を工夫させている最中だった。

「それ、扱い方は覚えておるか？」
カミーオは鱗の発色が良くなったワイバーンの手綱をサタンに放る。
「当たり前だ！　よっと！」
サタンはワイバーンの背に飛び乗ると、新しい鞍と鎧に身を落とす。
岩山の中腹に出る洞穴の先は広い棚状になっており、巨大な体躯を誇るワイバーンが離着陸するのに最適な構造をしているため、今後もこの場所はワイバーンの発着場として機能することだろう。
「そらっ！　飛べ!!」
サタンの号令でワイバーンは一声嘶き、翼をはためかせて赤い空へと舞い上がった。
「おー！　なんか前より速いな！　こりゃいいや！」
サタンを含め、強い悪魔達の中には当たり前のように身一つで飛翔することができる者もいる。
だが、遠距離を飛翔するにはそれなりの魔力や体力を消耗するため、ワイバーンは飛翔魔術を持つ者達にも重要な足として戦場で機能するはずだ。
「ま、僕には必要ないけどね」
「なんだルシフェル。吾輩に言えば、小柄なワイバーンも作ってやれるが」
「いらないよ。飛ぶときは自分の力だけで飛ばないと、なんか気持ち悪くなるんだ」

「ふむ、まぁ分からぬでもないが……おーいサタン！　そろそろ良かろう！　もう一度器具の様子を調整するから降りてこい！」

カミーオは空を舞うワイバーンに大声で言うが、なぜかサタンは降りてくる様子がない。

「……って、あいつまさか……」

その様子を見てルシフェルは、嫌な予感に囚われる。

そしてその予感はたった五秒後に的中した。

「おい……おいサタン、どこへ行く!?」

サタンは一声だけワイバーンを嘶かせると、そのまま東南東の空に飛び去ってしまったのである。

呆然とするカミーオと、呆れて額に手を当てるルシフェル。

「……おいルシフェル」

「……何」

「貴様サタンが何をするか知っているような口ぶりだったな。なんだ、『あいつまさか』とは」

「歳食ってるくせに地獄耳だなぁ……ったく」

ルシフェルは困ったように頭を掻くと、サタンが飛び去った方向を指さした。

「あいつこれからアルシエルに会いに行くんだよ」

「……何？」

ルシフェルはその瞬間、振り返ったカミーオの顔に往時の魔鳥将軍の姿を見た。
「や、僕ほら、昨日一日いなかっただろ？　鉄蠍の領地に、こっちの総大将が近々会いに行くって宣言してこいって言われて……」
「なああっ!!!!」
カミーオの喉からけたたましい悲鳴が上がり、ルシフェルはまたぞろお説教が始まるものかと覚悟した。
だが何時まで経っても続きの怒声は始まらず、気がつけばカミーオは、洞穴の中へと歩いて行くところだった。
「お、おいカミーオ？」
「アドラメレク殿や、ハグレの連中も全員を集めるぞ、ルシフェル」
「あ？　なんだよいきなり」
カミーオの言うことが分からず追いすがって横に並んだルシフェルは、カミーオの瞳に決意の光が宿っているのを見て取った。
「十年前、まだサタンは弱かった。おかげで蒼角族の暴走を許し、奴の野望の始まりが十年遅れた」
「あ、ああれね。そんなこともあったね」
「奴は、スタートラインに立ちに行ったのだ。吾輩も、それに応えて準備をせねばならん。時

間は無駄にはできぬ。何せ吾輩は老いぼれだからな」
「なんだよ。てっきりまた勝手なことをって怒られるかと思ってたのに」
「どうしようか悩んだがの。吾輩は、割合本気でサタンの夢の行く先を見てみたいのだ。そしてそのためには恐らく」
「恐らく、なんだよ」
カミーオは嘴で器用に笑顔を作り、言った。
「アルシエルもまた、サタンには必要な男なのだ」

「一体どういうつもりだ！」
「どういうつもりもクソもねぇよ！　あらかじめ来るって言ってあっただろ！」
地上から上がってくる大音声に、サタンはワイバーンの上から負けじと声を張り上げる。
「お前がアルシエルか！　パっと見他の連中とあんま変わらないのな！」
鉄蠍族の本拠地、山脈の砦は殺気立っていた。
つい先だって荒野のハグレ、ルシフェルがやってきたばかりだというのに、またも謎の悪魔にこれほどの接近を許してしまった。
しかも敵は、見たこともない道具を扱い、魔獣に乗って現れるという奇行を見せている。

アルシエルも鉄蠍族の中で一、二を争うほど長生きした男だが、このような行動を見せる悪魔は見たことがなかった。

「貴様が荒野のハグレ者が来訪を告げたという男か！」

「その通りだ！　挨拶の方法はルシフェルの野郎に任せたから、不作法があったら許せ！」

山肌から湧き上がってくる殺気から察するに、ルシフェルはここでそれなりのことをしたようだ。

元々、単独でアドラメレクやアルシエルとも渡り合うことのできたルシフェルしかサタンの望む使者の役割を果たせないことは分かっていた。

しかしここのところ彼らしくもなく大人しく過ごし、カミーオに素直に怒られたりしていた分ストレスが溜まっていたのだろう。

見れば峰々の中で一ヶ所だけ、明らかにおかしな抉れ方をしている山があった。

「こりゃ、相当やらかしたな……」

サタンは苦笑してから、改めてアルシエルに向き直る。

そしてなんでもないことのように告げた。

これまで誰にも、アドラメレクにも、ルシフェルにも、カミーオにも告げなかった、黒羊族の少年悪魔の、幼き日からの野望を。

「改めて名乗ろう、鉄蠍の長アルシエル！」

名が、空気を震わせる。

「俺の名はサタン！　いずれ、この魔界全土を支配する者だ！」

ざわめきは波となって、一様に空を警戒する鉄蠍族の者達の間を駆け巡った。

そしてざわめきの後を追う波は、嘲笑の大合唱であった。

魔界全土の支配などという概念を、悪魔は持たない。

なぜなら、絶対に不可能なことだからである。

周辺で名を轟かせる蒼角族とその長アドラメレク。鉄蠍族とその長アルシエル、最強のハグレ悪魔ルシフェルに魔鳥将軍カミ！オも、魔界全土の悪魔が遍く知る存在かといえば決してそんなことはない。

どれほどの大部族になろうとも、人口増加の限界があり、どれほど数が増えたところで、魔界全土が単一の悪魔で覆われるはずがない。

そう、敵を滅ぼすことだけが生きる道であった魔界に於いて、魔界全土の支配とは即ち他部族の完全消滅に他ならず、現実問題としてそんなことは物理的に不可能なのである。

だから、鉄蠍族達は笑った。空に現れた魔獣を従える奇妙な悪魔を。

だがざわめきと嘲笑の波は、ある一所に辿り着いた途端に、水を打ったように静かになった。

ただ一人、笑わぬ男がいたのである。

族長アルシエルは、ただ一人サタンの吐いた一言に衝撃を受けたように目を見開き、しばし空のサタンから目を離せずにいた。

鉄蟻族達は長のその姿に一人、また一人と口を閉じてゆく。

長は、笑った者達を咎めはしなかった。だが、誰もが笑う空の男の妄想を、笑わなかった。

長は、何を考えている？

「魔界全土を、支配……」

アルシエルはサタンの言葉を口の中で転がす。

サタンもまた、アルシエルだけがサタンの言葉の真意を探っていることを理解して、待った。

そして、アルシエルが何かに気づいた。

「そうか貴様が……貴様が魔鳥将軍の後継。蒼角族を陰で操る者か」

「俺のこと知ってるのか？　光栄だな。大豪族のアルシエル様の耳に届くほど、名を売るようなことはしてないはずだが」

サタンは、この二十年ほとんど表に出ていない。

十年前の戦いも矢面に立ったのはアドラメレクや蒼角の古強者達で、サタンの名がアルシエルに届くような事態にはなっていないはずだ。

だが、アルシエルは知っていた。いや、辿り着いた。

「蒼角族に、あのような負け戦をする頭は無い。そして昨日、誰とも慣れ合わぬはずの荒野の

ハグレが貴様の名を携えてやってきた。他に理由が必要か」
サタンはにやりと笑う。
こうでなくてはならない。
やはりこの鉄蠍の長は、並みの悪魔ではない。
アドラメレクやルシフェルと並ぶ力を持ち、カミーオを遥か凌駕する統率力を持ち、さらには悪魔として規格外の知の蓄積を持つサタンの思考についてくる。
この男を、蒼角族に殺させるわけにはいかない。
サタンの野望を叶えるためには、この男は絶対に必要だ。
だが、アルシエルの現状はカミーオ、ルシフェル、アドラメレク達を仲間にしたときとは訳が違う。
アルシエルと鉄蠍族は魔界北辺一の大豪族である。蒼角族を一度打ち負かしたことで差し迫った危機は無く、誰の助けも必要とせず、満ち足りない思いをするような状況にもない。
サタンは喉まで出かかる勧誘の言葉を必死に押さえねばならなかった。
今ここで直接的にアルシエルに何か言っても、彼の態度は硬化するだけだ。当然周囲の鉄蠍族達の神経を逆なですることにしかならないだろう。
だが、こんなことを思うのはいつ以来だろう。
恐らく最初にカミーオと出会ったとき以来ではなかろうか。これほどまでに、未来に続く道

の光をはっきりと見ることができたのは。
「お察しの通り、俺がその陰の悪魔だよ。黒羊族の出だ」
「黒羊族……忘れたな。覚えておくほどの連中ですらない」
アルシエルも部族の名だけは聞いたことがあるが、ハグレに等しい数しかいない流浪の弱小部族であり、滅びたのはもう随分昔のことだと記憶していた。
「はは、仕方ねぇな。チンケな一族だったからな。大豪族のアルシエル様に、覚えておくほどの価値もない部族だったってことを覚えていてもらっただけ上等だ」
「……っ」
出身部族を嗤われたサタンは気を悪くした様子はなく、皮肉を返すだけの余裕を見せる。
「だがお前はきっと、覚えておく価値も無かった一族から出てきた悪魔に負けることになる。そのときお前は心に刻み込む。黒羊族と、サタン・ジャコブの名をな」
その瞬間、殺気が山脈を覆い尽くした。
至極分かりやすい挑発に、アルシエル以外の全員が乗ってきたのだ。
ただでさえ上から見られているのに、さらには族長を面罵されたのだ、怒らない方がおかしい。
アルシエルだけが、泰然としていた。
「サタンなどというありふれた名、覚えるにも値せん。が、その顔は覚えたぞ」
「ほう？」

「いずれ貴様は、十年前の再戦を期して我らと事を構えるつもりであろう。そのときには私と鉄蠍族を侮辱したことを、後悔すらできぬほど無残に殺してやる」
「口が過ぎると、後でできなかったときに色々悔やむことになるぜ。沈黙は金なりだ」
「訳の分からぬことを」
アルシエルは吐き捨てるようにそう言うと、腕を水平に突き出す。
「私がこの腕を振るえば、ここにいる戦士達が貴様目がけて一斉に攻撃を仕掛ける。そうなる前に去れ。大いなる愚か者よ。次に相見えるのは、戦場だ」
「ありがたい。そうさせてもらうぜ」
サタンもここが潮時と判断した。
アルシエルの人となりも理解できたところで、ワイバーンの騎首を返す。
「邪魔した。またな」
そして、アルシエルに向かって軽く手を振ると、北西の空目がけて飛び去った。
山脈の下の方から、アルシエルの制止にも我慢できずに散発的に攻撃を仕掛ける者がいたが、念動魔術の岩砲弾も、魔力球による攻撃も、ワイバーンの速度と高度には届かなかったようだ。
それを見たアルシエルは、
「……少しは、気を引き締めてかからねばならぬ相手のようだな」
そう言うと口を引き結び、身を翻して座所へと戻ったのだった。

「こりゃあ、一筋縄ではいかなそうだぜ。アドラメレクんときみたいなハッタリは、絶対に通用しねぇな！」

ワイバーンで空を駆けながら、サタンは思わず笑顔が浮かぶのを抑えきれなかった。

「だがアルシエル……そして鉄蠍族……覚悟してろよ！　お前ら絶対に俺のモンにしてやるからな！　そして……」

サタンは空から、僅かに視線を南に向ける。

「全員で、南を目指す。そこで俺は」

その言葉は、サタン自身が駆るワイバーンの耳にすら届かなかった。

風と、空と、サタン自身と、そしてサタンが決して肌身離さず胸元にしまっている、小さな紫色の宝石だけがその言葉を聞いた。

「『魔王』になる」

※

「というわけで、アルシエルに宣戦布告してきた」

「バカなっ！」
「バカじゃないの」
「一応言っておこう。このバカガキが」
サタンは帰るなり、三者三様の馬鹿扱いを受けた。
「『せんせんふこく』とは以前貴様が言っていた、戦いを始める宣言のことだろう！　何故そんなことをした！」
一番驚いているのはアドラメレクである。
「奇襲を仕掛ければそれだけ有利になる部分も増えるというのに、相手に余計な警戒心を抱かせてどうする！」
こういった意見が出ることも当然承知の上だ。
「まー、僕も普通にそう思うけど」
「何か理由あってのことなのだろうが、それを吾輩達に何も言わぬまま実行するそのクセは改めるべきだ」
「言ったって絶対反対されるだろ」
「当たり前だ」
カミーオは口を尖らせるサタンを切って捨てる。
「だが自分以外の者に『反対させる』機会を作ることは、大事なことだ。吾輩達だから良いが、

今後吾輩達以外の者を貴様手ずから動かすこともあろう。そのような場合、例え反対されたとしても『相談した』という実績を作っておかねば、お前の言う『結果オーライ』であろうと不満が蓄積される。それはお前の言う『悪い勝ち方』であろう。今後貴様が指揮する者の全員が、吾輩達のようにお前にとって気安い者とは限らんのだぞ」

「それは……すまねぇ」

カミーオの理路整然とした反論に、珍しくサタンは言葉に詰まる。

「組織が大きくなれば面倒事も増える。それはお前自身が言っていたことだろう。自覚せぬか」

「はい、すいません」

これは間違いなくカミーオが正しく、自分が悪手を取った。サタンは反省して素直に頭を下げる。

「それで、何故そんなバカなことをしたのか説明してもらおうか。お前の真意も含めての」

「俺の真意？」

「うむ」

カミーオは、剣呑な雰囲気を漂わせているアドラメレクとルシフェルに目をやる。

「吾輩、ルシフェル、アドラメレク殿。本来ならばこうして一所で呑気に顔を合わせることなどあり得なかった面々を集めたお前のことだ。どうせ」

「え」

「まさか」
カミーオがここまで言って、残る二人も気づいたようだ。
「アルシエルを、この場に招く気なのであろうが。宣戦布告はその顔合わせ程度に思っておるのだろう。このバカガキが」
「あー」
「バカな……」
ルシフェルとアドラメレクの反応は、やはり旧来の常識で考えれば当然のことだった。
だがカミーオの言うことを身を以て体験している二人である。
サタンの考えを愚かなこと、と切って捨てることもまたできないでいた。
なぜなら他ならぬ自分達が、普通の悪魔の常識にかからぬ行動をしている自覚があるからだ。
「まー、そういうことだな、うん」
サタンはカミーオの言葉をあっさり肯定したが、カミーオの追及はそれでは終わらなかった。
「そろそろこのジジイにも聞かせぬか。一体これだけの者を集めてお前は何をしようとしておる」
「何って……」
「うむ、我もそれは、気になるところだ」
アドラメレクも同調してきた。

「我とやり合ったときサタン、貴様は言ったな。今後をどう考えているのかと。今の貴様がやっていることは、魔界の常識にかからぬ方法とはいえ、姿形の違う味方をただ増やそうとしているようにしか見えぬ。だがそれでは我がかつてそうしていたのと時の過ごし方の質は変わらぬ。アルシエルや鉄蠍すらその味方に数えようとする貴様の真の目的はなんだ」

「……そうだねー。僕も最近、ちょっとやることマンネリ化してきて『遊び』に飽きてきてるんだけど」

ルシフェルの一言は重要だ。

サタンとカミーオ、ルシフェル、アドラメレクはサタンを中心に交誼を結んでこそいるが、それぞれの間にはっきり上下関係があるわけではない。

強いて言うならカミーオがサタンの保護者役を自認している程度だ。

周囲を知識で導いているサタンの思惑が分からないのは、他の面々にとっては居心地が悪いだろう。導かれているといえば聞こえはいいが、操られていると取れなくもないからだ。

「……笑うなよ」

サタンもそう考えたから、遂に明かすことにした。己の真の目的を。

「と、話す前に一つだけ確認したいことがあるんだ。今の俺達って、どんな集まりだ」

「「ん？」」

サタンの問いに、他の三人は顔を見合わせる。

「カミーオの言う通り、俺はこの場にアルシエルを迎えたい。奴が率いる鉄蠍族もな。その勝算は俺の中にもうある。そんでうまいこと奴がここに来たとして、そのとき俺達は、どんな集団だ？」

「どんな集団？」

仮に鉄蠍がやってきたとして、鉄蠍、蒼角、パハロ・ダェニィーノ族の三部族が人口的には多数を占めるが、ルシフェルのようなハグレや、この二十年で併呑した小部族の合計は蒼角の非戦闘員を凌駕しつつある。

「もっと分かりやすく聞こうか。もし今鉄蠍が大挙して攻めてきたら、俺達は一致団結して戦うよな。そしたら俺達は、一体何族だ？」

「蒼角族……と言いたいところだが……」

蒼角族は確かにこの集団の中核を為す戦士団だが、十年前の戦いで個々の兵の強さが戦場での強さに単純には繋がらない、ということをアドラメレクはよく分かっていた。

ハグレや小部族の者達は用いる言葉から始まって外見や背格好、能力などもまちまちで、一つに纏めるための共通点を見出すことが難しい。

そもそもこの場で話し合っている四人からして、外見も能力も何もかもが違うのだ。

ただ一人サタンだけが、三人に鍛えられたことで三人と同等の能力を有するに至っているが、いずれにしろアドラメレクを族長とした蒼角族、カミーオを族長としたパハロ・ダェニィーノ

族、といったような分かりやすい言葉では纏められない。

「俺は一つ、この集団を表す言葉を知っている。その言葉があれば、俺がアルシエルを無茶な方法で仲間に入れようとしている理由も分かってもらえると思う。だが」

サタンは一瞬言葉を濁した。そして、少し自信なさげに三人を見回す。

「この言葉を吐いた瞬間、お前達が俺の敵に戻ってしまう可能性もある。だから今まで黙ってた。俺は、弱い悪魔だからな」

滅びてしまった黒羊族としては史上最強となったであろう今のサタンも、カミーオ、ルシフェル、アドラメレクとの出会い、彼らの協力、彼らの鍛錬の結果今この場にいる。

サタンはそのことをよく分かっていた。

この言葉を吐いた瞬間、自分と、彼らとの関係は決定的に変わる。できればこの言葉を吐くのはアルシエルを迎えてからにしたかったが、何もかもが想定通りに行くわけもない。

サタンがそう言うと、

「ふむ」

「ふぅん」

「……はぁ」

アドラメレクとルシフェルとカミーオは、少しだけ間を空けて顔を見合わせた。

「ならば……」

「あれかな」
「……しかあるまいて」
「な、なんだよ」
三人は少しだけ拍子抜けしたように、それぞれサタンを見て、そして異口同音に言った。
「「「『魔王軍』」」」
「……おいっ!!」
そのものズバリの言葉で、サタンは慌てた。
それはサタンが心の奥底に秘めた、秘中の秘の言葉だったからだ。
「なんだ、そんなことを後生大事に抱えて我らの離反に怯えていたわけか」
「若いっていいよねー」
「まぁ仕方あるまい。こやつは色々と、常識外れの規格外なのだ」
にもかかわらず、三人の悪魔はほとんど世間話の範疇だともいうように、サタンの心に秘めた言葉を弄ぶ。
「お、お前ら……」
「貴様の何倍もの時を生きている我々が、その言葉を知らぬとでも思うのか」
「魔界でも伝説上の存在って言われてるあいつも、お前と同じ名前だったんだよね」
「『大魔王サタン』。古の時代、ただ一人魔界全土の悪魔を統一した、偉大なる王の名だの」

サタンは唖然とする。
古の大魔王サタン。
その名は彼がカミーオと出会うずっと以前に、『彼女』から聞かされた名だ。
だが遥か古代の存在であるその大魔王の名や覇業を語り継ぐ者は今の魔界にはいない、とも聞かされていた。
だがそれは『語り継ぐ者』の存在を他者に知らせる者がいなかっただけで、こうした古豪達の中には、その記憶を受け継いでいた者が確かにいた。
サタン自身自覚のないことではあるが、その者達をサタン自身が引き合わせたのだ。
「ふむなるほど、見えてきたぞ。この小童の目的が。そして何に怯えていたのかもな」
「途方もないこと考えるねぇ」
「だが、吾輩それを見てみたくもある」
「サタンよ」
肝心のサタンを置き去りにして盛り上がっている三人だったが、ふとアドラメレクがサタンに向き直った。
「良いのではないか。貴様が『王』ということで」
「へっ!?」
「そうだね。それでいいと思う」

アドラメレクとルシフェルの双方から集団の頭たる『王』に推挙されて、サタン自身が狼狽える。

「だ、だって……お前ら、いいの？」

実力からいえば、サタンとルシフェル、アドラメレクの間に目に見える差は無い。

カミーオも、パハロ・ダェニィーノ族の力を合わせれば決して彼らには負けないだろう。

「今までと何も変わりはしない。貴様の居場所に、明確な名がつくだけのことだ」

だがアドラメレクはなんでもないことのように言った。

「貴様が我らを指揮し、我らが動く。だが我らは気に食わなければ、利害が一致しなければ貴様から離れる。当初からその約束だっただろう。それは貴様が『王』と名乗ろうと名乗るまいと変わらない」

「ハグレの連中は、やっぱり分かりやすい『長』を求めたがるものだしね。でもやっぱり見た目や力もバラバラだし、その点『王』は分かりやすくていいじゃん」

ルシフェルもまた、いつもと変わらぬ気軽さだ。

「アドラメレク殿が今言う『王』は名乗る者を万能足らしめる魔術ではない。名乗る者が組織の中で果たすべき『機能』を表す言葉だ。サタンよ、お前がその『機能』を越えた次元の『王』になれるかどうかは」

最後に老いた魔鳥将軍が、『王』となる者を頭一つ高い所から見下ろして言った。

かつて出会ったばかりの頃の少年悪魔にそうしたように。
「これからお前が身を以て示せるか否かにかかっておる」

※

サタン達が本拠にする湖の山地に鉄蠍族の大部隊が追っているとの知らせがもたらされたのは、それから十日後のことであった。
岩の山脈の鉄蠍族本拠地からの距離を考えると、サタンの宣戦布告のその日の内には、アルシエルは軍を発したことになる。
斥候の報告ではその数五万。十年前の戦いから想定していた鉄蠍族の総数を、遥かに上回る大軍勢だ。
「そっちから真っ直ぐ五万来るってことは、おかわりがあと数千はいるだろうな。蒼角の岩砦に籠ってる連中」
「総力戦だな。非常に分かりやすい。それで、どうする。籠城するのか」
サタンの分析に頷きながらアドラメレクが尋ねると、サタンは首を横に振った。
「籠城したら勝てない。数は向こうが上なんだ。こっちが殻に籠っちまったら、向こうからは好き放題攻められた上にこっちから反撃できる手数が限られちまう」

サタンは、今や会議の度に当たり前に用いられる『文字』を使って、設えられた岩の大卓の上に広げられた魔力の光面に戦場の様子を書き加えてゆく。

「アルシエルは進軍に際し、『陣形』を組ませている。兵の力を効率的に戦場で発揮させるための並び方だな。例えばこの四角形を描く形で並んでるのは『方陣』って言って、外縁には槍などの中距離武器。中心に遠距離攻撃隊。その間に近距離攻撃隊を組み込んで、敵がどんな方角から突っ込んできても対応できる形にするものなんだ。一人一人がてんでばらばらに攻撃するよりも、大勢の敵を相手にできて、かつ自分達の被害を抑えられる」

「なるほど。蒼角の者が一人でこれに向かっていっても力任せに薙ぎ倒すことはできそうにないな」

「じゃあ空からなら？　僕やパハロの連中で上からやれば、近接戦闘しかできない敵は無効化できるんじゃない？」

ルシフェルが手で空を飛ぶ仕草をするが、サタンは解説を続ける。

「空から普通に攻めても地上で正面からぶつかるよりはいくらかマシって程度だな。方陣ってのは全ての陣形の基礎なんだ。この形の一番外側の奴や、内側にいる奴らに一人おきに身が隠れるほど大きな盾を持たせれば、攻撃力は落ちるが近接戦闘部隊を戦場の前方に安全に輸送するための強固な防御力を持つことになる。空から攻めても、内側に術者がいればそいつらの反撃を受けることになる」

空の向こうの世界では『テストゥド』と呼ばれる進軍方式である。移動速度と攻撃力を犠牲にする代わりに、防御力の強さは他の陣形の追随を許さない。

「鉄蠍族は個々人の体格差の少ない種族だ。こういう陣形を組むのに適した体をしている。寄せ集めの俺達ではこういうことはできないからな」

確かにアドラメレクとルシフェルが並んで盾を構えても、隙だらけにしかなるまい。

テストゥドの最大の欠点は言わずもがな、盾を貫く攻撃の前では単なる獲物にしかならない、という点だが、悪魔同士の戦いでは魔術を攻撃ではなく防御に用いることもままあるため、敵の盾より強い攻撃を効率的に用意することは難しい。

「それに、あの連続砲撃のこともある。敵の術者の力も未知数だ。鉄蠍族の念動魔術が用意された砲弾を打ち出すだけなのか、空戦の敵を引きずり落とす力を持っているのかも分からない」

「ふむ、ではどうするのだ？」

「うん。カミーオ、頼んでおいたものは」

「突然のことだったから、全体にはさすがに行き渡らなかった。全体の半分といったところだ」

「上等上等。それだけあれば最初の一発としては申し分ない。あとルシフェル。お前はハグレの中から、そんなに強くなくていいから足の速い奴らを集めてくれ」

「足の速い奴ね。了解」

「それでアドラメレク。お前にはこの戦い、先陣を切ってもらいたい」
「うむ。望むところだ。十年前の借りを返すのに一番槍がこの我でなくてどうすると言おうとしていたところだ」
　意気込むアドラメレクだが、サタンはその意気に水を差す。
「盛り上がってるとこ悪いが、あんたが戦う時間はあまり長くない。所定の相手に攻め入って適当に暴れたら合図の後に速やかに引き返せ」
「何っ」
「今話し合った通り、アルシエルが鉄蠍の者達にどれほどの戦術を仕込んでいるのか未知数だ。最初から全力で潰し合うんじゃなく、少しずつ相手の力を解析しながら戦いを進めていきたい。そうすればお互い、無用な犠牲を払わずに済む」
「むう」
「あ、あとこれは全員に言っておくが」
　サタンは冷酷な顔になって言う。
「功を焦ったり、戦闘に夢中になって作戦を乱す者は見捨てるか、その場で処断することはそれぞれ伝えておいてくれ。この戦いは鉄蠍族を滅ぼす戦いではないってことを忘れるな」
　そしてそれぞれが、サタンの指示を実行するべく各所に散ってゆく。
　同時刻、鉄蠍族の後方で遠く湖の山地を眺めるアルシエルもまた、総大将として各所に指示

を飛ばしていた。

「敵のワイバーンの動きに注意せよ。ワイバーンを乗り回すのが総大将一人とは思えぬ。魔術隊、対空警戒を怠るな！」

慌ただしく鉄壁の者達が動き回る中、アルシエルはじっと戦場となるべき荒野の様子を注視する。

「さて……どのように動く？」

戦端は唐突に開かれた。

「先鋒部隊、蒼角族族長、アドラメレクと交戦!!」

「何？」

開戦の報せと同時に届いたのは、そんな衝撃の報告だった。

敵の中でも一、二を争う実力者が最初から先陣を切って出てくるのは予想外であった。

「……先鋒部隊の動きは」

「最初に当たった部隊は瞬く間に蹴散らされました。今は三方よりアドラメレクの部隊を囲んでおります」

「アドラメレク隊以外の敵兵は」

「パハロ・ダェニィーノ族を中心とした飛行部隊が見受けられますが、ワイバーンの動きは報告されておりません。ルシフェル、カミーオ他の動きも見られません」

「ふむ、なるほど」

報告に頷いたアルシエルは、すぐさま考えを纏めて支持を出す。

「アドラメレク隊は陽動だ。功を焦って深追いをするな。遠巻きに戦って懐深くまで入れさせず、敵が逃げる気配を見せたらそのまま逃がせ」

「はっ！」

報告は、指示の理由を聞かない。速やかに族長の指示を戦場に反映させるべく風のように飛び出してゆく。

「あの男がアドラメレクをただで先頭に出すはずはない。寡兵で挑んできた褒美だ。あと二手は、こちらが後手に回ってやろうではないか」

アルシエルは続々と上がってくる戦況報告の中から、次の一手を繰り出す瞬間をただただ待った。

依然、ルシフェルもカミーオも、あのサタンという男も姿を現さない。

アドラメレク隊との激突以外に各所で散発的に戦闘が発生した、という報告も上がったが、アルシエルはそれを無視した。

アルシエルが次に体を動かしたのは、空襲の報せが上がってきたときだった。

「空襲？　空からの攻撃か」
「は、そ、それが……」
伝令の戦士は、困惑した様子で言った。
「接近する敵影を、確認できませんでした！」
「敵影を確認できない？　パハロ・ダェニィーノ、ルシフェル、もしくはあのワイバーンがやってきたのではなかったのか」
「恐らくは、ワイバーンと思われますが……」
「何故そうもはっきりせんのだ」
「そ、それが、空を飛ぶ巨大な獣が、突然空に湧いて出たかのように現れたのです！」
アルシエルの声に籠る迫力に、伝令は慌てて続ける。
「接近に気づいたときには防御する間もなく、右翼側の陣形が、敵の獣から放射された魔力球による空襲で大きな被害を受けました。正確な被害はまだこれから……」
ワイバーンが接近を悟られることなく突然部隊の直上に出現する。何をすればそんなことができるのか。
そこには必ずからくりがある。姿を消すことのできる魔術は存在するが、その場合発動する魔力を術者隊が感知できないはずがない。
だがアルシエルの考えが纏まらない内に、先鋒隊からアドラメレク隊が撤退したとの報告が

入った。
その報告で、アルシエルは敵の攻撃の本命が、アドラメレクではなくワイバーンによる空襲であったと結論づける。
「……目に見えぬワイバーン……二手は、譲りすぎたか」
帰還したワイバーン隊に一人の被害も無かったことを、カミーオは喜んだ。
飛翔するときに地上に晒すワイバーンの腹部や足、尾、首に、地上からの攻撃を回避するための革製のプレートを装着するのだが、その表面を赤土から作った塗料や赤い布で覆ったのだ。
するとある程度の高度を取って飛べば、空の赤や雲の灰色に紛れて注意して見なければ見逃してしまうような効果が出たのだ。
「迷彩」という言葉は魔界には無かったが、その概念を初めて戦に持ち込んだのはサタンであった。
今度はワイバーンだけでなくパハロ・ダェニィーノの戦士達全員に配備すれば、より空からの攻撃の成功率が高まるだろう。
一度でもワイバーンを見れば、アルシエルはサタン側がワイバーンを使った攻撃を仕掛けてくると読む。

その読みをさらに一歩上回れば、アルシエルにも鉄鰓にも大きなダメージを与えることができる。

その目論みは大成功したわけだが、逆にいえばこれからアルシエルはこちらの出方を模索して、より強固に軍の編成を組み直すことが予想された。

そう考えると、初戦の内にこちらからある程度犠牲を払ってでも深く攻め込んだ方が良かったのでは、とカミーオは考えるが、

「ん？　おい」

カミーオは、手近にいたビーストデモノイドのワイバーン兵に声をかける。

「貴様らと一緒に飛び立ったルシフェル達はどうした。戻っておらんのか」

「いえ、ルシフェル殿は飛び立つと同時にハグレ部隊を率いて我らとは別の方向に向かいましたが」

「ふむ……」

そういえば、この空襲を目的とした最初の戦いで、ルシフェルが集めた足の速い者達の動きに目立った戦果は無かった。

アドラメレク隊の援軍として各所で起こっていた戦闘は、ルシフェルが率いていった者達の仕業と思われるが、アドラメレクの力と知名度を利用した陽動からの、新しい兵装での空襲に比べると、その働きは地味である。

そんな役割をあのルシフェルが引き受けるだろうか。
「後でサタンに確認しておくか……」

魔界の夜は、空に浮かぶ二つの大きな青い星と、無数の細かい星々に照らされて存外に明るい。
だがそれでも夜は夜。昼間と変わらぬ強風を空が渡り、ひっきりなしに夜空の光を隠そうとする。
昼の戦禍も生々しく残る戦場を挟み、サタン達が拠点を構える湖の山地は静まり返っており、鉄蠍族の陣地には無数のかがり火が立っていた。
食事が必須でない悪魔には兵站を整える必要が無く、人間の戦のように野営地を作る考えが無い。
兵達は所定の位置で昼の陣形を組んだまま、敵の襲来を警戒しているのである。
だがそれでも生物の生理として休息は絶対に必要で、鉄蠍の戦士達は交代で睡眠をとっていた。
「さぁて」
そのかがり火を遠目に見ながら、ほくそ笑む小さな影があった。

「そろそろ始めるかな。あと僕は面倒くさいことはしないから、サタンに頼まれた件は……そうだな、そこのお前、やっといて」

「……はぁ」

ルシフェルは、手近にいた元ハグレの悪魔に命じ、突然指名された者も、怪訝な顔をしつつも頷く。

「さぁて、そろそろかな」

言うなり夜の荒野に、紫色の光が爆発した。

鉄蠍の陣に、無数の熱線が走る。

「行けっ!!」

そしてルシフェルは、背後に付き従う者達に突入を命じる。

鉄蠍の陣では早くも警戒を呼び起こす声が湧き起こっていたが、ルシフェルの行動はその全てを置き去りにしていた。

攻撃の手に気づいて鉄蠍の戦士達がそれぞれに目を覚ます頃には、攻撃する者は全く別の場所にいる。

少人数の精兵による人間の世界では極一般的な夜襲だ。

目的は敵兵の撃破ではなく、敵の動揺を誘い、疲労を深めることにある。

「はーっはっはっはぁ！　面白いように当たるなぁ!!」

ルシフェルは嬌声を上げながら、かがり火灯る鉄蠍の夜の陣を縦横無尽に駆け巡る。
「どうしたどうした！　夜目は効かないのかい、硬いだけが能の毒虫共が！」
ルシフェルの熱線は、鉄蠍の鋼鉄の皮膚などものともせずに貫いてゆき、動揺を誘うどころかそのまま一、二部隊を一人で壊滅させかねない破竹の勢いであった。
だが、敵は鉄蠍で、そこらの小部族とは訳が違う。
「む」
独断専行は許さないというサタンの指示などどこ吹く風で、気持ち良く夜の虐殺を繰り広げていたルシフェルは、ふと自分の動きが鈍くなったことに気づく。
「なんだ……？」
危険を察知して夜襲からの離脱を試みようとするが、翼の推進力が上がらない。
「そこまでだ、荒野のハグレ」
声は、自分の背後から聞こえた。
「な……うがっ!!」
ルシフェルは強烈な衝撃と共に撥ね飛ばされた。
単純な打撃なのに、翼でも魔力でも制動がかけられない。ルシフェルは吹き飛ばされるがままに手近な地面に叩きつけられるが、衝撃はそこで終わらなかった。
地面に落ちてもルシフェルの体はまるでおろし金にかけられたようにそのまま地面をこすり

動きはじめる。

「くっ……こ、これは……っ！」

ルシフェルは必死に翼を広げて抗うが、自分の体を操る謎の力はわずかも緩まない。

「やべっ!!」

そうこうしているうちに、目の前に鋭利な牙の如き岩が迫っていることに気づいたルシフェルは、力そのものに抗うことを諦め、意志の力だけで、かつてサタンにそうしたように、無数の魔力球を空中に展開させる。

そしてその一つ一つから、ろくに狙いも定めず、周囲に味方の兵がいることも考えぬままに三百六十度あらゆる方向目がけて熱線を滅茶苦茶に放射しはじめた。

「うわっと!!」

錐のような岩に串刺しになる直前、体を拘束していた力がほどけたのを感じたルシフェルは慌てて上空に退避する。

「危ないなぁ……どこのどいつだよ」

ルシフェルは再び同じ力に囚われないよう、猛スピードで上昇してから、翼を広げて身を翻して地上を見下ろす。

そして自分が散々に荒らしまわった夜襲の痕跡の中に立つ、ひときわ存在感のある強い魔力を見出した。

「……まぁ、そうだよね、お前くらいしかいないよね」
「こうして相対するのは初めてだな。荒野のハグレよ」
そこに立っていたのは、紛うことなき鉄蠍の長、アルシエルであった。
「随分と迅速なお出ましだけど、まさか総大将が夜警に立ってたわけ？」
「夜襲を想定しないほど、我らが愚かと思ったか。昼の戦いに貴様の影だけが無かったのだ。私自身が、警戒するに越したことはあるまい」
「なるほど、この場はそっちの読み勝ちかな？」
「この場で私が貴様を屠っても良いぞ？」
「それはやめておいた方が良くない？　僕には勝てるかもしれないけど、お前もタダじゃすまないよ。そうしたら僕と一緒に夜襲に参加した連中がお前がボロボロになったことをアドラメレクあたりに知らせて、一気に攻め込んでくるかもね」
そんなことくらいはアルシエルも分かっている。だが、相手がどの程度ものを考えているのか、測るために敢えて話を振った。
そして表情にこそ出さないが、アルシエルは驚く。
荒野のハグレもまた、かつてのようにただ無目的に暴れまわるだけでなく、先を見越した戦術を組み立てている。
この男に考える習慣を与えたのは誰か。そんなことは考えるまでもない。

「……帰って貴様らの総大将に伝えるがいい。我らは小細工で疲弊するほど甘くはない。明日は一気呵成に攻めたてて貴様らを滅ぼしてみせようぞ。偵察をしていたのが貴様らだけと思うな」

「ん、まぁ伝えるけども」

ルシフェルは相手をからかうような下卑た笑いを浮かべる。

「お前の腹積もりにこっちの総大将が乗るかどうかまでは、保証しないけどね」

それだけ言うと、ルシフェルはひらりとさらに高空へと舞い上がり、彼方の空へと消えていった。

アルシエルはしばらくは警戒を解かなかったが、本当にルシフェル達が撤退したことを確信してから各所の被害状況を報告させる。

そしてその被害状況を、全部隊の司令官に報せ、その場で叱責した。

敵を侮ったが故に、たった一日で三千もの鉄蠍の戦士が失われた。

十年前の蒼角族との戦いに大勝したことで全軍に油断があったことは間違いないが、初日でこれだけ被害を出したと全軍が理解すれば、無駄な油断も減るだろう。

それだけでも、散った三千の戦士の命には価値があった。

「明日からは、こうはいかぬぞ。サタンよ」

アルシエルは夜の闇に隠れて見えぬ彼方の敵の総大将に、そう語りかけたのだった。

「って言ってたよ。アルシエルが」
「お前なぁ。独断専行はダメだって言ったばっかりなのに、示しがつかねえだろうがよ」
帰還して夜襲の成果を報告するルシフェル相手に、サタンは頭を抱える。
アドラメレクやカミーオと違い、誰かを率いたことのないルシフェルはやはり一人でふらつかせると予想外のことをやり出す。
それでルシフェル自身が痛い目を見るだけならいいのだが、今回の夜襲にしても撤退指示を出さなかったために、想定していた以上の数のハグレ悪魔が鉄蠍族にやられてしまったらしい。
「……まぁ、重要な目的は達したから今日だけは不問に処す。今後は向こうさんも警戒するだろうから夜襲はしばらくなしだ。カミーオと一緒に総力戦の遊撃隊に加われ」
「なんだよー。素直に褒めろよな」
口を尖らせるルシフェルだが、サタンはそもそも褒めてないし、ルシフェルの話を聞いてもいなかった。
サタンの関心は既に別のところにあった。
「さて、と」
ルシフェルの傍らに、二人の悪魔が座らされていた。

腕も足も魔力と物理的な縄とで縛り上げられ、その背に屈強な蒼角族の戦士が槍を突きつけて牽制している。

「お前ら、訳分からんだろうな。殺されずにこんな所に連れてこられて」

それは、二人の鉄蠍族の戦士だった。

ルシフェル率いる夜襲部隊の本当の目的は、鉄蠍族の混乱を呼び起こすことではない。夜陰と混乱に紛れ、鉄蠍族の頭脳に知られることなく『捕虜』の身柄を手に入れることにあった。

捕虜の対象に昼間の戦闘での負傷者を選ばなかったのは、鉄蠍族にこちらが『敵を生きたまま連れ帰った』ことを悟られないためである。

『捕虜』という考えもまた、魔界には存在しないものだった。

敵兵は殺す対象であり、捕えるという行為そのものの必要性も無い。人間とは全く異なる死生観と家族観を持つ悪魔の世界だから、身柄が取引材料になることもない。

だが実際には敵兵は戦況分析に欠かすことのできない情報の宝庫だ。

装備、配備、人員、作戦、どれをとっても自軍を有利に導く貴重な情報である。

だがもしアルシエルにこちらが敵を生かしたまま捕えたことを知られれば、彼はその理由を考えすぐに『捕虜』の概念に辿り着く。

もちろんアルシエルなら、いずれは独力で捕虜の概念に辿り着くだろう。こちらの行動を分

析されて、企みが露見することもあり得る。だがその時は遅ければ遅いほど良い。

「グッ……」

「な、なんのつもりだ!!」

鉄蠍の戦士の目には、恐れよりも戸惑いが浮かんでいた。

悪魔の戦士である以上、敵に捕まることは死を意味する。しかし死を覚悟していない悪魔の戦士などいないので、殺されることへの恐怖は無い。

こうして訳も分からず生かされていることのほうがずっと不気味なのだ。

「まず自己紹介と行こうか。俺の名はサタン。お前らと戦っている連中の総大将だ」

「「!!」」

二人の鉄蠍族の目には驚きが浮かぶが、次の瞬間、二人はさらに驚くべき事態に直面することになる。

「手荒な真似をして悪かったな。今拘束を解いてやる。立ってくれ」

総大将と名乗った男は自分達を殺すどころか、拘束を解くと言い出したのだ。

そして実際に自分達の身を縛る魔力も縄も解かれた。蒼角族が未だ槍をこちらに突きつけてはいるし敵の総大将相手に自分達の力が通用するはずもないが、未だに自分達が殺されると決めつけている二人はどのように最後の抵抗を繰り広げるか思案する顔になった。

だがサタンは、そんな二人の鉄蠍族の戦士の決意が面白くて仕方がないという顔をする。

「安心しろ。お前らが変な真似しない限り、殺しはしない。ただいくつか、聞きたいことがある。俺の質問に正直に答えてくれたら、今すぐ鉄蠍族の陣地に戻ること以外ならなんでも望みを叶えてやる。どうだ。悪い話じゃないだろう」

「「……？」」

「今後お前らが死ぬ可能性があるとしたら、俺達に危害を加えようとしたり、鉄蠍族の陣地に逃げ帰ろうとしたときくらいだ。それ以外のことなら、何をしても咎めはしない。そうだ、総大将の俺自ら、魔界で最も新しい組織の案内をしてやろう。どうだ、一緒に来ないか」

二人の鉄蠍の戦士は、まさしく異形の怪物を見るような目で、サタンを見上げた。

二人の鉄蠍の戦士の名を、イルヒュムとギンガムと言った。

イルヒュムもギンガムも、無防備に背中を晒しながら護衛もつけずに前を歩くサタンという男に、訝りながらも大人しくついてゆく。

蒼角族の現在の本拠である湖のほとりの岩山の中に穿たれた城ともいうべき空間の中で、なんと敵総大将が自ら二人の案内を買って出たのだ。

「俺達『魔王軍』は、元々俺とカミーオ、あとパハロ・ダェニィーノ族だけの小さな集まりだったんだ。それをルシフェルやアドラメレクの協力で、色々な部族を集めてお前ら鉄蠍と真っ

向対決するまでに大きく育てたんだが……」

サタンは鉄蟻族に敵対する『魔王軍』なる尊大な名前の軍の全容について、忌憚なく二人に説明する。

「信じてもらえないかもしれないが、俺達はお前らを滅ぼすために戦ってるんじゃない。むしろお前らも、俺達『魔王軍』に加わってもらえないかと思っている」

「……何を、バカな」

イルヒュムが吐き捨てるように言う。敵の総大将の言辞を切って捨てたイルヒュムにギンガムが凍りつくが、当のサタンは毛筋ほども敵兵の暴言を気にはしていないようだ。

「言われ慣れてっから安心しろ。カミーオからして最初はそうだったんだ。テメェでヨソの部族のクソガキ育ててるクセしてな」

一人でそう言って、一人で笑う。

「でもな、最近は規模と実績が伴ってきたせいか、初対面のハグレもこの話を割と真剣に聞いてくれる。着いたぞ。ここが俺が考える『魔王軍』の肝だ」

そう言ってサタンは、ある金属製の大扉の前で立ち止まる。

山地に穿たれた洞穴は、長い間に少しずつ手を入れて住処としても住み良いように改造されているのだが、その中でもかなり天井が高く広い空間が取られている場所であることが、扉のサイズからも察せられる。

中からは大勢の悪魔がざわめく気配が伝わってくる。
「よっと」
サタンが力を入れてその扉を開けると、中から熱気と活気が吹きつけてきた。
「「なっ……!!」」
イルヒュムとギンガムは、同時に声を上げた。
扉の向こうには、彼らの予想だにしない光景が広がっていた。
蒼角族を千人は横にして並べられそうなほどの広大な空間に、多種多様な悪魔達が集まり、相互に戦っている。
だがそこにあるのは殺し合いではない。お互いを味方と認識し、お互いを高め合うための模擬訓練に励んでいるのだ。
中には『魔王軍』の主戦力である蒼角族やパハロ・ダェニィーノ族の姿も見えるが、この場ではむしろ少数派である。
五十種は下らないと思われる悪魔達が殺し合うこともなく一所に集まり訓練をしている。
格闘の鍛錬をする者、武器を磨く者、魔術を編み出す者と様々だが、ただ一つ言えるのは、こんな光景は魔界のどこにもない、ということ。
「おーい、ベリャンザ」
驚くイルヒュムとギンガムを満足げに見ると、サタンは何者かの名前を呼ぶ。

「へーい」
　すると、多種多様な悪魔達の中から、小柄で細身の男がひょこひょことやってきた。
　鉄蠍族の腰ほどもなく、身に纏ったものも粗末な小鬼族の男であった。
「どうしましたサタン様」
「鉄蠍のイルヒュムとギンガムだ。第十五遊撃隊の候補生として登録しておいてほしい。今は説得のための見学中だが、後でお前のところにやろうと思う。頼んだぞ」
「へいへい、了解しやした。イルヒュムにギンガムですな。ですがサタン様、遊撃隊もいいですが、ワイバーンの世話のほうが良かぁありませんか？　あっちから人手が足らんと矢の催促でしてな」
「ああ……でもまぁ、とりあえずはここの空気に慣れさせたいから遊撃隊で頼む。ワイバーンは相手を選ぶからな。人手が足らんからといって誰でも補充していいというものでもない」
「へへっ、左様ですか。まぁよござんす。仰せの通りに」
　ベリャンザという名らしい小鬼は不格好に頭を下げると、またひょこひょこと去っていった。
「今のは……小鬼族？」
「の、ハグレだ。あぁ見えて奴は短刀を扱わせたらなかなかの腕前で、荒くれ者共を纏める口先のうまさがあるから、遊撃隊の隊長に任命している」
　ギンガムの疑問を引き継いでサタンは答える。

「し、しかし小鬼が率いる部隊とは……そんなものが戦力になるのか？」
「指揮官には、頭が冷えてて目がいい奴がなるべきだ。あいつの部隊は強いぞ。ベリャンザ自身は弱い悪魔だが、あいつの配下にはピーストデモノイド族や骸魔道族出身の強力なハグレもいる。ココで勝ってる典型だな」
サタンは自分の頭を指さして言うと、呆然としている二人の肩を叩き、
「じゃ、次行くぞ」
そう言って、叩かれて身を竦ませた二人を尻目に、次の場所へと歩きはじめた。

「ここは……何かの作業場か？」
イルヒュムの問いに、サタンは頷いた。
「そうだな。ここを仕切ってるのはドルドルフの連中だが、お前らも、もし手先の器用さに自信があるのなら後でベリャンザに言ってここに配属することもできる」
イルヒュムが作業場、と形容したそのスペースには、ドルドルフ族と呼ばれるずんぐりとした武骨な体型の少数部族が所狭しと歩き回っていた。
ドルドルフ族は大地の下で生きる種族で、物作りの魔術に長けた一族であった。
「ワイバーンに乗せる装備や、武具の整備なんかは全部ここでやってる。でもな、あいつ見て

くれ。おーい、デルグリフ！」

サタンはまた何者かの名を呼んだ。やってきた者の姿を見てイルヒュムとギンガムはまたも目を丸くする。

デルグリフと呼ばれる悪魔は、なんとトロル族だったのだ。

トロル族は亜族を含め魔界全土に広範に分布している人口の多い種族だが、力が強いこと以外はなんのとりえもない知能の低い悪魔であるとの認識が一般的だった。

「どうした……サタン様……新入りか……」

デルグリフはたどたどしい言葉で、イルヒュムとギンガムを見る。

「ああ。イルヒュムとギンガムだ。今やり合ってる鉄蠍族の奴らだが、今度ベリャンザの隊に入れることになった。ルシフェルのせいで鎧から何から全部ぶっ壊れちまったみたいだから、間に合わせで構わんから何か見繕ってやってくれ」

「ブフー……任せろ……」

デルグリフは頷き、腰に巻いた革のポーチの中から植物の蔓のようなものを引きずり出すと、問答無用で正面からイルヒュムの両肩にそれを当てた。

「な、何を!!」

慌てるイルヒュムだが、デルグリフは構わず腰、足、そして頭から踵にかけて丁寧に植物の蔓を当て、その都度何かを数えるように太い指を折っている。

ギンガムも同じように体中に憂を当てられ目を白黒させていると、やがてデルグリフは困ったように鼻息を吐いた。

「ブスュー……こいつらの体に合うものは……いま、ない、作らねば」

「早めに頼む。今後こいつらの仲間が多く入る予定だ。できれば量産体制を整えてくれ」

「分かった……まずは、あす、来い。いるふむと、ぎんあむ」

たどたどしい声でそう言うと、デルグリフは来た方へと戻ってゆく。

「あいつはトロルのくせに滅茶苦茶手先が器用でな。ドルドルフに教えさせたら金属の鍛造から革や布の縫製まで覚えやがって、外で戦わせるよりここで作業させた方がいいから、もう十年以上、奴はここで好きな服を作り続けている」

トロルが服を作る。なんという滑稽な話だろう。だがイルヒュムとギンガムは、自分達が見た事実がサタンの言葉を裏付けていることを理解していた。

「さて、次で最後だな。まぁそこで最初の質問に戻るわけだが……」

イルヒュムとギンガムが最後に案内されたのは、最初に拘束されていた広間であった。だが最初と違うことは、その場にいる面々であった。

「「……っ！」」

二人は身を竦ませる。そこには敵の大将全員が顔を揃えていた。

蒼角族の長アドラメレク。最強のハグレ悪魔ルシフェル。アルシエルすら魔鳥将軍と呼んで

警戒するカミーオ。
　イルヒュムとギンガムが逆立ちしたところで、敵うはずのない相手である。
　サタンはイルヒュムとギンガムの前に立つと、これまでと変わらぬ調子で二人に紹介を始めた。
「まぁ知ってると思うけど、こっちから順にアドラメレク、ルシフェル、カミーオな。俺が率いる『魔王軍』の楔だ。ここまで見てもらって分かる通り、俺達『魔王軍』の目的は、敵対した部族の殲滅ではない。魔界の統一だ」
　イルヒュムとギンガムは大悪魔達を前に微動だにできない。だがサタンの言葉は、確実にその耳に届いている。
「今は信じられないだろうか、俺はこのメンバーに、お前ら鉄蠍族や、お前らの総大将アルシエルを加えたいと思ってる。だがアルシエルは、仲間になれと言って素直になるような器でもない。ならば俺がお前らを仲間に引き入れるにはどうすればいいか。お前らに、アルシエルに、この戦いで勝つしかない」
　サタンは重々しく言う。
「俺はこれからお前らに、一時の裏切りを命じる。お前達が知っている限りのアルシエルの策を明かしてもらう。だが、約束する。お前らを決して裏切り者のままにはしない。俺はここにいる三人と、アルシエルと、お前達二人を、必ず一つに纏めてみせる」

「……」

イルヒュムとギンガムは、思わず顔を見合わせた。

そして目の前の不思議な悪魔が、自分達二人に見せた光景の意味を、少しだけ考える。

「それでは、尋ねようか」

二人の鉄蠍族は、サタンの口から飛び出す言葉を、神妙な面持ちで待った。

※

「左翼大隊、敵の待ち伏せに遭い壊滅！　陣形を維持できずに後退しはじめております！」

「右翼遊撃隊、敵空襲部隊と遭遇！　予定の半分も進軍しておりません！」

「中央大隊、蒼角族主戦隊と遭遇した模様！　アドラメレク他無数の小部族が波状攻撃を仕掛けてきております！　敵はアドラメレク、ルシフェルを先頭に、地上と空から一点突破を画策している模様！　両翼の混乱により中央大隊に援護は届かず！　一度抜かれれば包囲戦に持ち込むことは困難です！」

「こんなことが……！」

報告を全て処理したアルシエルは、歯噛みしながら戦況を分析する。

ルシフェルに総力戦の予告こそしたものの、そこは入念に下準備し、長年一族を守り通した

アルシエルの策がそこかしこに散りばめられた、必勝の攻城戦になるはずだった。
だが蓋を開けてみれば、鉄蠍族の進軍ルートはことごとく先読みされていた。
特に左翼に展開した部隊は、まるでこちらの合図を全て読まれているかのように、敵がぴったりとこちらの動きに張りついてきたという。
突然空に出現するワイバーン部隊の秘密も未だ判明せず、手勢と実力で圧倒的に勝るはずのアルシエルは、はっきりと鉄蠍族が苦境に立たされていることを理解した。
「仕方あるまい。こんなに早く出すはずではなかったが」
アルシエルは顔を顰めながら、伝令の一人に指示を出す。
「蒼角の岩砦に潜ませてある三千の戦士団を招聘せよ！　もはや総力を以て当たらねば、敵を打ち破ることはできない！」
「は、ははっ！」
アルシエルの指示を実行すべく動こうとした者が飛び出そうとした瞬間、その者を押しのけて入ってきた新たな伝令がいた。
「急告！　岩砦に敵襲！」
「「なっ！」」
アルシエルと、指示を受けた戦士の声が驚愕に彩られる。
「カミーオの部隊か⁉」

戦場に姿が確認されていない敵の大悪魔の名を挙げるアルシエルだが、伝令は首を横に振る。
「カミーオの姿は見えず！　ですがやはりパハロ・ダェニィーノを中心とした飛行悪魔の一隊に襲撃され、襲撃され……蒼角の岩砦は奪還された模様!!」
長の怒りを恐れながらも、伝令は絶望的な報告を言い切った。
アルシエルは言葉を失う。
魔鳥将軍が率いる敵部隊にやられたのならまだしも、三千を数える鉄蝿の戦士達が、ただのパハロ・ダェニィーノの一隊にやられることなどあり得るのか。
「岩砦の三千の戦士達はどうなった!?」
「それが……消息不明、恐らくはもう……」
「くっ!!」
アルシエルは歯噛みしながら、ロケットのように空へと急上昇してゆく。
空から見下ろす戦場は明らかに鉄蝿が劣勢だ。空で戦う敵のワイバーン隊が遠くからこちらを見つけたのか、当たるとも思えない距離から魔力球を飛ばしてくるほど敵には余裕がある。
忌々しげに視線だけでその魔力球を掻き消すアルシエルは、アドラメレクやルシフェルが戦っていると思しき戦場の煙を見て顔を顰める。
「一体何が起こっているのだ……アドラメレクとルシフェルがそこにいるなら、カミーオはどこに……？」

もはやこの戦況では、一つ二つ策を講じたところで大きな効果は現れまい。
敵の総大将サタンは如何なる魔術を用いたか、アルシエルと鉄蠍族が長年培ってきた戦法をことごとく破ってみせている。
もはやアルシエルに取れる手は限られていた。
「……退くか」
それもまた、鉄蠍族がここまで大きくなった遠因となる策である。
アルシエルは撤退という行動が持つ意味をよく理解していた。強い敵から逃げることは、負けではない。明日の勝ちを摑み取るための布石である。
その考えに至るまでの年月に多くの同胞を他部族に殺されたが、逃げることの重要性が一族に浸透してから鉄蠍は一気に勢力を伸ばした。
今回はサタンの挑発に乗る形で未来の敵を潰すために動いたが、どうやらアルシエルの早計であったようだ。
もちろん屈辱ではある。だが、雪辱を果たす機会のために、今はこらえなければならない。
アルシエルは決意すると、地上に戻って各所に撤退命令を出すべく指示を出そうとした。
そのときだった。
「なんだ……あれは」
アルシエルは、背後を見た。アドラメレクやルシフェルが暴れる戦場ではない。

鉄蠍族の背後。鉄蠍族が来た方向。
自分達の背中から、何かが迫っている。
援軍ではない。鉄蠍の戦士達は、岩砦の三千を除くほぼ全てがこの戦場に集結している。
ならばあれはどこの部族だ。
アルシエルは目をこらした。
「部族では、ない……あれは……あれは一体なんだ！」
アルシエルは驚愕の叫び声を上げた。
サタンの軍が、多くのハグレを集めていることは知っていた。実際に戦場で、蒼角やパハロ・ダェニィーノ以外の種族も多くいた。
だがあれはなんだ。見たこともないような数の、見たこともない種族で組織された混成軍が、鉄蠍軍の背後を突くように迫っていたのだ。
その数は一万に迫ろうかという数だ。
そしてどう考えても、その謎の大隊は鉄蠍の援軍ではない。
その考えを裏付けるように、アルシエルは謎の混成軍を空で率いる一人のパハロ・ダェニィーノ族の姿を捉えていた。
サタンの軍に新たに一万の兵が現れ、かつ背後を突かれているという状況に、アルシエルは絶望感を覚える。

このような事態に陥った経験は、彼には無い。
いや、魔界のどの悪魔も、恐らくは無いだろう。
人間の世界から見れば原始的であっても、アルシエルは常に魔界の悪魔の常識にかからぬ作戦を立てて、鉄蠍を繁栄させてきた。
今彼の上を行くものが、その繁栄の道筋を終わらせようとしている。
攻め手は封じられ、退路も塞がれている。
戦士の総数は、まだ鉄蠍が上回っている。犠牲を覚悟で突破すれば、撤退そのものは可能だろう。
だが、撤退した後、鉄蠍の力は圧倒的に弱まる。そして恐るべき混成軍を組織した謎の男、サタンの影に怯えながら、自分が他部族に狩られる立場になったことを自覚させられるだろう。
今や行くも地獄、退くも地獄。
ならば。
「鉄蠍の戦士として、一人でも多くの敵を屠る!!」

「アドラメレク！　来た!!」
アドラメレクはまとわりつく鉄蠍の戦士を魔槍の一薙ぎで吹き飛ばすと、ルシフェルが指さ

す方向を見上げる。
アドラメレクとルシフェルが先頭に立って率いる突撃隊は破竹の勢いで鉄蠍族の戦士達を吹き飛ばし、もはや敵本陣へと攻め入るのも時間の問題、というタイミングであった。
「来たか！　鉄蠍の長！」
「やけっぱちって感じではなさそうだけど、本気で来たら厄介だよ！」
「承知しておるわ!!　ぬん!!」
飛来するアルシエルに真っ直ぐ向き直ったアドラメレクは、にやりと笑いながら魔槍を戦場の地面に突き立てる。
魔槍の穂先と戦斧部が戦場を濡らす戦士達の血に染まり、そして、
「ふうううう……アルシエルよ、我が身を守るは貴様の戦士が流した命ぞ！」
再び槍を構え直したアドラメレクの全身を覆う鎧の氷は、血で形作られていた。
「押し通る!!」
魔氷ならぬ血氷の鎧を纏ったアドラメレクの槍と、猛スピードで飛来したアルシエルの鋼鉄の拳が激突した瞬間、
「おわああっ!!」
その衝撃だけで、身構えていたはずのルシフェルは大きく撥ね飛ばされる。
アドラメレクの足元の地面はクレーターのように抉れ、アドラメレク自身もその威力に思わ

ず膝をついた。
「鉄蠍の戦士達よ!!」
アドラメレクの巨軀と剛腕を力でねじ伏せながら、アルシエルは戦場全てに響くような大音声で叫んだ。
「ここを抜かねば、鉄蠍の未来は無い!!　このアルシエルに続け！　目指すは敵総大将！」
『おおおおおおおおおおおおおお!!!!』
戦場の各所で、劣勢に立たされているはずの鉄蠍の戦士達の関の声が上がる。
「あれ、なんか雰囲気変わった？」
吹き飛ばされながらも体勢を立て直したルシフェルは、鉄蠍の戦士達に再び闘志が宿ったことに気づく。
「えー、あいつがここまで出張ってきたってことは、後ろからカミーオが来たってことだろ？なんでこんな状況でそうなるかな」
「……それだけ……こやつが信を置かれている、ということだっ!!」
ルシフェルの疑問に答えたのは、アドラメレクだった。
アルシエルの力を受け流しながら、大きく後ろに飛び下がり距離を取る。
「アルシエルが、最強の戦士が最前線に出てきて兵を引っ張る。先程まで我らもそうしていただろう。それだけで士気は高まるのだ」

「……単純だねぇ。それだけにめんどいけど、って、あれは⁉」

ルシフェルが見たのは、アドラメレクとの激突で距離を取ったアルシエルが、手を掲げて大きく振りかぶった瞬間だった。

「ぬっ⁉　あれは！」

アドラメレクもまた気づく。アルシエルの背後に無数に浮かぶのは戦場に転がっていた岩。

十年前、蒼角族の戦士達を散々に打ち砕いた念動砲弾だった。

「わわわわわわわわわわああああ⁉」

無数に飛来する岩は、十年前と同じように途切れることなく降り注ぐ。

「ぬん！　一体！　この連続攻撃は！　如何にして‼」

アドラメレクは魔槍を振るいながら飛来する岩を砕くがじりじりと押し返されはじめ、

「わ、分かんないよ！　こんな数うわ痛っ‼」

ルシフェルも物量に対抗しきれず、飛来する岩が何度も翼を掠める。

途切れない念動砲弾の正体は、班分けされた術者達が入れ替わり立ち代わり順番に砲撃する波状攻撃の策だった。

一度に放てる数は少なくなる分、魔力が長続きするため途切れることなく砲撃を続けられるというものであった。

一撃の威力に頼ることなく波状攻撃を仕掛けるこの方法も、アルシエルが長い歴史の中で考

案したものである。
　鉄蠍の組織力を利用した念動砲弾により突然防戦を強いられはじめるアドラメレクとルシフェルの隙を、アルシエルは見逃さなかった。
「アドラメレク、ルシフェル、貴様らに用は無い。その首、貰い受ける」
　言うなりアルシエルの両手から不可視の念動力が飛び、岩塊を回避するので精一杯になっていたアドラメレクとルシフェルを苦もなく捉えた。
「うぬっ!?　こ、これは……？」
　突然体に重しがつけられたかのような感覚に、アドラメレクが目を見開く。
「あっ、やべ！　なんだよそれ！　見えないのなんかズルいぞ！」
　夜襲のときのように背後を取られたわけでもないのに、念動砲弾で注意力を削がれたか、アルシエルの技が冴え渡っているのか、ルシフェルもアルシエルの力に捕えられた。
「魔氷の鎧？　紫光の熱線？　そのような大味な力にいつまでも頼り、戦い方を磨かぬ貴様らなど我ら鉄蠍の敵ではないっ！」
「むっ！　ぐぬっ！　うおっ！　がああっ！」
「わっ、畜生！　このっ！　あいたっ!!　あだだだ！」
　アルシエルは、ただ普通の鉄蠍とは比べ物にならないほどの魔力でアドラメレクとルシフェルの動きを制限するために全力を注ぐだけ。

しかもこの場には、アドラメレクとルシフェルを狙う多くの念動砲弾があるのだ。

唐突に動きの鈍った二人に、容赦なく念動砲弾が命中しはじめる。

もちろんアドラメレクもルシフェルも、大人しくされるがままにはならない。だが今二人に念動魔術をかけているのはアルシエルであり、鉄蠍の者達はアルシエルには及ばないまでも、一流の戦士達なのだ。

「ぐっ！」

「こんのっ!!　うわああっ!!」

アドラメレクは鈍い動きでなんとか回避を試みるがとても対応できる数ではなく、恐るべき威力の砲弾を食らい続け、血氷の鎧が徐々にひび割れはじめる。

ルシフェルは以前と同じ方法で中空から発射する熱線でアルシエルを狙い術から逃れようとするが、アルシエルの周りを鉄蠍の術者が囲んでルシフェルの抵抗から守るため、まるで力が緩まない。

突撃隊の隊長が二人共動きを封じられたことで他の悪魔達も進軍スピードが鈍り、各所で鉄蠍側の力が息を吹き返しはじめている。

だが自分が前線に乱入したことで一時的に趨勢は逆転しても、そう長くはもたないことはアルシエルも分かっていた。

背後からはカミーオが率いる謎の混成軍が迫っている。

これに合流されればまた一気に鉄蠍の軍は瓦解するだろう。そうなる前に決着をつけ、兵を纏めていずれかの方向に突破し活路を見出さねばならない。
「術者隊！　力を貸せ！　どちらでも構わぬ、完全に動きを止めろ!!」
「あ、がっ!!」
「ルシフェル!!」
アルシエルが率いる鉄蠍の術者隊達の判断は的確だった。
遠距離攻撃で術を妨害できるルシフェルが、この場では一番の障害となる。
先程までルシフェルの熱線攻撃を防御していた鉄蠍の術者達が一斉にルシフェルに念動魔術を上書きし、見事動きを封じてしまった。
「く、くそっ！　こ、この雑魚共がああああ!!」
ルシフェルは額に血管を浮かび上がらせながら逃れようとするが、アルシエル一人の力すら緩むことはなかった。
「殺せ!!」
アルシエルの号令で、完全に動きが止まったルシフェル目がけて鉄蠍の戦士達の剣が、槍が、念動砲弾が殺到する。
「これでまず一人、敵の厄介者を……」

「させねぇよ」

「っ……!!」

次の瞬間、多くのことが同時に起こった。

ルシフェルに殺到した、鉄蠍の戦士達全員が吹き飛ばされた。それだけではない、ルシフェルとアドラメレクを縛っていた念動魔術が、断ち切られたのだ。

術者とルシフェル達を繋いでいた魔力の流れが切断され、あろうことかそれが衝撃となって術者自身に返っていくではないか。

「ぎえっ!!」

「うがっ!」

アルシエルの周囲の術者がその衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされ、

「うぐっ!」

アルシエルもまた念動魔術を断ち切られ、大きく体を揺らす。

一振りの剣を携えた悪魔が、ルシフェルとアルシエルの間に立ちはだかっていた。

二本の角と、氷の剣、そして、大地を踏みしめる大きな蹄。

「……現れたな、サタン……」
「そういうお前は、出てくるまでに随分時間がかかったなぁ、アルシエル」
ルシフェルを鉄蠍の凶刃から救ったサタンは、振り抜いた形の氷の剣を肩に担いだ。
「おいルシフェル、アドラメレク。予定通りだ。軍を引け」
「うるさいな!!」
サタンは背後に庇ったルシフェルに指示するが、念動力から解放されたルシフェルは怒り心頭のようだ。
「ナメたマネしやがって！　このまま引き下がれるかよ！」
「……ルシフェル、退くのだ」
「冗談だろアドラメレク！　こんだけフザけたことされて引き下がれるはずが……」
「おいルシフェル」
今にも手近な鉄蠍に襲い掛かりかねないルシフェルを、サタンは呆れ顔で振り向いた。
「油断したお前のミスだ。俺がいなきゃお前はアルシエルに負けてた。認めろ」
「なんだとっ!!」
「再戦したいなら、どうせこいつも納得しねぇだろうから後でいくらでもやらせてやる。だが今は俺に任せて、引いてくれ」
「……！」

ルシフェルは憤然とした様子を隠さないが、サタンの言葉とアドラメレクの制止で渋々殺気を収める。

一方収まらないのはアルシエルの方だ。

「軍を引かせるだと？」

「おお、そうだそうだ、悪いなアルシエル。折角出てきてもらったのに。今日は一つお前に提案があって来たんだ。お前、今からここで俺と一騎打ちしろ」

「……なんだと？」

サタンの言葉を理解するのに、アルシエルは数瞬を要した。それくらいあっさりと言われ、かつ意味不明な内容だった。

「んで、お前が勝ったらそうだな、俺を殺して、俺の軍全部お前の好きにしろ。ただし、俺が勝ったら」

サタンは氷の剣をアルシエルに向けて、高らかに宣言した。

「鉄蠍の長アルシエル。お前の身柄と鉄蠍族の戦士全てを、俺が貰い受ける」

サタンの申し出は、アルシエルにとって信じ難いことであった。

大将同士の一騎打ち。

しかも勝者がこの場にいる全ての悪魔達の総大将としてその瞬間君臨する？

余りに荒唐無稽な申し出で、アルシエルには否とも応とも言えなかった。

何を言ってるんだこいつは。それが純粋な感想である。
「はっきり言うがな、この戦いは今んとこ、俺達の勝ちだ。だがお前が無茶して頑張れば、大きな犠牲は払っても鉄蠍はこの戦場から脱出できる。お前はそう考えたから今ここにいる。そうだな？」
読まれている。アルシエルは内心焦るが、ここで肯定しても否定しても、状況にはなんの影響もない。アルシエルが為すべきは、目の前のこの男を倒すこと、ただそれだけなのだから。
だが目の前の悪魔は、さらに意味不明な言葉を続けた。
「お前もただじゃ引き下がれんだろうから、俺に抗うチャンスをやる。だが、気が済んだら俺に従え。そうすればお前も、鉄蠍族達も、無駄に命を散らさずに済む」
「……貴様一人で、私に勝てるとでも？」
「そりゃな、勝算のない勝負を言い出したりはしねぇよ。でも、勿論確実じゃないからお前にも分はある。一騎打ちの間、他の奴らには絶対手出しさせない。カミーオの軍の進軍は、俺がここに現れた時点で止まるように言ってある。誰にも邪魔はさせない」
信じ難いことだが、サタンは本気で一騎打ちを申し出ているらしい。
見たところ、サタンも悪魔として強力な部類に入るようだが、それでもアドラメレクやルシフェルのような圧倒的な力を秘めている様子はない。
そうするとやはりこの男の本領は、知恵と戦術にあるのだろう。

「貴様の言葉を信じられる根拠はどこにも無い」
アルシエルは油断なく身構えながら口を開く。
「私と貴様が一騎打ちをして、他の者から横槍が入らぬ保証がどこにある。貴様とてそうだ。鉄壁の戦士達がこんな茶番を本気にすると思うのか」
「その発想ができる奴こそ、この場の大将になる器だ」
だがサタンは、一瞬でそう切り返してきた。
「どっちかがだまし討ちをすれば、その瞬間、魔界の大昔からの倣いで、総力戦の続きが始まるだけだ。何も問題は無いだろ？　いつものことなんだから」
「……」
アルシエルは思わず目を瞬いた。
馬鹿馬鹿しいかもしれないが、確かに、と心の中でサタンに同意してしまったのだ。
一騎打ちが成立しなければ普段と何も変わらない結末について、自分は一体何を用心しているのだろう。
「ただ、これまでの魔界と違うことがあるとすれば」
サタンは、剣を持っていない方の手の指を立てて、赤い空を指さした。
「俺とお前が一騎打ちの約束を守れば生き残る奴が増えて、さらにでかい集まりが生まれるってことだ」

その瞬間、アルシエルはサタンが掲げる指先に、見たこともない景色を見た。
大勢の悪魔達が、一つの大きな建物に集い、関の声を上げている。
そこにはアドラメレクと、ルシフェルと、カミーオと、まだ見ぬ大勢の悪魔達と、そして自分がいる。
魔界全土の悪魔が、自分の膝下にひれ伏している。
その覇業を為したのは、その光景に映る者の中の誰であろうか。
「……言葉を慎むことだな」
「ん？」
「私と貴様、一騎打ちが果たされてさらに巨大な集まりが生まれるとすれば、それは貴様が勝った場合のみだ。勝った気になるには、いささか早かろう」
「……あ、バレた？」
サタンは悪びれずに笑う。
「でもさ、もしお前が勝ったとしても、俺が育てた連中使って損は無いと思うぜ？　まぁ纏めるのは大変かもしれねぇけど、そこはお前の器量でさ」
「フン」
アルシエルはサタンの申し出を鼻で笑う。
「良かろう、一騎打ちの申し出、受けようではないか」

「お！」
「だが！」
喜色を浮かべたサタンを、アルシエルは再び睨みつける。
「私はアルシエル！　誇り高き鉄蠍の長！　己の覇道に他の悪魔の手は借りぬ！　勝利の暁には、どれほどかかっても私は貴様の残したものすべてを踏み潰してみせよう！」
「……ったく、頑固だなぁ、見た目通りだ」
アルシエルの宣言に、サタンはむしろ嬉しそうに笑いながら、氷の剣を構える。
「ま、それでこそ手に入れ甲斐があるってもんだ」
サタンとアルシエルの魔力が一気に高まり、戦場にいる全ての戦士の耳目が二人に集まる。
弱小部族の少年悪魔、サタンの氷の剣と、大豪族族長の鋼鉄の爪が、大音響を魔界の荒野に響かせた。

※

「そ、それからどうなったんですか!?」
興奮のあまり、コタツの上に身を乗り出して話の続きを催促する千穂に向かって、芦屋は微笑んだ。

「私がここでこうしていることからもお分かりでしょう。私は一騎打ちで魔王様に負けて、鉄蠍族は『魔王軍』の傘下に入りました」

魔界の暮らしとはどのようなものなのか。

真奥のマント一枚から生まれた千穂の質問から、真奥、漆原、そして芦屋の出会いの物語にまで発展してしまった。

気がつけばもう日が大分傾きはじめている。

「鉄蠍族を傘下に入れた魔王様は、正式に『魔王軍』を旗揚げし、自ら魔王軍の長である『魔王サタン』と名乗って、周辺の悪魔達に名を知られる存在となりました。佐々木さんがご存じの魔王軍は、この頃でき上がったのです」

「カミーオさんが連れてきた援軍っていうのは結局なんだったんですか？」

「ああ、それはまさしく援軍だったのですが……なんと言うんだったか……ああ、そうだ。戦時徴用とか、調略とでもいう行動の結果だったようです」

「ちょうりゃく？」

「アドラメレクやルシフェルが戦場で派手に暴れまわる間にカミーオ殿の姿を見ないようになったのは、彼が戦いの間も遠方に出張して、小部族やハグレを仲間に引き入れ続けていたからなのです。全戦士が戦場に赴いてしまった鉄蠍族はその動きを察知できず、挟み撃ちにされた、というのが真相でした」

「へぇ……そうやって、戦ったり話し合いしたりしながら色々な悪魔の人達が一つに纏まっていったんですね……。あれ？　でも今のお話の中に、マレブランケの人達は出てこなかったような……」

千穂は顎に手を当てて首を傾げる。

千穂が日本で出会ったことのある異世界エンテ・イスラの魔界の住人は、目の前の芦屋四郎ことアルシエル。この部屋の主であり魔王サタンその人でもある真奥貞夫。ルシフェルこと漆原半蔵。今の話の中では千穂が知る呼称とは違う呼び方をされていた、悪魔大尚書カミーオ。そして芦屋と漆原と同じく悪魔大元帥の一角であったマラコーダの配下であるマレブランケ族の頭領格達だ。

「マレブランケ共と出会うのは、これよりずっと後のことです。魔王都サタナスアルク上洛の目前の頃だったでしょうか。それまではカミーオ殿、アドラメレク、私、そしてルシフェルに身分差が生じないよう悪魔大元帥ではなく『四天王』という名でそれぞれを呼称しておりました。魔王様を含めた五人全員が『王』と名乗っていたのも、魔王様が最初にルシフェル……漆原と交わした約束である『気に入らなければ抜けて構わない』という約束に基づいてのことでした」

「だからカミーオさんが、魔王軍最初の悪魔大元帥なんですね」

「魔王様に会った順番を考えれば、そうなりますね」

芦屋は首肯する。

「カミーオ殿には、様々な教えを受けました。私やアドラメレクが隆盛を極めたときには既に老齢に差しかかり、その名は一部の豪族が覚えているのみの過去の存在と思っていたのですが、佐々木さんもご存じの通り、なかなかしたたかな老人で」

「私自身は、カミーオさんが老人ってことがまずピンとこないですけど」

千穂は苦笑する。

千穂の知るカミーオは、銚子の海の家で段ボール箱の中で弱った体を晒し、ぴぃよぴぃよと鳴きながら真奥の『娘』であるアラス・ラムスに追い掛け回されて、失言の末にチキンカレーの具にされかけた丸々太った黒い鶏だからだ。

「それで、その後どうなったんですか？」

魔王サタンこと真奥貞夫に想いを寄せる千穂としては、真奥の過去について思いがけず触れる機会に恵まれてつい前のめりで話を聞いてしまうが、折悪しく、鞄の中の携帯電話がメールの着信で震えはじめる。

「ちょっとごめんなさい……あっ！」

「どうされました？」

「いえ、お母さんから……急ぎで買い物頼まれちゃいました」

「それでは仕方ありませんね。続きはまたの機会ということで。今日は申し訳ありません。折

角お越しいただいたのに、魔王様が出かけられていて、ベル達も結局帰ってきませんでしたし、お引止めするだけになってしまいました」

「いえ、おかげでって言ったら真奥さんには悪いですけど、貴重な話が聞けましたし……それに」

と、千穂は少しだけ申し訳なさそうに芦屋に頭を下げた。

「すいません、なんだか、辛い話をさせてしまって」

「は？」

芦屋は意味が分からずきょとんとした顔をする。確かに自分の未熟な時代の話は恥ずかしい話かもしれないが、千穂が謝るようなことではないような気もする。

そんな芦屋の内心を理解したか、千穂は小さく首を振る。

「そうじゃないんです。だって」

千穂は真っ直ぐ芦屋の目を見た。

「アドラメレクさんも、蒼角族や鉄蠍族の戦士達、他の沢山のハグレ悪魔の人達は……もう、いないんですよね」

「……ああ」

芦屋はようやく、千穂が何を憂慮しているのかを理解した。

「確かに、そうですね」

魔界を統一したサタンを筆頭とする魔王軍は、一部の戦士を残してほとんどがエンテ・イスラへと侵攻した。

そしてその大半が、勇者エミリアを筆頭とする人間世界に返り討ちに遭い、命を散らした。

特に蒼角族と鉄蠍族は、魔界統一事業の後期に至るまで主力であり続けたため、エンテ・イスラ侵攻に於いても大きな役割を担い、故にそのほとんどの者達が人間との戦いで滅ぼされた。

「お気遣い、痛み入ります」

蒼屋はその千穂の優しい思いをただ、受けた。

本心では、魔界の悪魔らしく自分達が敗れたのは勇者率いる人間達に力で負けたためで、悔しさはあれど感慨は無い。

だが『人間』は、こういうときにきっと死んだ仲間を悼むのだ。『人間』の目から見れば大災厄をもたらした罪深き侵略者である悪魔達の物語であっても。

「話してくれて、ありがとうございました。私、誰にも言いません」

そして千穂は、自分のその思いが、彼女の大切な友人にとっては必ずしも良い思いでないことを分かっている。

だから、今日のことは誰にも話さない。話してもらったことも、聞いたことも、自分の思ったことも。

千穂は礼を言うと、大きく息を吐いて表情を切り替え、麦茶のグラスをきちんとシンクに片

付けてから、玄関に向かい靴を履いた。
「それじゃ、お邪魔しました。すいませんけど鈴乃さんとノルドさんに卵焼きのタッパー、お願いしますね。……漆原さん、早く帰ってくるといいですね」
「……そうですね。使い込みをしないと分かっているので、別に入院したまま大家さんの下で管理されていれば問題ないのですが……」
「あはは……」
芦屋の本気の音色に、千穂は乾いた笑いを浮かべる。
二〇一号室の住人である漆原半蔵は、諸般の事情で入院措置を取られていた。
最近、芦屋と真奥が事情があって日本を離れエンテ・イスラに戻っていた時期があったのだが、その間に起こったトラブルによりアパートの大家で真奥達の正体を知る謎の女性、志波美輝の手により入院させられてしまったのだ。
間もなく退院する予定ではあるのだが、戻ってくれば戻ってきたでまた大昔とは違う理由で真奥と芦屋の手を煩わせることになるだろう。
だが真奥と芦屋には悪いが、その光景こそ、今の千穂にとってはかけがえのない日常の光景なのだ。
「それじゃ、お邪魔しました。鈴乃さんとノルドさんに、よろしく伝えてください」
「承りました。お帰りに気をつけてくださいね」

千穂を送り出し、外の共用階段を下りる音が聞こえなくなってから、芦屋は小さくため息を吐く。

思いがけずに昔話に興じてしまった芦屋は、傾きかけた夕陽を眺めながら、千穂に話さなかったあのときのことを思い出す。

一瞬で決着をつけるつもりのアルシエルだったが、気がつけば徐々に劣勢に置かれていた。

サタンの実力は、アルシエルの記憶していた黒羊族の力では断じてない。

魔鳥剣士の頭脳と剣、蒼角の長の力と魔術、ルシフェルを筆頭とした多くのハグレや小部族の技術を存分に駆使し、サタンはアルシエルを追い詰め遂に地に伏せた。

殺される。かつての戦いの経験から、アルシエルは反射的にそう考えた。

だが、サタンの魔力はアルシエルの命を砕きはしなかった。

「決着だ。今この場で、鉄蠍族と族長アルシエル、俺の……『魔王軍』に加われ」

「なん……だとっ!?」

「お前はカミーオのようなブレーンなしにものを考える頭を持ってる。俺についてこい。俺達と一緒に、今の何倍にも鉄蠍の名を魔界全土に響かせろ。お前の名を聞いただけで、魔界の果てからも悪魔が頭を下げるような、そんな世界を俺と一緒に作らないか」

「そのような話を受け入れられるはずが……」

アルシエルは抗った。若い悪魔に頭を垂れ、大豪族の誇りを汚すようなことはしたくなかった。

だが、サタンは冷酷に告げた。

「気に入らないならいいんだが、お前がここで無意味に死ねば、俺達は生き残った鉄蠍に容赦はしないぞ」

「!!」

「お前が生きれば、鉄蠍も全て生きる。お前がこの場で死ぬなら、鉄蠍も全て死ぬ。選べ。豪族の長とは、自分のプライドと引き換えに民の命全てを灰燼に帰する者の名か？」

負けることが生きることに繋がる。

そのことをあの時点の自分は、理解できていなかったと今でも思う。

だが結果として、サタンは辛抱強く自分を説得し、最終的に自分は、魔王サタンの右腕を自負する悪魔大元帥筆頭としてサタンと魔王軍の覇道を補佐した。

「遠くに、来たものだな」

芦屋は窓から見える人間の営みが作り出した街を見る。

「それでも、自分がやれるだけのことはやってきたつもりだが……」
遠くから聞こえる豆腐屋のラッパの音に混じって、外から、今や芦屋や真奥の生活にすっかり馴染んだ隣室の女性が帰ってくる声がかすかに聞こえ、芦屋は自嘲気味に呟いた。
「またあのときのような夢を、見ることはできるのだろうか」
その問いに答える者は、どこにもいない。

※

鉄蠍族、サタンの軍門に下る。
魔界の悪魔達の間で、ほとんどの種族同士は敵対関係にあったが、それでもその報せは瞬く間に魔界の半分を駆け巡った。
蒼角のアドラメレクと、鉄蠍のアルシエルをその軍勢ごと軍門に下らせた悪魔の名もまた多くの悪魔に知られることとなる。
「なかなか壮観だな！」
正式に『魔王』を外向きに名乗りはじめたサタンは湖の山地の洞穴に、カミーオ、ルシフェル、アドラメレク、そしてアルシエルを集めて言う。
「さて、これだけ大所帯になってくると、組織をより円滑に動かさなきゃならない。それで俺

は『国家』を起こそうと思う」

「『コッカ』？」

聞いたことのない言葉にアルシエルは訝しむ。

「そう。これだけ大勢の違う種族の連中が一つの組織にいるんだから、それぞれ統制を取る必要がある。戦うのが苦手な奴。何かを作るのに秀でている奴。そんな奴らを選別して違う組に分けて、何に役立つかを一人一人俺が審査する。そしてそれぞれを、お前らに統率してもらう。お前ら四人の立場は平等だ。誰が一番偉いとかなったらモメるだろう」

「そうだね。少なくとも僕がこいつより下とかあり得ないし」

ルシフェルは、念動魔術の恨みのおかげか、サタンやアドラメレクが諫める中、アルシエルに常に敵意を向けたままである。

「お前達の立場について、何かいい呼び名を俺が考えておく。そしてアルシエル」

「……」

「お前は、基本的にカミーオと連携させる。……そう仏頂面するな。今は別に俺に忠誠なんか誓わなくていいから、いつか俺を裏切って取って替わるくらいのつもりでカミーオから色々な技術や知恵を盗めるだけ盗め」

「む……」

「がはは！　だがもしサタンを害そうというのなら、我が黙ってはいないがな！」

胸の内を見透かされて動揺するアルシエルを、アドラメレクが豪快に笑う。
「そして『国家』の力が充実したらこれから南に打って出る」
「南……もしや、マレブランケに戦いを挑むつもりか」
カミーオの言葉に、アドラメレクもアルシエルも驚愕した。
マレブランケ族はアルシエルも手を出せなかったほどの魔界の一大勢力であり、一族を率いる大頭領マラコーダは最も『古の大魔王』に近いと言われる大悪魔である。
「マレブランケはもちろんいつか戦わなきゃならん相手だが、俺の目的はその先にある」
「その先、というと……まさか」
アルシエルが半ば答えを理解したように、驚愕した。
「そう。広大なマレブランケの縄張りの向こう。魔界唯一の『古代都市』サタナスアルク。古の大魔王の居城だ」
ここに、魔王サタンと悪魔大元帥アルシエルらの魔界統一に向けた覇道の第一歩が踏み出された。
魔界全土を平定し、エンテ・イスラに打って出た魔王軍が勇者エミリアに敗れ、遠く異世界、日本の笹塚にやってくるのは、このさらに二百年後のことである。


はたらく勇者さま達！ -a long time ago-

南大陸を南北に分断するオリュディマ大砂漠の中央に位置するヴァシュラーマ城塞は、魔王軍侵攻以前から南大陸では特異な独立国家だった。

オアシス都市として古くから交易で栄えたが、大砂漠の中にあって決して人間が住める国土は広くない。

面積にして二十五平方キロメートル程度の国土をオアシスと街ごと城壁で囲み、さながら砂漠に佇む巨大な亀の如く堅牢な城塞国家ができ上がった。

過酷な気候に定住する民の数は決して多くはなかったが、その厳しい環境が生んだのが、南大陸最強の戦士団である。

魔王軍侵攻の遥か以前。エンテ・イスラの中世史において、ヴァシュラーマの民を味方につけた者こそが南大陸を制すると言われていた。

結果的に現在南大陸で最も大きな版図を持っていると言われるハールーン王国が、中興時代にヴァシュラーマ城塞の支配者と同盟を結び、大砂漠の過酷な環境を身一つで生き抜く術を持つ屈強な戦士団の軍事力を借りることとなる。

それによってオリュディマ大砂漠を含めた南大陸の南半分は、現在のハールーン宗家国が制圧したのだった。

中興期から現代にかけて、巨大な一つの国家だったハールーン王家は分裂を始め、宗家国を継げない王族が治める分家国が、長い歴史の中で大陸北辺に多く勃興するに至る。

分家国成立の経緯は大抵が内乱や政変が元であり、結果的にハールーンの宗家及び分家国同士は国境付近で小競り合いが絶えぬ険悪な関係にあった。

他大陸から見れば一つの巨大な親戚内で起こる内乱であり、常に大規模な戦闘が起こっているわけでもなかったため調停に入るようなこともなかったのだが、魔王軍侵攻にあたりこの状況を解決できなかったのは、南大陸の人間にとって不幸なことだった。

マラコーダ軍の侵攻に対して、ハールーン諸王国は連携どころか連絡も取り合うことすらできず制圧された。

それほどにどうしようもなく仲の悪かった分家国同士が、勇者エミリアの登場に際して諍いを乗り越え南大陸北辺のマラコーダ軍に一致団結して対抗できたのは、ヴァシュラーマの戦士団の影響が大きいと言われている。

西大陸、北大陸の解放を為した勇者エミリアは、南大陸攻略にあたり魔王軍本拠である中央大陸の影響が強い北辺からではなく、海路を大きく迂回して大陸南辺からの反撃を試みる。

エミリア達はこの期に及んで連携を渋る分家国の王や老臣達を粘り強く説得。

最終的にはヴァシュラーマの支配者にして戦士長ラジードが砂漠中に伏せていた戦士達を集結させ、西大陸の神聖セント・アイレ帝国皇都解放戦以来となる大会戦を経てハールーン宗家を解放。マラコーダ軍を砂漠の北に追い返すことに成功する。

南大陸南辺の解放を為したエミリア達に、そのヴァシュラーマ城塞に関する相談が寄せられ

たのは、分家国の一つ、ハールーン・タジャ分家国に滞在していたときのことだった。
マラコーダ軍主力との戦いを制したエミリア達は、療養を兼ねた休養を終えて次の目的地を選定していたのだが、若きハールーン・タジャ分家国王エズラムハは、王宮の執務室にエミリア達を呼び出すと、真剣な顔で相談を持ちかけたのだ。
「ヴァシュラーマ城塞の様子がおかしい？」
「宗家解放戦のときに～軍の中心となった～砂漠の戦士団の国のことですよね～戦線にはラジード戦士長もおられたと記憶していますが～」
エメラダが眉を顰める。
「仰る通りですエメラダ殿」
エズラムハ王は頷く。
「宗家解放戦からもう二週間が経とうとしておりますが、皆様のおかげで分家同士が復興に向かっての話し合いに前向きな姿勢を示しています。ですが、会談の仲裁役として名乗りを上げていたヴァシュラーマとの連絡が途絶えてしまったのです」
「連絡が途絶えたってぇと、穏やかじゃねぇな。まさか北にいるマラコーダが何かしたってことか？」
アルバートの懸念は、エズラムハ王も考えていたようだ。
「それも考えられないことではありませんが、それでもヴァシュラーマは宗家解放戦に往時と

変わらぬ戦力を砂漠中から掻き集めたことを、皆さんもご存知と思います。そのヴァシュラーマがハールーン全家の解放が成ったと同時に音信不通になるような被害を受けるとは、なかなか考えづらいのです」

「ふむ、確かにの」

オルバも王に同意する。

「確かご宗家にもご分家にも、ヴァシュラーマと連絡を取るための特別な秘術だか符牒だかがあったと記憶しておりますが、それも機能しないのですかな」

「よくご存知ですね」

オルバの問いに、王は目を丸くするもすぐに沈み込む。

「実はその秘術が、当家の場合先王と私の間で継承される前にマラコーダ軍の侵略を受けて失われてしまったのです。恥ずかしながら我がタジャ分家国はこの戦で強制的に『若返って』しまいました。今後はこれまで決して良好な関係を築いてこなかった他の分家国に頭を下げて、父祖の代の技や儀式を改めて輸入し直さねばならないのです」

かくいうこのエズラムハ王。王としての確かな威厳と実務能力を兼ね備えており、南の大陸特有の褐色の肌と意志の強そうな褐色の瞳に豊かな髭を蓄える偉丈夫で、国民の人気も非常に高いのだが、驚くべきことにまだ十代なのである。

先王はマラコーダ軍の侵攻により五十歳の若さで死去。急遽後を継いだ若き王の後見職に

就くべき老臣達もまたマラコーダ軍の侵攻で全滅してしまい、現在のタジャ分家国は政軍見渡しても国家機関の最高責任者の年齢が三十五という有様だ。

「他の分家国もヴァシュラーマの異常は察していましてその……恥ずかしながら、どこも復興会議に先立ってヴァシュラーマとの縁を改めて深くしたいと必死なのです」

「それでマラコーダを追っかけて北に行こうとしてる俺達を使ってヴァシュラーマとの繋ぎ役をやらせよう、と？」

「はっきり申し上げてその通りです。代わりと言ってはなんですが、道中に必要な移動手段、水や食料、その他ヴァシュラーマまでと言わず、オリュディマ大砂漠を抜けるために必要な物は全て私が出させていただきます」

アルバートの挑発的な言い方に物怖じすることなく答え、それでいて決して国庫からではなく自分の懐から金を出そうとする辺り、エズラムハ王のしたたかさと誠実さがよく現れている。

「なるほど、まぁお互いにとって悪い話にはならねぇってとこか」

アルバートが若い王の行く末を思い苦笑し、エズラムハ王も肩を竦めた。

老人が生き残っている他の分家国とやり合わねばならぬエズラムハの行く末はともかく、アルバートは三人に言う。

「いいんじゃねぇか？　どうせオリュディマ大砂漠を抜けるにはヴァシュラーマに寄らなきゃいけねぇんだから」

「そうだな」
「異議なしです～」
「国王陛下。音信不通になる前のヴァシュラーマはどのような様子だったんですか？」
全員の意志が決まったところでエミリアが尋ねる。
「それが、エメラダ殿が仰っていたヴァシュラーマ戦士長のラジード殿が、解放戦の終わる頃に不吉なことを言っていたのです」
「不吉なこと？」
「はい」
エズラムハ王は、深刻な顔で頷いた。
「『ヴァシュラーマが、ドラゴンに飲み込まれる前に帰らねば』と……」

※

「ドラゴンって、どういう意味なのかしら」
謁見を終える頃には、もう陽は落ちかけていて辺りの気温は急激に下がりつつあった。
ヴァシュラーマ城塞に向かう準備を整えるためにタジャ城下を足早に歩くエミリア達は、エズラムハ王の言っていたことについて話し合っていた。

「魔王軍が用いていたあの獣のことか～そうでなければ世界中の神話に語られている竜のことなのか～」

「でもその戦士長はヴァシュラーマが飲み込まれるっつってたんだろ？　城一つまるまる飲み込むような獣が陸上にいるってのか？」

「私も世界中を巡って長いが、そんな獣の話は聞いたことがないな。何かの比喩なのではないか？」

エメラダもアルバートもオルバも、ドラゴンという単語が意味するところに心当たりは無いようだった。

「比喩だとすると、自然現象か何かかしら。砂嵐とか？」

「自然現象ならありそうだが、砂漠の民が砂嵐如きで音信不通になるとも思えぬな」

「私はヴァシュラーマには行ったことがないのですが～例えばオアシス都市なら川が近くに流れていて～、その川が氾濫するとかはどうでしょう～？」

「砂漠に水が溢れるのは悪いことじゃないと思うが、どっちにしろそれもちっと弱ぇな」

四人で話していても、結論は出そうになかった。話し合いに若干緊張感が無いのは、ヴァシュラーマで起こっている事態が魔王軍によるものではなさそうだという予測が立っているからである。

戦士長ラジードの発言を鑑みるに『ドラゴン』なるものの発生は以前から予測されていた出

来事と思われる。ヴァシュラーマの支配者たるラジードが予測していたことなら、ヴァシュラーマが国を挙げてその事態に対策を打っていないはずもない。

もちろんヴァシュラーマもマラコーダ軍による侵略の影響を受けていないわけではないが、ハールーン宗家解放戦に際し集まった戦士団の数を思えば、ハールーン諸王家より余程国として立派に機能していてもおかしくはない。

「ま、きちんと準備しておくことに越したこたねぇから、今日と明日朝一でもう一度足りないものが無いかどうか調べてから出発しようぜ。砂漠越えのためのラクダで一週間かかるってんだからな。特にオルバ、お前さんもうトシなんだから、この前みたいに日射病で倒れるとか勘弁してくれよ」

「む、まだその話を蒸し返すか！」

南大陸に上陸してすぐの頃、頭を剃髪しているオルバは高温乾燥の気候に対応するための日除けのフードを手に入れるよりも前に、頭を思い切り陽に灼かれて二日ほど倒れてしまったことがあったのだ。

歳に似合わず頑健な体を持つオルバの思わぬ失態はむしろ微笑ましさすらあったのだが、その後しばらくオルバの剃髪した頭部に日焼け痕がくっきり残ってしまったことでアルバートが折につけてそのことをからかい倒すのである。

「まぁまぁ。でもアルの言うことはもっともね。折角だから朝市で少し情報も集めましょう」

エミリアが笑顔でとりなしながらアルバートとオルバを引き離す。
「全く！」
オルバも本気では怒っていないが、何を思ったか剃髪した頭頂部をなでまわした後、
「頭を冷やしてくる！」
と出ていってしまった。
「……ボケに乗ったのか？　素か？」
「判断は難しいところですね～」
「アル、後で謝っておきなさいよ」

夜の城下を一人歩くオルバは、街の中の大法神教会へと向かっていた。
ハールーンの諸王国は他国の宗教に寛容であり、国内のどの街にも小さいながら大法神教会の聖堂が建てられている。
オルバは行く先々の街で必ず教会に顔を見せることにしているのだが、この日はアルバートのせいで夜市で売られる遮光フードが気になってしまい、物色しながら歩いていたせいで、予定よりも少し到着が遅れた。
「オルバ様」

「うむ」

他国の司祭に顔を見せて彼らの悩みなどを聞き取るのはオルバの重要な仕事である。

だがそれ以上に、オルバは行く先々の教会で、連絡を取り合う者達がいるのだ。

「どうだ？」

「……ハールーン宗家、分家、いずれもエミリア殿一行の快進撃のおかげで急速に復興を進めております。その煽りで他国の商館や大使、教会の信徒などが迫害されたり不遇な扱いを受ける気配もありません」

「ふむ、そうか」

夜市の喧騒を遠くに聞きながら、大通りを裏に入った教会の敷地内で、オルバが言葉を交わすのは影のような男だった。夜の闇に紛れるような暗い色のローブを纏うが、その下には大法神教会の聖職者の証である法衣の裾が垣間見える。

「南大陸は、少なくとも魔王軍の脅威があるうちは、北部のマラコーダ軍を討つために無用な諍いを起こさずに行動するでしょう。西大陸と北大陸の連合騎士団が北辺の魔王軍を倒すためにエミリア殿と連携する動きも理解しているようです。ただその後は、正直どうなるか分かりませんが」

「争いは平和になった後で、ということか。皮肉なものだな」

オルバは影の言葉に鼻を鳴らすが、ふと思いついて尋ねた。

「そうだ。お前、ヴァシュラーマ城塞について何か聞いておらぬか」
「ヴァシュラーマ……でございますか？　オリュディマ大砂漠の戦士の国の」
「うむ。タジャの王が連絡が取れないと嘆いていてな。次の目的地がどうやらそこになりそうなのだ」
「左様ですか。ヴァシュラーマ……最近何かで聞いたような」
影はしばらく首を捻っていたが、すぐに何かを思い出したようだ。
「そういえば……最近ヴァシュラーマに向かったとかなんとか」
「向かった？　誰がだ？」
「は、実は、その……」
影の男は、唐突に歯切れが悪くなる。
「西大陸の海洋国家ラムワーゼでの一件の後かなりお疲れのご様子で……それで、ハールーン宗家解放戦の後はどうせ北辺の様子を探らなければならないし、折角近くまで来たのだからどうしても行きたいと仰って、その」
「どうした、はっきりせんな」
「は、はあ……」
影の男はフードの下の汗を拭いながら、思い切って言った。
「クレスティア執行官が、今、ヴァシュラーマに向かっているはずです」

「……なんだと？」
オルバは驚いて目を見開いた。

※

「なんら～～～……おかしなところは～～～……ありませんねぇ～～～……」
暑さと疲労で語尾がいつもより三倍増しに延長されているエメラダは、ラクダの背に揺られながらうめく。
「もう～～～……タジャを出て～～～……五日経ちますけど～～～……悪魔も～～～ドラゴンも～～～出ないじゃないですか～～～」
「エメ、喋るなよ。体力使うぞ」
「来る日も～～～来る日も～～～砂と空ばかりで～～～気がおかしくなりそうです～～～」
「もうしばらくの辛抱だ。思ったより行程は順調だぞ」
先頭のラクダに乗ったオルバが、前方の砂丘を指さす。
「あの砂丘の影で休憩しよう。エミリア！　聞こえたか！」
「……大丈夫よー」
最後尾のラクダに乗るエミリアも、大分暑さにやられているようだ。

オルバの指定した砂丘の陰は比較的ひんやりとしていたが、ラクダを座らせる作業に手間取ってまたぞろ全身から汗が噴き出す。

「こんな状態で……悪魔に出会いたくはないわね」

日陰に入って三十分ほど、ようやく息をついたエミリアは忌々しげに空を見上げる。

「こんな炎天下で戦ったら、熱で聖剣が変形しちゃわないかしら」

「進化の天銀だからそんなことはないと思うがな」

オルバは笑うが、それが冗談に聞こえないほどには暑いのだ。

「おい……死ぬなよ？」

「うきゅ～～～……」

エメラダは砂の上に倒れたまま、先程から唸ってばかりである。

「どうして～～～涼しい夜に動いちゃいけないんですか～～～」

「夜は昼動くより体力消耗して、昼休んでも夜ほど回復できないから、ってエメが言ってたんじゃない」

「正論は嫌いです～～～」

無茶苦茶を言っているが、要するにとにかく暑いのが嫌なのだ。砂漠越えは遠洋航海と同じで孤立無縁の中で不測の事態が起こり易く、食糧も水も節約する必要があるため、小さな体の割によく食べるエメラダにとってはまさしく地獄の道行である。

「……ちょっとアル～～～変な声上げないでくださいよ～～～」
と、そのとき、エメラダは口を尖らせながら自分を日除け布で扇いでくれているアルバートにそんなことを言い出した。
「あ？　俺は何も言ってねぇぞ？」
「え～～～？　じゃあお腹の音ですか～～～？　さっきから～～～ごぉ～～～って」
「あ？」
「ごぉ？」
アルバートは首を傾げ、オルバが不審げな顔になり、エミリアがはっとして立ち上がる。
「ちょっと周りを見てくるわ」
エミリアは足を取られないように慎重に砂丘を上がる。日陰から出た途端に照りつける刺すような陽差しに顔を顰めながらエミリアは周囲を見回すが、ふと、遠くに妙なものを見つけて目を細めた。
「な、何、あれ……」
砂漠の表面を、黒い巨大な何かが這いずり回っている。まだ少し遠いが、砂塵を巻き上げる黒い巨大な何ものかは、どうやらこちら側に近づいてきているようだ。
「オルバ！　何か来る！」
エミリアはぱたぱたと砂丘を駆け下りながら、エメラダを引き起こして全員を立たせた。

「ものすごく大きなものが近づいてくるわ！　ここにいたら危ないかもしれない！」
「大きなもの？」
「見たら分かるわ！　とにかくラクダを立たせて、逃げられるようにしないと！」
「う、うむ。分かった」
エミリアの鬼気迫る様子に驚いたオルバはラクダを立たせて砂丘を上がる。
「な、なんだあれは」
オルバが砂丘から見やったときには、謎の黒い巨大なものはかなり接近していた。そこだけ黒い液体がうごめいているかのように、砂漠の中に巨大で黒い不定形の何かがわだかまり、徐々にこちらに近づいてくる。
「……何かの、生き物か？」
オルバはエミリアよりもう少しその不定形を注意深く観察する。どうやらそれは、何かの生き物が寄り集まった群れのようだった。地を這う黒い動物が恐ろしく大きな群れを作って、一斉に移動しているのだ。
オルバは目をこらして、それがなんの動物であるかを突き止めようとして驚く。
「と、トカゲだと!?」
ひしめき合うそれは、中型のトカゲの群れであるらしい。
猫よりは大きいだろうが、犬よりは小さい。そんなサイズのトカゲが何千何万も寄り集まっ

た結果、巨大な一つの塊に見えたのだ。
悪意のある敵ではないが、あれに巻き込まれたらラクダといえど足を取られて大怪我をするかもしれない。
オルバは身を翻して日陰に戻ると、皆を手伝ってラクダをトカゲの群れの進行方向から非難させるべく行動を開始した。
それから半刻後。四人とラクダは、幸いにもトカゲの大群に飲み込まれることなく砂漠をすれ違ったのだった。
「すっげぇ数だったな。なんだあれ」
少しの間空に飛び上がってトカゲの様子を観察していたアルバートは、珍しいものを見た好奇心に目を輝かせている。
「トカゲなんでどうでもいいですよ～～もう少し休みましょ～～」
エメラダはいつになくやる気が無い。
エミリアはトカゲの群れが去っていった砂煙を彼方に眺めながら、あることに気づいた。
「まさか……ドラゴンって……」

※

遠くに見えてきたヴァシュラーマ城塞の城壁がボロボロに損壊し今にも崩れそうになっているのを見たエミリア達は、最初は魔王軍の襲撃に遭ったのかと慌てた。

だが、近づくにつれて、ある意味魔王軍よりもっと不気味なものに破壊されたのだということが分かったのだ。

「あ、あれってもしかして、トカゲ？」

「げぇっ!?　なんだありゃ!?」

エミリアとアルバートは、ヴァシュラーマ城塞まで続く砂漠の中の街道の周りに、無数の黒い何ものかがうごめいているのを見て悲鳴を上げた。

先だっての群れほどの数はいない。だが明らかに常軌を逸した数のトカゲが、ヴァシュラーマの民に踏み固められた周囲の砂漠の大地の中を好き勝手にうろついているのだ。

城壁の周りだけでも、軽く一万はいるだろう。爬虫類が苦手な人間が見たらまさしく地獄絵図である。

実際エメラダなどは、自分のラクダが道を横断するトカゲを何度も踏みそうになりその度に悲鳴を上げるほどだ。

「もお～～～！　なんなんですかこれは～～～！」

「エメ、トカゲ苦手なの？」

「苦手じゃなくたって～～～見てて気持ちいい数じゃないですよ～～～」

思いのほか過剰に反応するエメラダを意外そうに見ていたエミリアだったが、ヴァシュラーマ城門までもう間もなくの所で、前方から長い槍のようなものを担いだヴァシュラーマの戦士が二人、ラクダに乗って駆けてくるのに気づいた。

「止まれ！　何者だ！」

砂漠の民らしく美しい日除けの織物で全身と口元を覆った屈強な男達であり、ハールーン宗家解放戦ではこのような姿の多くの戦士と肩を並べて戦ったものだ。

エミリアは害意の無いことを示しつつトカゲを踏み潰さぬよう停止しながら、エズラムハ王からもらった親書を二人の戦士に示してみせた。

「私が一行の代表の、エミリア・ユスティーナです。ラジード戦士長にお目にかかりたいのですが」

「タジャのエズラムハ王の印……左様でしたか。これは失礼いたしました」

身元が分かると、戦士は鞍上からではあるが、エミリア達に恭しく洗練された礼をする。

「ですがその、ご覧の通り少々取り込んでおりまして……ご案内はできるのですが、戦士長との面会にはかなり時間がかかりますが、よろしいでしょうか」

「あ、はい、それは……」

エミリアも困惑しながら足元に群がるトカゲ達を見下ろす。

全長五十センチほどの丸々と太った黒いトカゲである。性格は大人しいらしく、足元に群が

るとはいってもラクダや人間の足に噛みついたりしないようだ。
顔つきにはそこそこ愛嬌があり、動きものたのたとしていて危険な動物とはとても思えないが、この数は得体の知れない脅威を感じさせる。
「では、ご案内いたします。エズラムハ王はお元気でいらっしゃいましたか」
戦士達は先に立って、エミリア達を案内しはじめる。
戦士達が担いでいたのはなんと槍ではなく柄の長い箒であった。それでラクダの侵攻を妨害するトカゲを追い払っているのである。
箒で顔を叩かれるとトカゲは迷惑そうな顔をしながらも素直に道を開ける。
うっかり踏み潰す心配が無くなって一安心のエミリア達だが、いくら砂漠の国の知識が無いとしても、この状況が正常な状態でないことだけはよく分かる。
「あの、このトカゲ達は……」
エミリアは全員の気持ちを代表して案内の戦士に問うと、戦士は日除け布の中から苦笑して言った。
「ドラゴニクスという名のトカゲで、オリュディマ大砂漠全域に生息する南大陸の固有種です。繁殖期には砂漠の西の海岸から東の海岸に向かって群れで大移動するのですが、その姿が古の竜に見えることからヴァシュラーマでは古くから『ドラゴン』と呼ばれています」
「ああ、ドラゴンって、そういうことだったんですか」

「ですが……今年はどうも、一所に集まるトカゲの数が異常でして」
そう言っている間にも、戦士はせわしなく箒を動かしトカゲを追い払っている。
「砂漠の北側に住むトカゲ達が、魔王軍の影響なのか南側に移動してきているらしいのです。砂漠のほぼ全てのトカゲの移動ルートが集中してしまったせいで、彼らの通過した後には砂丘すら残らない有様でして、それでヴァシュラーマは何度も何度もトカゲの群れの襲撃を受け、遂には最後の群れのせいでこんなことに」
「ま、マジかよ!?」
「こ、これほどとは……」
戦士が箒で指し示す先を見て、アルバートもオルバも度肝を抜かれた。
縦横十メートル。熱さ五十センチはあろうかという城門の大扉までが破壊されているのである。魔王軍や古の戦争にも持ちこたえたであろう戦士の国ヴァシュラーマの正門を砕いたのが足元でのたのたと不器用に動き回る間抜けヅラのトカゲだと、誰が信じるだろうか。
「ハールーン宗家解放が成ったというのに、肝心のヴァシュラーマがこの有様ではまたぞろマラコーダ軍に隙を見せることになりますから……周辺の警戒は密にしなければならないのですが……」
また戦士は、声を曇らせる。
城壁内に入っても、街の中もまたトカゲで溢れていた。

攻撃性が無いとはいえ、道という道。地面という地面。どこを見てもトカゲだらけなのである。

「トカゲの群れがどこを移動しているか分からず、迂闊に砂漠に出られないのです。一匹一匹は鈍重ですが、寄り集まって移動するときのドラゴニクスの力は、まさしく古のドラゴンの如く強力です。城門や城壁すら激突の衝撃で破壊されるほどですから、巻き込まれてしまえば人間など一撃で天高く弾き飛ばされるか、ひき肉にされる以外の選択肢はありません」

これで、ハールーン諸国と連絡がつかなかった理由も分かった。

「そ、そんなトカゲがこんなに入ってきて、よく城壁内の街が無事でしたね」

エミリアの問いに、戦士は悲しげな声で答えた。

「数百年の間、外敵を防いだあの門の最後の働きのおかげです」

そう言って、先程くぐった無残に壊れた門の方を指さした。

「城門が砕けた衝撃で統率が崩れ、ヴァシュラーマを襲った最後の群れはこうしてこの土地でいつまでもたむろしているのです」

「あー……」

恐らく古の先祖から受け継いだこの土地での生活を、ヴァシュラーマの民は誇りに思っているのだ。

城塞や城門も長い歴史の中で少しずつ増強されたり補強されたりして、民と共に歴史を刻

んできたのだ。
　その歴史がトカゲの突撃で崩れ去るかもしれないなどと思えば、悲しくならぬはずがない。
「私達も危ないところだったんですね～～～」
　エメラダは、つい先日自分達が遭遇したドラゴニクスの群れのことを思い出しているようだ。あれも、ゆうに一万匹はいるだろう群れだったからだ。
「皆さんがご覧になった規模の群れがもし再来したら、今度こそヴァシュラーマの城壁は完全に崩壊するでしょう。今年ほど群れが大規模になるのは我々も初めて見ましたが、何度も襲撃されたところを見ると、トカゲ達は恐らくこのヴァシュラーマ城がある一帯を移動路として認識してしまったのです」
「「「え」」」
　四人の声が重なった。
「それに、東の海で繁殖行動を終えたトカゲは、元いた土地に帰るために来た道を戻ってくるんです。もっと言うと、東の海で生まれたトカゲ達も、親の土地に向かって大移動するんです」
「「「あ」」」
　全員が唖然として口を開ける。
「じ、じゃあ、あの壁や門を壊した群れが帰るときにまたここを通ったら……」

「そうです。今度は反対側の門がぶち破られて、街の中をドラゴンの暴威が駆け巡ることになりかねません。城壁もどれほど持つか分かりませんし、もしドラゴンの猛威が城下に入っても失われなかったら、国も国民もただでは済みません。今は動ける者は門や城壁を修繕したり、トカゲの群れの動向を掴むために出ていたりと必死の有様なのです」

「……なんだか大変なときにお邪魔してしまったようで……」

「いえ、我々もいい加減ハールーン諸王家と連絡を取らねばとは思っていたので……」

エミリアと案内の戦士の会話が、なんだか妙な遠慮を含みはじめる。

「ところで今更になって失礼とは存じますが、エミリア・ユスティーナと仰るお名前は、もしかして宗家解放戦で突撃隊の先頭に立った勇者エミリア殿……ですよね？」

「……あ、はい」

エミリアは嫌な予感がした。その予感を裏付けるように、二人の案内の戦士は何事かを囁き合い、やがて苦しげに言った。

「こんな道端で、私達如きが不躾なことを申し上げるのは大変失礼とは存じますが……」

「……わ、私達にもできることとできないことが……」

「「この危機を救うために、お力添え願えませんか！」」

「……できないことが……」

砂漠最強の戦士達の涙ながらの懇願を、エミリアはひきつった顔で受け止める。

その足元で、そんなエミリアを小馬鹿にするように、一匹のドラゴニクスが舌を出したのだった。

※

トカゲから城を守る。

口で言うのは簡単だが、ことは自然現象であり、その規模は他大陸人であるエミリア達にはとても計り知れない。

あの巨大な群れを見た後でさえ、足元でのそのそ動くこのトカゲ達が突撃で以て城門を破壊したという話が信じ難いのだ。

夜になってラジード戦士長とも面会が叶ったエミリア達は、そこでも言外に何か力を貸してもらえないかという空気を感じ取った。

だがこの大砂漠で長らく城塞国家を維持してきたヴァシュラーマの民が知恵を絞ってどうにもならないことを、来たばかりのエミリア達がどうこうできるとはとても思えなかった。

だが、そうも言っていられない事情もあった。

ここから北方。大砂漠を越えて北に向かうには、どうしてもヴァシュラーマの民の助けが必要なのだ。

大砂漠の北には『火炎道』と呼ばれる、大砂漠の中でも特に暑さが異常な気候が年中続く一帯があり、そこはヴァシュラーマの民、或いは北方の諸国家の者の助けなくして容易に通れる場所ではない。

世界中を宣教の旅で回ったオルバも、さすがに火炎道を通るためのノウハウは持ち合わせてはいないため、どうしてもここで協力者を募る必要がある。

しかしヴァシュラーマ存亡の窮状を放って自分達の道行を手伝え、などと言える状況では全くないし、もっと言えば大砂漠の要衝でもあるヴァシュラーマが崩壊すれば、マラコーダ軍が南のハールーンに向けて再進軍する恐れがある。

万が一ヴァシュラーマが崩壊の憂き目に遭えば、仲が悪いくせに周辺への影響力が大きいハールーン諸王国同士の関係がどうなるかは日に見えていた。

ハールーンが一枚岩にならなければ、南大陸の南北の連携も取れない。

この騒動は辺境の小国だけの問題ではない。南大陸全土の未来を左右する重大な危機なのだ。

つまりどうあっても今のエミリア達に、ヴァシュラーマの窮状を見捨てて北へ急ぐ、という選択肢は取れないのである。

「とはいえ……何をどうすれば……トカゲ運びの手伝いでもする？」

「トカゲ運び……ですか～」

ヴァシュラーマに入った日の夜。城塞内のメインストリートで、いい加減慣れてしまった

道端のトカゲを見て、エミリアとエメラダは同時にため息を吐いた。
「でも～、きっと結構な重労働になりますよ～重そうですし～」
「確かにね……」
ドラゴニクスの成体の平均的な体長は五十センチから大きいものでは七十センチほどになるらしく、しかもずんぐりした胴体を持っているため見た目以上に重いようだ。
二人がこうしている間にも屈強なヴァシュラーマの戦士達が、虚ろに疲弊した顔で荷車のようなものにトカゲを満載にし城の外へと走っていく姿を見ることができた。
この数相手ではエミリア達四人が加わったところで焼け石に水としか思えないし、そもそも繁殖地から戻ってくるトカゲの群れの脅威に対しなんら有効な対策になっていない。
砂漠の夜空は美しい満点の銀河だというのに、地面を見ればどこまでもトカゲギャラクシーである。
とてもではないが、砂漠の街のエキゾチックな魅力に浸る余裕などありはしなかった。
「それにしても群れるとそんなに怖いのに、なんでここにいる連中はこんな鈍いのかしら」
「なんでも～群れが統率を失うと～方角も見失うんだそうです～」
「そんなことあるの？」
「さぁ～。でもヴァシュラーマの皆さんがそう仰ってますし～」
エミリア達は知る由もないことだが、ドラゴニクスは、寄り集まることで体内の器官と大地

の磁界を群れ全体でリンクさせ、方角を正確に捉える体機能を持っていた。
だが一度その群れが解体されてしまうとどちらに向かっていいか分からなくなり、再び寄り集まって方向を確かめられるまではその場で屯す習性があるのだ。
「でも、これだけのトカゲが生きるための餌や水がどこにあるのかしら」
「考えれば考えるほど不思議な生き物ですね～……はぁ、困りましたねぇ～」
「アルとオルバが、城下で何か掴んでくることを祈りましょう」
アルバートとオルバは、ラジード戦士長との面会を辞すと、一足先に城下に情報を集めに行った。
アルバートは砂漠越えで消費した物資の補給がてらの情報収集。
オルバも、こんな辺境にも大法神教会の聖堂は建てられているそうで、現地の司祭に話を聞きに行くと言って出ていったのだ。
「対策が見つかったとしても～、私達に出来そうなことならいいんですが～」
結局のところ、人海戦術でトカゲを城の外に運び出してから門を塞ぐしかないのではないか。
そんな予感が重く二人にのしかかっていた。

「そなたらが激務だということは、私も十分承知している」

「……はい」

城内の端。城壁の麓にある小さな教会聖堂の裏手で、オルバは渋い顔でお説教をしていた。

「特にお前の働きは目覚ましいものがあり、私も大いに頼りにしている」

「……はい」

オルバの隣でいじけたようにしゃがんでいるのは、タジャ分国でオルバが密談をした男と同じように、目立たない色のローブを身に纏う小柄な女だった。

「だが、まさかそのお前が、そんな理由でこんな辺境に足を運んでいるとは……筆頭執行官のお前がそれでは、他の者に示しがつかんだろう」

「……面目次第もございません」

低い声で謝罪する女だが、言葉の中にはどこか開き直っている様子があった。

「ですがオルバ様。何卒一度お試しください。きっと、お分かりいただけるはずです！」

「分かってたまるか！　今はトカゲのことなど聞きたくもないのだ！」

オルバもまた、女と同じように頭を抱えてしゃがみ込んでしまう。

「それをなんだお前は！　宣教の旅で食べたトカゲ料理の味が忘れられなかっただと!?　この世界の危機の最中に何を考えておる！　一体何日前からヴァシュラーマにいたのだ！」

「と……十日前から」

思いもしない長逗留に、オルバは一瞬言葉を失う。

「……全く嘆かわしい。タジャ分家国に駐留している連中が訝しんでおったぞ。一体クレスティア司教がこんな所になんの用なのだとな」

「はぁ……」

ローブの女は項垂れながらフードだけを取り去った。

艶やかな髪を麻紐で縛って纏め、首に大法神教会の十字の首飾りを下げた女、クレスティア・ベルは観念した様子で細々と話しはじめた。

「初めて食べたのは、十六の歳に宣教団の一員として、ヴァシュラーマではなくハールーン・タジャ分家国に赴いたときでした。ほとんどの者達はトカゲなど魔性の食べ物だと言って手をつけなかったのですが、私や審問会の者は立場上、隠れて調査せざるを得ず……」

大法神教会は特に肉食を禁じてはいないが、それでも西大陸にはドラゴニクス以前に爬虫類を好んで食す文化は存在しなかったため、多くの西大陸の大法神教会信徒にとってはドラゴニクス料理など悪魔の食べ物としか思えないだろう。

「……それで嫌々食べたら、思いがけず一生の思い出になるほど美味かったと？」

「ハールーンで聞き及んだところ、トカゲの原産地はこのヴァシュラーマだというのです。それでその……直近で差し迫った聖務もありませんでしたし、北に向かうことも決まっていたのでつい……」

勢いでオルバに何日も先んじて大砂漠を越えて、ヴァシュラーマまでやってきてしまったと

いうわけだ。

クレスティア・ベル司教はオルバが大法神教会で管轄する宣教・外交部の人間で、異端審問会での働きを認められ、先頃筆頭執行官に就任したばかりであった。

異端審問会に限らず多くの外交部の者達が陰からオルバを通じてエミリア一行の道行を支えているのだが、ヴァシュラーマ以北に関してはそれが見込めなかっただけに、クレスティアのヴァシュラーマ滞在はオルバにとって悪いことばかりではない。

ただ、エミリアの旅とかそれ以前の問題として、教会の中枢を担う人間が物見遊山気分でトカゲ料理を食べるためだけにやってきた、というのはやはり看過していい事態ではない。

ハールーンへの布教活動はある程度功を奏してはいるものの、西大陸ほどの勢力を得るには至らず、どの街の聖堂も街外れに小さいものが一つあればいい方である。

こういうところから末端の綱紀が緩んでいくのかとオルバは嘆かわしい気分になるが、今はそんなことを問題にしているときでもなかった。

「……まぁ、今はトカゲ料理のことはどうでもいい。クレスティア、お前は十日ほど前から滞在していると言ったな？」

「どうでもよくはありません！」

「どうでもいいのだ！」

真剣な顔で反論してくるクレスティアを一蹴し、オルバは話を進める。

「クレスティア・ベル、お前はヴァシュラーマ城にドラゴニクスの群れが突撃してくるのを、見たことがあるということか？」

「……仰る通りです」

クレスティアは少しずつ語る。

それはクレスティアがヴァシュラーマに着いたまさにその日こと。城壁内にけたたましく鐘が鳴り響いた。

緊急事態を城壁中に知らせる警報だと気づいたときには、既に城壁を越えてドラゴニクスの群れが作り出す砂埃が空に舞い上がって見えたのだから、その規模がどれほど恐ろしいものだったか想像に余りある。

それからものの数分後には落雷のような轟音が鳴り響き、城門が破壊され、クレスティアが気がついたときには城内にトカゲが溢れていたのだと言う。

「既に何度も突撃を受けた城壁を修繕するために、多くの戦士達が城壁に上っていました。そのため突撃の衝撃で城壁から転落し、大怪我を負った者もいました。この教会にも門を破った勢いのまま城内に飛び込んできたトカゲに激突されて怪我をした者が大勢運び込まれてきました」

「冗談にしか聞こえぬが、色々な意味で地獄絵図だな、それは」

オルバは改めて、今二人の目の前をゆっくり横切ろうとするトカゲの恐ろしさに身震いする

やらおかしくなるやら。
「クレスティア、お前そんな恐ろしい事態を引き起こしたこんな連中を食おうと言うのか」
「いえあの、そう言われると、なんと言うか、大変心が痛むのですが……」
二人の会話を理解したわけではないだろうが、トカゲが一瞬停止して、つぶらな瞳を二人の方に向けて凝視してくる。
オルバとクレスティアがそれをそれぞれの表情で見返していると、トカゲはまた何事も無かったかのようにのそりのそりと歩いていった。
だがそのときふと、オルバは気づいた。
「そうだ。食べられるなら、何故皆このトカゲを捕えて食べようとせんのだ？」
「数が多すぎるからではないでしょうか」
クレスティアが言う。
「ヴァシュラーマの民の人口は決して多くありません。ドラゴニクスの肉は伝統的な調理法で料理すれば成獣一頭で平均的な二家族分にはなります。城の周辺だけで万といるドラゴニクスを食べていたら、それこそ食糧の過剰備蓄になります」
「それはそうか。燻製や塩漬けなどにして長期保存ができるようにしてもダメか？」
「どうでしょう」
クレスティアは顎に手を当てると真剣な顔で唸る。

「大砂漠の中では燻すための燃料が貴重です。ヴァシュラーマの民が食べる際は大体が日中の日光で熱された路傍の岩を用いた炉端焼きをするか……伝統料理ではスープの具にしたり、出汁を取った後に脂の落ちた肉に塩を振って、練った芋と共に食べるのが一般的です。頭部は特に珍味で栄養豊富らしいのですが、地元の人間でも好き嫌いが分かれるとかで。ですがそもそも岩塩も貴重なものですし、やはり一度に調理するにはそれなりの量を確保せねば……そうだ、ドラゴニクスの体を丸ごとアルコールに漬けて作るドラゴンスピリッツ、と呼ばれる酒も一部では製造されていますが……ああでもこれは製法がヴァシュラーマ戦士長が代々口伝する秘儀とかで作る季節が限られる縁起物ですから、例えトカゲが大量にいても量産はまずあり得ないですね。他には鱗を煎じてハールーン全土に群生するリーディカの花弁を発酵させたものを混ぜ合わせると、胃の調子を整える茶になるとか、あとは中央大陸と交易のあった北方諸国には牛豚鶏と同じくらいの市場規模でドラゴニクスを用いた料理を出す文化が浸透していて輸出も盛んだとのことですが、ご存知の通りマラコーダ軍の制圧下にあっては流通などとても見込めませんしそれに……」

「……このトカゲの何がお前をそうさせたのだ」

日頃どんな聖務も顔色一つ変えずにこなす異端審問会筆頭審問官がこれほど何かについて熱弁する姿をオルバは初めて見た。

放っておけばいつまでたってもトカゲの食材としての汎用性有用性市場価値その他諸々を語

っていそうなクレスティアに、オルバはどっと脱力してしまう。
「ま、まぁ良い、とりあえず、ここで会ったが一蓮托生だ。またトカゲのことで知りたいことができたら聞きに来る。私達がここを出るまでは、連絡がつくようにしておけ」
「エミリア殿ご一行を、ヴァシュラーマで一番美味い店にご案内することもできます」
そういうことを聞いているのではないのだが、もうオルバはクレスティアのことを放ってエミリア達の待つ城内の宿に戻ることにした。
途中、トカゲのおかげでいまいち盛り上がりにかける夜市を足元に気をつけながら歩いていたオルバは、突然後ろから肩を叩かれた。
「よう、そっちは収穫あったか？」
振り返るとそこにはアルバートがいて、手に何か焼いた肉を刺した串を持っていた。
「……まさかドラゴニクスの肉を焼いた串焼きではあるまいな」
「お！　よく分かったな。あっちこっちで売ってるんだ。いや、ゲテもんかと思ったけど、これがなかなか悪くない味でな。まぁ、生きてる奴らがそこらへんにうじゃうじゃいる中で食うのはちっと気が引けるがよ」
「私はもう、食べる前からトカゲ料理の話は腹いっぱいだ」
オルバは肩を竦めてアルバートと共に歩き出そうとしたが、ふと妙な違和感を覚えて立ち止まる。

「ん？　どうした？」
「いや……」
オルバは自分の足元を見回して、首を傾げる。どうも、歩きやすい。
夜市の中を悠然と闊歩していたドラゴニクス達が、なぜか今だけ自分の周囲から消えている。
もちろん遠くには姿が確認できるのだが、どうもオルバとアルバートを遠巻きにしながら近づいてはこないようだ。
「アルバート！　その串を貸せ！」
「ん？　なんだ、やっぱ食うのか？」
オルバはあることに気づくと、アルバートの返事を聞かずに串を奪い、それを少し低い位置に構えながら早足で歩きはじめた。
「お、おいオルバ？　どうした？　何やってんだお前」
剃髪した厳粛な聖職者が、肉焼き串を腰ために構えて怪しげな動きをしている様は、トカゲ以上に奇異な姿だ。
「もしや、これは……」
だがオルバはアルバートなどお構いなしに、串を突き出しながらずんずんと夜市を歩いていく。
アルバートが買った焼き立ての串は、ハーブとスパイスを混ぜたタレと程良い焼き加減で空

腹を刺激する匂いを立てている。
その匂いが届く範囲のドラゴニクスが、それなりに機敏な動きでオルバを避けるのだ。
「お、おいオルバ、こいつぁ……」
アルバートもそのことに気づいたのか、真剣な顔でオルバを見る。
オルバは串をアルバートに返すと、やはり真剣な顔で頷き返した。
「なんとかなるかもしれんぞ」

※

「「トカゲを食べろうううううう～～～!?」」
ヴァシュラーマの中心街にある貴賓用宿舎の中から発せられた絶叫は、それだけで脆くなった城壁を壊してしまうのではないかというほどの嫌悪感に満ちていた。
オルバとアルバートが、ヴァシュラーマをトカゲから守る方策を見つけたと言うので期待を膨らませたら、まさかのゲテモノ食いである。
エミリアとエメラダはアルバートが持つ植物の皮に包まれた肉の串焼きを見て顔を引きつらせる。
「そ、そ、それ、トカゲの肉なんですか～!?」

「ど、どうしてそんなもの食べようと思うのよ！　食べるってことは、あのトカゲを殺して捌かなきゃいけないんでしょ!?」

「エミリア、お前は農家の娘だったのだろう。鶏くらい自分の手で絞殺したことはないのか」

軟弱な反応を示す勇者と宮廷法術士にオルバは詰め寄るが、エミリアは目を吊り上げて首を横に振った。

「鶏とあのでっかいトカゲ一緒にしないで！　鶏は首を絞めて鉈で頭落として羽むしって血抜きしてお腹開いて内臓を取り除けばいいけど、トカゲなんて捌いたこともないし食べようとも思ったこともないわよ!!」

「お前のその微妙な逞しさはなんなんだ」

エミリアのよく分からない拒否反応にアルバートは苦笑し、エメラダはといえば、

「うぅ～、自分の食べてる肉の～生きてる姿を知らない～傲慢な貴族だと思われてもいいです～鶏が捌かれる姿は見たくありませんし～詳しい手順も知りたくありませんでした～！」

エミリアの血生ぐさい話にまた青い顔で耳を塞ぐ。

「まぁ聞け二人共。ヴァシュラーマに限らず、南大陸でトカゲ料理は牛や豚や鶏と同じくらい一般的なタンパク源なのだ。あまり拒否反応を示すな」

オルバは先程得たばかりの、ヴァシュラーマを出たら一生役に立ちそうにない知識をざっくり略して二人に伝える。

「もちろん近隣の全てのトカゲを食べようというのではない。保存の問題もあるから捕獲量の見極めと解体はヴァシュラーマのプロにやってもらう。エミリアとエメラダにやってほしいのはその後だ」

「そ、その後？」

オルバは真剣な顔で頷く。

「うむ、鱗を剝いで解体して内臓を取り出した肉を、二人の炎の法術で焼いてもらう」

「嫌よ!!」

「嫌です!!」

エメラダすら、語尾を伸ばさずに明確に拒否した。

「嫌もかかしもねぇよ。俺達もう、ラジード戦士長と話つけてきちまったんだ」

「嘘でしょ!?」

「嘘ですよね!?」

ベッドの上で怯えて身を寄せ合う少女二人に迫る壮年の男二人という極めてよろしくない構図で、話はどんどん進んでゆく。

「トカゲ共は繁殖のために移動する。だが砂漠の北側のトカゲが南側までやってきているのは、魔王軍の影響と考えて良い。つまりトカゲ共は、なんらかの方法で危険を察知して回避行動を取る知恵があるのだ」

「そ、それは分かりますけど～」

オルバの解説にエメラダは青い顔をして頷くが、まだ納得している様子はない。

「そこでだ。一度にまとまった数のトカゲを捕獲して皆で焼き肉パーティをやる。じゃんじゃん火を焚いて、煙や匂いが周辺に広がるようにな。そうすればトカゲ共は、このヴァシュラーマ周辺が自分達にとって危険な場所だって認識して、ここを避けてくれるかもしれねぇ」

アルバートがオルバの言葉を引き継ぐが、それでもエミリアは納得しない。

「そ、その効果が出るのは確かなの!? 要するに城内にいるかなりの数のトカゲをスプラッタなことにしなきゃいけないわけでしょ!? そこまでやって、もしなんの効果も無かったら、私達の後生最悪よ!? 世界のトカゲ史に歴史的虐殺者として永遠に記憶されることになるわよ!?」

「何ワケ分かんねぇこと言ってんだよ。安心しろエミリア。道すがら散々実験してきた。あいつらは同族の危機に敏感だ」

どんな実験をしてきたかは知らないが、トカゲだという肉焼き串を見せつけられてもエミリアは微塵も安心できないし、そのまま貧血を起こして倒れそうになる。

「とにかく、ドラゴニクスの狩猟や料理で生計を立てる者達に対する補償はヴァシュラーマが国として行うと言っている。焼肉用のトカゲはよりどりみどりだ。だが、今のヴァシュラーマには膨大な量の肉を焼くための燃料の備蓄が無いのだ。それなりに匂いや煙を拡散させるには、

一度に多くの肉を焼く必要がある」
「そ、それで私達ですか～？」
エメラダはもはや涙目だ。
「で、でもそんなに肉焼いてどうするのよ。焼いたってこの気候じゃ何日も持たないわよ。食べるために殺したのにそれを腐らせでもしたら、私死んだお父さんに顔向けできないわ！」
食べ物を大切にする農家出身の娘としての最後の抵抗はしかし、アルバートの一言によって無残に打ち砕かれた。
「大丈夫だ」
アルバートは野性的な笑顔を浮かべながら、肉焼き串を頬張ってみせた。
「ヴァシュラーマ国民一同、頑張って食べるそうだぜ」

「「いやあああああああああああああ！！！！！！！！！！」」
世界最強の勇者と法術士の悲痛な叫びが、夜のヴァシュラーマを震わせ、その声に嫌な予感を覚えたか、城壁外のごくわずかな数のトカゲがのそのそと砂漠の果てを目指して消えていったのだった。

※

「天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬天光炎斬」

エミリアが光を失った目つきのまま陽光を照り返す聖剣を振るいまくっているかと思えば、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいちょっといい匂い」

エメラダは炎の法術で肉焼き用に設えられた平らな岩を熱しながら、ちょっと食欲に負けそうになっていた。

もちろんオルバとアルバートも、女性二人に血生ぐさい作業を任せきりにしていたわけではなく、彼らはエミリアとエメラダとは違う場所で、同じように炎の法術を駆使して大量にドラゴニクスの焼肉を作る作業に従事していた。

初日の内にオルバとアルバートの策の犠牲になったドラゴニクスの数は、城内に残っていたドラゴニクス約六千頭のうちおよそ二千頭。

クレスティアの計算によれば三万六千人分の肉が取れる勘定になり、これはヴァシュラーマ城内の全人口とほぼ等しい。

この国を挙げた大焼肉大会には、ヴァシュラーマ国内のみならず、エミリアの後追いでヴァシュラーマの様子を探りに来たタジャ分家国の使節団まで巻き込んで、完全にお祭り状態にな

ってしまった。

調理・配膳を請け負う屈強な戦士団達が勇者の一行が量産してゆく焼肉を次々運んでは国民に振るまったり、資源が許す限り塩漬けにしたり、可能な限り燻製にしたりと一片たりとも無駄にしないよう立ち働いている。

「おお！　これは！　さすがは勇者の一行の力だ！」

城壁の補修作業を監督しながらも焼肉大会の様子が気になっていたらしいラジード戦士長は、城壁の外のドラゴニクス達がまさしく蜘蛛の子を散らすようにヴァシュラーマ城から離れていくのを確認し、満足げに頷いた。

効果が確認されたら、残った四千頭も適宜焼肉として用いることが既に決定しているのだが、少なくともそれらが終わるまでヴァシュラーマに留まらねばならないことを知ったら、エミリアもエメラダもまたぞろ悲鳴を上げるだろう。

「順番に並んでください！　数は十分にありますから！　今日中に調理するなら、生肉をお分けすることもできます！　どうか押さないように！」

ドラゴニクスの肉の配給所の一つとなった大法神教会聖堂では、一聖職者として満面の笑みを浮かべたクレスティア・ベルが、やってくるヴァシュラーマ国民に焼肉を配っていた。

もちろん彼女自身、教会に協力する傍らで三食ドラゴニクス料理にありつけるというおこぼれにあずかっているため、仕事ぶりは真剣そのものであった。

「生肉を持ち帰った皆さんは、できるだけ竈から煙が上がる料理をしていただくようお願いいたします！　はい、お子さんの分もですね、どうぞお持ちください」

南大陸人にとっては牛豚鶏と同じくらいポピュラーかつ需要のあるドラゴニクスの肉を求める国民の数は、まだまだ減りそうにないのだった。

※

「もう私二度とこの国来たくない!!」

エミリアはラクダに揺られながら、修復されたヴァシュラーマの城門から出るなり、半泣きになって叫んだ。

火炎道を抜けるための案内の戦士がいる前で失礼な話かもしれないが、彼もさすがに苦笑せざるを得なかった。

尾と頭と四肢を切り落とされ鱗を剝がされたドラゴニクスの生肉姿と焼肉姿が、十日以上に及ぶヴァシュラーマ滞在中にエミリアの脳裏に文字通り焼きついてしまっていた。

小国とはいえ六千頭ものトカゲを国を挙げて三日間かけて食肉加工した末に敢行された大焼肉大会の効果は焼肉大会終了の一週間後に確認された。

繁殖を終えて大砂漠を再び横断するドラゴニクスの大群は、ヴァシュラーマの遥か南方を通

ったことが観測され、オルバとアルバートの策はエミリアとエメラダに深いトラウマを刻んでしまったこと以外には結果的に大成功に終わった。

オルバとしては、騒動終結の後に顔を合わせたクレスティア・ベルが、妙に得意げな顔をしていたのがなんとも釈然としないが、結果的に彼女のトカゲ料理に対する異様な熱意が事態解決のヒントになったと言えなくもないので、文句も言えない。

大焼肉大会のせいで案内の戦士はもちろん、エミリア達の全身にもすっかり焼肉の匂いが染みついてしまい、時折砂漠の中に現れるはぐれドラゴニクスと顔を合わせると、脱兎の勢いで逃げるようになってしまった。

「匂いが街に染みついたせいで～、トカゲが近くからいなくなっちゃって～今後ヴァシュラーマの皆さんが～肉が取れずに困ることがないといいんですけど～」

エメラダがそんなトカゲを見て苦笑する。

「それでも国が滅びるよりはずっといいです。国民全員、皆さんには本当に感謝しています」

案内の戦士の言葉はある意味救いだが、それでもやはりエミリアは今後できるだけヴァシュラーマの地には足を踏み入れまいと固く心に誓う。

そんなこんなでヴァシュラーマを出て一日ほど北に行った日の夜。

「……！　皆さん、ここで待っててください！」

案内の戦士が、間もなく火炎道に到達するといった所でラクダを止めて一人身を伏せながら

砂漠を先に進み、数分で慌てて戻ってきた。
「ち、ちょっと来てください！」
「なんだ、どうした？」
「何を慌てておるのだ」
アルバートとオルバがラクダを降りて案内の戦士の先導で先の砂丘に向かったところ、
「「なっ!!」」
そこに広がっている光景を見て愕然とする。
「「え!?」」
後から追いついてきたエミリアとエメラダも、同じものを見て衝撃を受けた。
そこには、既に干からびかけている悪魔らしき死体が無数に転がっていたのだ。
らしき、というのが、殆どが原型を留めていないので、生前の正確な形状が分からないためである。
中にはマラコーダ軍の主力であるマレブランケ族のものと思しき爪が散見されるが、かなり大型の悪魔の腕だけが転がっていたりと、相手が悪魔であっても目を背けたくなるような有様であった。
「こ、これは一体～……」
「マラコーダ軍の悪魔……なの？　誰がこんな……」

エミリアが息を呑んだそのときだった。
砂丘の向こうに、この一週間嫌というほど見た生き物が一匹、つぶらな瞳をこちらに向けて顔を覗かせているのをその場にいる五人は確かに見た。
「あいつらが、やったってのか……？」
「まさか……だがしかし」
「いえ、でも、他に考えられません……」
自然の猛威。
五人の脳裏を過ったのはその一言だった。
南大陸の人間世界を蹂躙したマラコーダ軍の精強な悪魔が、エンテ・イスラの大砂漠に息づく自然の猛威に一捻りで潰されたのだ。
その厳然たる事実は、今や世界最強の呼び声すらある勇者エミリア一行を戦慄させた。
「本当に～恐ろしいトカゲだったんですね～……」
「悪魔に同情する気はねぇが……まさかこいつらも、トカゲに踏み潰されて死ぬとは思ってもみなかったろうなぁ……」
「……クレスティアの聖務評価を、少し上げておこう……」
エメラダとアルバートとオルバは、この炎天下に顔を青ざめさせながら口々に何かを呟き、
エミリアもまた、

「……やっぱり、二度と来ない」

心の中の誓いを、改めて声に出す。

砂丘の向こうのドラゴニクスは、こちらの匂いに気づいたのか、すぐに身を翻して砂丘の向こうに隠れてしまい、後にはただ砂と空と熱だけが残ったのだった。




悪魔と勇者と女子高生
-A happy new year-

「うー……寒っ！」

東京の冬の夕空から吹き降ろす木枯らしが容赦なく街を襲い、屋外でその直撃に晒された青年は、首をすぼめて身震いした。

「頑張ってください魔王様、あと一時間で上がりです」

同じく隣に立つ背の高い男が、白い息を吐きながら青年を励ました。

魔王、と呼ばれた黒髪の青年は、寒さにかじかむ左手に巻かれた安物の腕時計を見て頷く。

「あと一時間かぁ……もうちょっと着込んでくれば良かった」

あと一時間、という情報も、まったくありがたくないらしい。

そんな彼を慰めるように背の高い男が言った。

「今日の仕事が終わればコートでもセーターでも買うことができます」

「この服、見た目と違って全然暖かくねぇんだもんなぁ。なぁにがサンタ服だっての」

二人の男は、赤と白のツートンの上着にズボンを履き、先端にポンポンのついた赤い三角帽子を被っていた。

『サンタクロースの衣装』というやつだ。

北極圏からやってくる老人の衣装で、白いファーがついていて一見暖かそうに見えるが、その実布地は極端に薄く、伸びの悪いポリエステル製である。

「所詮季節アルバイトの制服です。ポリエステル製の張りぼてですよ。魔王様はサイズが合っ

ているだけまだマシでしょう」
「芦屋、背ぇ高いもんなぁ。なんか、その服着ててもサンタってのが無理あるよな」
背の高い男を『芦屋』と呼んだ黒髪の青年の胸には、手書きで『真奥』と書かれた間に合わせの名札が留められていた。
「サンタクロースは元を辿ればこの世界の人間の聖人でしょう。所詮、高等悪魔である我々とは相容れぬ存在」
「まぁそういう言い方すりゃそうかもな」
「それよりも、今日のアルバイト代を何に使うかを考えるべきです。衣類を充実させるのか、それとも思い切ってストーブを購入するのか」
「高等悪魔の話題じゃねぇなぁ。ストーブ買うったって灯油のランニングコストも……あ」
真奥と芦屋という名らしいサンタコスチュームを纏った二人組は、前方からやってくる人影に目を止めて、かじかんでいかめしくなっていた顔にパッと笑顔を浮かべて声を張る。
「いらっしゃいませー！　クリスマスケーキはいかがでしょうかー！」
「ショートケーキとチョコレートケーキをお選びいただけますー！」
「いかがですかー」
声をかけられている背広にコート姿の男性は、二人を一顧だにしなかった。
そのまま二人の横の自動ドアをくぐって、二人が背にしているコンビニエンスストアの建物

の中に入っていった。
自動ドアが開閉するわずかな間、店内から聖夜を商業的に祝うＢＧＭが聞こえ、すぐに途切れた。
二人は笑顔を凍らせて、深々とため息を吐く。
「売れねぇなあ」
「売れませんね」
二人の目の前には会議用の長卓に白いクロスをかけ、無理やり飾りたてた即席の売り場があり、聖夜を祝うための箱入りホールケーキが重ねられていた。
二人は真冬の屋外で、コンビニエンスストアの季節商品であるクリスマスケーキを売る仕事に従事しているのである。
クリスマス当日、十二月二十五日の夕刻の東京の片隅でのことだった。

※

「今何時だ？」
「ええと、もうすぐ十八時ですね」
先程も確認した時間をもう一度確認して、真奥は眉根を寄せた。

「……もう無理じゃねぇか？　ケーキ買うような家はもうとっくにどっかで買ってるだろ」
「そうですね」
芦屋も渋い顔だ。
「風強いし、俺ここに来るまでに二、三軒ケーキ屋見たし……」
コンビニのケーキが悪い、とは言わないが、専門店であるケーキ屋のそれと比べるとどうしても大量生産感は否めない。
「値引きの時間まで一時間か……確かに、これ以上は無理かもしれませんね」
店内の時計をガラス越しに見透かしながら、芦屋も同意する。
不思議なもので、祝うべき聖なる日のクリスマスは十二月二十五日であるにも関わらず、どうもこの国では前日の二十四日の夜の方が雰囲気が盛り上がるらしい。
それは商売の世界でも例外ではなく、このケーキはクリスマス当日の今日の夕方十八時から値下げされるそうだ。
「それに、結構頑張ったと思うぞ俺ら。今日だけでホールケーキ三十個は売ったろ」
真奥は臨時売り場に残ったケーキの箱を見る。
「それだけに、残り七個……悔しいですね」
「売り切りたいのはやまやまだがな。一個は俺達で買うか？」
「店長はそこまでしなくていいとは仰っているのですが……」

芦屋は不安げな様子でコンビニの店内を窓越しに盗み見る。
カウンターでは今回の仕事を斡旋してくれたこの店のオーナー兼店長である中年男性がレジのお金をカウントしているところだった。
中肉中背に通常の制服姿なのだが、頭には二人と同じサンタ帽子を被っているのがなんともいえぬ哀愁を誘う。
店舗のルールで、どうしてもそれだけは被らなければいけないらしい。
真奥も芦屋の視線を追い、複雑な顔で頭の上の帽子を直す。
「でも飛び入りの俺にバイト代出してくれてんだから、売れ残ったりしたら申し訳ねぇしよ」
季節商品には店舗ごとのノルマがあり、達成できない分は社員が自腹を切るというのも、有名な話だ。
二人にどうこうできるものではないが、話によるとケーキ以外にもフライドチキンとおでんと肉まんにそれぞれノルマがあるらしく、せめて単価が高いケーキだけでも、飛び入りで稼がせてくれている店長の負担を軽くしてあげたい。
「ところでお前、ここのコンビニの店長とどういう知り合いなんだ？」
「以前登録していた派遣バイトの派遣先がここだったのです。前々からクリスマスケーキを売る頃に連絡してくれと言われていて」
「へぇ。人脈だなぁ」

「魔王様こそ、どうしてクリスマスなどというかき入れどきにアルバイトのシフトが空いてしまったのですか？」

芦屋に魔王と呼ばれている真奥には、本業にしているアルバイトがある。

自宅アパートの近くにあるファーストフード大手、マグロナルドだ。

「単純に、曜日の巡り合わせ。特に冬休みだから学生のバイトも多いし、今日は本当にたまたま空いてた」

「そういうことでしたか。折角のお休みなのにご足労をおかけして申し訳ありませんでした」

「いーって、おかげでこうして二人分バイト代稼げるんだしよ。それに、俺達はクリスマスだからって浮かれて出歩くような立場でもねぇだろ？」

頭を下げる芦屋に、真奥はひらひらと手を振る。

「それは仰せの通りです。愚かな人間共が享楽にふける間、我々魔王軍の世界征服の下地を着々と整えるためにも、こういう日々の稼ぎの積み重ねこそが……！」

「まぁ、愚かな人間共が享楽にふけってくれるそのお金から、俺達のバイト代も出てるわけだけどな」

突然大演説を始めようとする芦屋をうるさそうに正論で遮る真奥。

芦屋は拍子抜けしたように黙り込み、そして悲しげに抗議した。

「……それを仰らないでください」

「事実はしっかり認識しなくちゃならんぞ」
「現実逃避をしたい夜もあります」
「クリスマスだからか？」
「クリスマスだからです！」
「クリスマスだって現実の一部だぞ」
虚しい問答を重ねる真奥と芦屋。
「今の俺達は、戦う力も、元の世界に帰る力も無い。世界征服を目指した魔王サタンも、悪魔大元帥アルシエルも、今はしがないケーキ売りの真奥貞夫と芦屋四郎だ」
真奥の、心の深いところから漏れ出た吐息は、悪魔の心から出たとは思えぬ白さを帯びて、夕刻の星一つ見えない空に昇っていった。
地球のどこでもない人間の世界、エンテ・イスラを征服するのに失敗し、流れ流れてやってきた異世界の日本で過ごして半年あまり。
真奥貞夫、という日本人の青年に身をやつしている魔王は、弱音を吐いたことがなかった。
それなのに、弱音ともいえる己の言動を恥じた芦屋は俯いてしまうが、
「なぁ、でもよ！」
突然真奥に背を叩かれ、芦屋は目を白黒させる。
「ケーキ売りの魔王って、マッチ売りの少女より強そうじゃね？」

そんなカラっとした笑顔で見上げてくる真奥。
つまらんことで凹むな、ということだろう。
芦屋は苦笑して売り物のケーキを見る。
「売り物のケーキを食べれば、望む夢でも見られますか」
「その場で死ぬことはねぇだろうが、店長からはガッツリ怒られるだろうな」
「まったく高等悪魔の話題じゃありませんね」
それで、手打ち。
魔王サタンと悪魔大元帥アルシエルは、その瞬間真奥貞夫と芦屋四郎に戻って、ちょうど駅の方から歩いてくる、ＯＬと思しき髪の長い女性の姿を捉えた。
どうやらコンビニに用があるらしく、力強い歩調で真っ直ぐこちらに向かってくる。
「クリスマスケーキ、いかがでしょ……」
先程のサラリーマン氏以上にこちらに見向きもせず、女性はコンビニの中へと消えた。
「いらっしゃいませー」
自動ドアが閉まる直前に聞こえた店長の眠たげな声に合わせて、
「……いらっしゃいませー」
「いらっしゃいませー……」
真奥と芦屋も、誰の耳にも届かない挨拶を口に出す。

「ところで魔王様」
「ん？」
「餅、買いますか」
「餅？」
また唐突に芦屋が話題を振ってきた。
「はい、もうすぐ正月ですし」
「別に買ってもいいけど……正月はなんかするつもりなのか？」
真奥には、金銭的な意味でもアルバイトのシフト的な意味でも、正月などという概念は無かった。
「日本では、一年の計は元旦にあるそうです。日本に漂流して数ヶ月、貧しさばかりが先に立った生活を送ってまいりましたが、ここは一つ来年一年をより良い年にするために、景気づけにと思いまして」
餅一つ買うのにずいぶん大層な理由をつける芦屋。だが真奥も、腕を組んで頷く。
「あー……まぁそうだな。おせちとか買うほど余裕ねぇし」
「あ、おせちの予約受けつけはもう終わっていると店長が」
「だから買わないって」
「あとは二月に恵方巻き販売をするらしいので、よろしければ魔王様もご一緒にいかがですか」

「お前は魔王を恵方巻き販売に誘う自分に疑問を抱かないのか。それにまだ年明けてねぇし、来年のことを言うと鬼が笑うぞ」
「魔王様を笑う不届きな鬼など、私が抹殺します」
「福豆でも投げつけとけ」
真奥がやたらと季節商品の販売に誘いたがる部下をいなしていると、
「つと、ありがとうございましたー」
「ありがとうございましたー」
丁度先ほど入った女性がコンビニから出てきた。
二人は私語をやめてその女性に向けて悪あがきを始める。
「いかがですか、クリスマスケーキ、チョコレートとストロベリーショートケーキを……」
と、
「ケーキ……」
歩き去ろうとしていた女性が、はたと足を止めた。
手に提げたビニール袋の縁からレトルトカレーの箱が顔を覗かせているのを視界の端に見ながら、真奥はここぞとばかりに売り込みを始める。
「いかがですか、クリスマス限定ケーキです」
中には追撃すると去ってしまう客も多くいたが、この女性は幸いにしてこちらに興味を示し

てくれた。
「店内にあるのとは違うんですか？」
「基本的には同じですが、サイズがS，M，Lと選べます」
芦屋も加勢すると、
「ふーん……」
女性は三種類のサイズを一通り眺める。
長い髪を掻き上げながら吟味するような視線。
真奥と芦屋は、そこで追撃をやめた。
必要以上に売り込んでしまうと、やっぱりいいわ、ということになりかねない。
しばしの息詰まる緊張の後、
「……たまには、いっか」
嬉しい言葉が、形の良い口から漏れて真奥と芦屋は自然と笑顔になってしまう。
「このSのチョコレートケーキ一つください」
財布を取り出しながら言う女性に、
「「ありがとうございます！　千二百円です！」」
真奥と芦屋は声を揃えて言い、丁寧にケーキの箱を袋に入れて手渡し、千二百円ちょうどを受け取った。

女性客も白い息を吐きながら、かすかな笑顔を見せて頷いた。
そして、思いがけない一言を口にした。
「どうも。メリークリスマス」
二人は一瞬呆気にとられる。
女性は返事を期待してはいなかったようで、こちらの反応も待たずに身を翻し、さっさと歩いていってしまった。
「……どうも……」
「め、メリークリスマス……」
遠ざかる足音に今更届くはずはないのだが、それでも真奥と芦屋はそう呟かずにはおれなかった。
「……売れたな」
「粘ってみるものですね」
「……十八時過ぎても、なんとかなるんじゃないか？」
「どうでしょう」
芦屋はすぐには賛成しない。
第一、二人の勤務時間は十八時までなのだ。
「いや、さっきのOLみたいに今日も普通に働いてたかなんかでこれから帰りの人もいるはず

だ！　もうちょい頑張ろうぜ！　なんだっけ、ここの最寄駅」
だが真奥は今のお客のおかげで火がついてしまったらしい。
芦屋は記憶を辿り、
「永福町駅ですね」
自分達のアパートから電車で三駅の、京王井の頭線の急行停車駅の名を挙げた。
「よし、そこの今日の終電まではなんとか頑張ろうぜ！」
「魔王様、私達だけでは決められません。店長の判断を仰がなくては。それに終電まで粘っては、我々が帰宅できませんよ」
「それもそうか！　よし、じゃあ全部売れるように、帰れるぎりぎりまで粘っていいかちょっと聞いてみるわ。店長！」
真奥は勢い良く店内へと飛び込んでゆく。
気合が入ったのは結構だが、勤務の終わり時間が見えなくなるのはこの寒空の下だと辛い。
芦屋は、京王線笹塚駅から徒歩五分の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚の我が家までの帰り道を思い、また白いため息を吐くのだった。

※

「あー寒かった。明日雪になったりしなきゃいいけど」
疲れた声で、女性はマンションの自分の部屋の鍵を閉めた。
夕食にするつもりだったレトルトカレーとは別に、気まぐれで購入してしまったホールケーキの箱をリビングのテーブルに置いて、コートを脱ぐ。
「家で見ると、Sサイズって言っても結構大きいわね……まぁ今日食べ切る必要は無いか」
自炊を心がけなければいけないとは思っているのだが、なかなかどうして、インスタント食品でも、今まで自分が食べてきたものより数段美味しく、つい仕事上がりにはふらふらとコンビニで買ってしまう。
危機意識が薄れている、と、自分でも思う。
手早く夕食を終えて、ティーバッグで紅茶を淹れてから、ホールケーキを箱から出して、切り分けもせずに直接フォークを突き立てた。
「うん、美味しい」
ケーキを食べ慣れているわけではないが、甘いお菓子を自分で自由に購入できる環境は、彼女の人生の中で未だかつて無いことだった。
つまるところ、何を食べても、彼女にとっては美味なのである。
「千二百円……か、あっちだといくらだろ」
彼女は半分ほど食べ残したホールケーキをぼんやり眺めながら、遠い、自分の故郷に思いを

馳せた。

剣を手に、大勢の悪魔と命を賭けた戦いを繰り広げていたころ、自分がこんなことになるなどと想像すらできなかった。

「梨香の言ってた通りね。周りが浮かれてるせいで、一人だと本当に心が寒くなるわ」

聖十字大陸エンテ・イスラの救世の勇者エミリア・ユスティーナは、日本人、遊佐恵美の言葉でそうぼやき、残ったケーキにラップをかけて冷蔵庫にしまったのだった。

※

「すっかり世の中お正月ムード一色ね」

「そうだねー、毎年思うけど、みんな切り替え早すぎて逆に風情無いわ」

クリスマスから一夜明けた十二月二十六日。

昨夜までのクリスマスムードが嘘のように、サンタとトナカイとクリスマスツリーが消え失せ、それに取って代わるように門松と鶴亀と正月商戦のポスターが街を席巻していた。

仕事を上がった夕方。

遊佐恵美は同僚で友人の鈴木梨香と共に、仕事上がりのお茶をしていた。

梨香はカフェの窓から見える年末商戦真っ只中の新宿の街を眺めて苦笑する。

「うちの冷蔵庫にはまだクリスマスケーキ残ってるってのにさ」
「うちも……Sサイズのホールケーキって、結構大きいのね。悪くなったりしないかしら」
半分食べてから気がついたのだが、昨夜恵美がコンビニで買ったケーキは、一人で食べきるにはかなり無茶な賞味期限が設定されていた。
「この季節だもん、冷蔵庫入れときゃ大丈夫でしょ……あーでも今日中に食べないとなぁ」
「え？　どうして？」
「や、一応年末だし？　実家帰っとかないとまずいかなって」
恵美はふと、職場のシフト表を頭に思い浮かべる。
「あ、だから今日がシフト最後なんだ」
「ん……まぁね。恵美は？」
すこしあいまいに頷いた梨香が尋ね返すと、
「私は三十一日までがっつり入ってるわよ。年明けは三日からかな」
恵美はことともなげに答える。
「うへぇ、働くねぇ。恵美は里帰りとかしないわけ？」
「ん……まぁね」
したくてもできないのだが、それを言っても始まらない。
梨香は梨香で実家のことを語り出す気配もなく、しばし二人の間に奇妙な沈黙が流れる。

そのとき、カフェの電話が鳴って、店員がレジまで走っていくのが見えた。
携帯電話ドコデモの関連会社で携帯電話関係のテレアポを生業にしているせいで、電話にはつい反応してしまう恵美と梨香。店員の背中をなんとなく目で追ってしまう。
どうやら近くの会社のケータリング注文のようだが、それで思い出したのか梨香が顔を上げた。
「でも、なんか今日は問い合わせ少なくなかった？　テレアポの電話って、年末年始こそもっと激しくかかってくるかと思ってた」
「やっぱり会社がお休みになるのが大きいんじゃないかしら。それに誰かが、三が日は苦情が結構多いって言ってたわよ」
途端に梨香は顔を顰める。
「あー、そっか。あれか、通信障害」
「みんなが一斉に『あけおめメール』？　とかいうのを送るからなんだってね？　でも、お年始の挨拶ってニューイヤーカードみたいなのがあるんでしょ？　なんでいちいちメールなんかするのかしら」
「え？　ニューイヤー、何？」
梨香に尋ね返されて恵美は一瞬慌てる。
「あ、えっと……その、年賀状？」

言い直した恵美の言葉を特に疑う様子のない梨香は肩を竦めた。
「今どきなかなか出さないっしょ年賀状なんか。メールの方がずっと手軽だし、私も今年は一通も出してないよ」
「えっ⁉」
「え？」
「出してないって、もう出しておくものなの？」
恵美は衝撃を受ける。
友人は多くはないが、世話になっている人間には出してみたいと思っていたのである。
この国の通信システムは故郷とは比べ物にならないほど整っており、離島でもない限り日本国内なら二日もあればどんな信書や荷物も届くのだ。
だから三十日くらいになったら年賀状にチャレンジしてみようと思っていた恵美は梨香の言葉に呆然とする。
「いつも郵便局がCMとかで言ってるじゃん。一日に届くようにしたいなら、二十五日までには出さないとダメだよ？」
「そ、そうだったの……」
「あれ？　今までそういうのこだわってこなかったタイプ？」
「……っていうか、知らなかった。今からじゃ間に合わないよね。梨香にも出そうと思ってた

んだけど」

「面と向かって言われてもね。どうしてもっていうなら年明けに直接頂戴」

その後しばしとりとめのないやり取りが続き、気がつけば夜の七時を回っていた。

二人はカフェを出ると、夜の冷え込みに身を竦ませる。

「このまま一緒にご飯って言いたいとこだけど……ごめんね、家ではクリスマスケーキが私の帰りを待ってるんだ」

梨香が残念そうにそう言い、恵美も頷く。

「私も同じよ。まるで色気のない話だけどね」

「おやおや、私を待ってるのがケーキだけだと思って甘く見んなよ！」

梨香はにやにやしながらふんぞり返る。

「食べかけのローストチキンも待っててくれてるのだぜ！」

そんなことだろうと思っていた恵美は、特にリアクションもしない。

「実家に帰るまでに食べ切れるの？」

「大丈夫！　それ以外はもうめんつゆとチューブのワサビくらいしか入ってないから、それくらいは年越しさせても悪くならないし！」

どこまでも色気のない話をしながら、やがて二人は新宿駅に辿り着く。

ここから恵美は京王線。梨香は山手線で帰宅する。

「んじゃ、また年明けにね！　良いお年を！」
師走もラストスパートに入り、人波はせかせかとうねる。
年の瀬の荒波に揉まれながら、梨香が早口で言うと、恵美は一瞬遅れて答えた。
「あ、うん、来年もよろしくね！　気をつけて帰ってね！」
「あいよー！」
ぎりぎり恵美の声は届くが、梨香はすぐに雑踏に呑まれて見えなくなってしまった。
恵美は軽く掲げた手を下ろし、人波に流されないようにしながらぽつりと呟く。
「良いお年を……か。明日の命も知らなかった頃から比べたら、冗談みたいな話よね」
魔王サタン率いる悪魔の軍勢と戦っていた時代は、まさしく明日をも知れぬ日々だった。
実際命に関わる怪我をしたこともある。
その日々と、現在を過ごしている自分がとても同じ自分とは思えなくて、恵美は時々不安になる。
こんなことをしていていいのだろうか、と。
恵美は、いや、聖十字大陸の勇者エミリア・ユスティーナは魔王城での最後の決戦で、取り逃がした魔王を追ってこの国に流れ着いた。
仲間も無く、地縁も無く、この日本という異世界に流れ着いた魔王を討伐するために毎日生きている。

魔王と自分は、ほとんどタイムラグなしにゲート転移した。
恵美自身、ゲートを自分の力で制御して来たわけではないが、航跡を追っている手ごたえは感じていたし、それで自分が東京に流れ着いたなら、魔王もこの近くにいるはず。
万が一東京でなかったとしても、魔王がなんらかのアクションを起こせば、北海道から沖縄まで、自力で移動できるくらいの貯えと余力は残しているつもりだ。
今はとにかく、忍耐の時。
恵美は新宿駅の京王線のホームで、一番ホームに停まっていた快速列車に乗り込む。
普段なら特急や準特急の来る三番ホームに行くところだが、時刻表の巡り合わせでこの方が一本だけ早く帰れるのだ。
既に帰宅ラッシュが始まっており、車内はなかなかに混雑していた。
もとより座るつもりもなかった恵美。
シート前の吊革がなんとか空いていて、後から乗ってくる乗客に押されながら発車時刻を待ち、やがて電車が発車した。
京王線の新宿駅のホームは地下にあり、二分ほど地下を走った後、次の笹塚駅の少し手前で地上に出る。
恵美はぼんやりと窓の外を一定の速度で通り過ぎるトンネル内の蛍光灯を視線だけで追っていたが、

『急停車いたします！　お立ちのお客様……』

突如車内アナウンスが流れ、そのアナウンスが流れ切らないうちに電車が急ブレーキをかけた。

予期しない急制動に、車内の人間が一斉に進行方向に引っ張られ、恵美も思わずバランスを崩しそうになる。

電車はそのままトンネル内で停車してしまい、回線が開きっぱなしの車内アナウンスのスピーカーからは運転席で何やら色々な計器が音を立てている様子が伝わってくる。

『……えー、お客様に、お知らせいたします。只今……』

只今、で、車掌と思しき声がしばらく間を開ける。

背後で無線機のような声が何かをがなっているのが聞こえる。恐らく急停車の要因を、車掌も現在進行形で把握している最中なのだろう。

『えー、只今、緊急停止信号を受信致しました。この先、明大前駅で、先を行く電車、停まっておりますため、この電車、緊急停止いたしました、えー……』

また車掌が何かを聞く気配。

恵美の周囲では、耳につけたイヤホンを外す若者や、突然携帯電話を取り出す者、全く動じずに手に持った新聞を読み続ける者など反応は様々だった。

ただ、反応を起こした者の顔には、一様に一つの感情が見て取れた。

こんな時間に、迷惑な。

帰宅ラッシュの時間に新宿に近い特急停車駅でなんらかの事故が起こっていたら、それこそ後の電車は上り下り関係なく全てダイヤが乱れるだろう。

そうすれば、急行列車が各駅停車に変わったり目的地に到達する前に降ろされたり、最悪車内にしばらく缶詰めということもあり得る。

恵美の乗った電車はまだトンネル内におり、携帯の電波は入らない。

電車が止まったくらいでこの国の人々はパニックを起こしたり文句を口に出して言ったりはしないが、携帯電話という時間潰しツールが機能しないときは不満の進行速度が早くなる。

車内は混雑しているうえに容赦なく暖房がかかり、発車からわずか数分でかなり蒸し暑くなっていた。

停車から五分が経過し、車内放送では電車が動かないことの理由を車掌が繰り返し伝えては詫びの言葉を述べている。

と、そのときだった。

「あのー……」

恵美は、すぐ傍で上がった声に気づいて、思わずそちらを向く。

一瞬自分が声をかけられたのかと思ったが、どうも違うようだ。

声を上げたのは、恵美の前に座っていた制服姿の女子高生の二人組のうちの一人。

小さくツインテールを作っているリボンの女子高生と友人らしいショートボブの女子高生は、恵美の隣に立っている人物に顔を向けていた。

リボンの女子高生が混雑した車内で、わずかに腰を上げる。

「ここ、座ってください」

どうしたのだろう。

恵美は自分の隣を見ると、そこには恵美より少し背の低い老婦人が立っていて、吊革に掴まりながらも顔が下を向いている。

リボンの女子高生の声に老夫人が顔を上げた。すると、電車内の蛍光灯の下、という状況を差っ引いても、その顔色は不自然に白かった。

混雑して蒸す車内で、老婦人は気分が悪くなってしまったのだろう。

「あ、でも……」

だが老婦人は、女子高生の申し出を断ろうとする。

恵美自身、何度か経験があるのだが、お年寄りに席を譲ろうとすると半分くらいは断られてしまう。

それは目的地が近いとか、実際に立っていたいとか、譲られた側にも複雑な矜持とか色々あるのだろうが、断られてしまうと譲ろうと思った者にとっては座っていたのに立つ瀬がないというのも本当のところだ。

「大丈夫です、私、次の笹塚駅で降りちゃうんで」
リボンの女子高生もその気配に気づいたかそう言い添えるが、それでも老婦人は煮え切らない。
「私もそんなに先じゃないし……」
などとぼそぼそ遠慮がちなことを言って、女子高生の好意を断ろうとする。
女子高生は困ってしまった様子で隣の友人と顔を見合わせた。
そのときだった。
「お婆さん、若い子がそう言ってくれてんだから座んなよ。本当に具合悪そうだし」
老婦人から見て恵美の反対隣にいる中年男性が、老婦人を促したのだ。
それでもまだ老婦人が逡巡する気配を感じ取った恵美もまた、思わず口を開いていた。
「まだ動きそうにないですし、降りる駅が近くても座らせてもらった方がいいですよ」
「……」
老婦人は両隣の恵美と中年サラリーマンを一度だけ交互に見ると、
「……すいません」
そう言って、リボンの女子高生が空けた席にゆっくり腰を下ろした。
「お婆ちゃん大丈夫？」
ショートボブの女子高生が、老婦人の手を取って腰を下ろす手伝いをする。

「どうもありがとうございます」
老婦人は全員に聞こえるようにそう言うと、持っていたバッグからハンカチを取り出して口を押さえ、少し前かがみになる。
やはり相当気分が悪くなっていたのだろう。
「すいません、ありがとうございます」
リボンの女子高生は恵美と、サラリーマンに小さく会釈をして老婦人と場所を入れ替わった。
「お婆ちゃん、大丈夫？　駅どこですか？」
座席ではもう一人の子が老婦人の背をさすりながら尋ねる。
「……永福町……」
恵美は目を見開き、女子高生二人はまた困ったように顔を見合わせた。
リボンの子は次の笹塚で降りるらしいし、もう一人も乗り換えには付き合えないのだろう。
永福町に行くには明大前駅で別の路線に乗り換えなければならないのである。
「私、永福町まで行くから」
もうここまで来たら乗りかかった船である。
恵美はさほど考えることなく、リボンの子にそう声をかけていた。
「……お願いできますか？」
「まぁ、できる範囲でね」

重病人というわけではないからあまりおせっかいを焼きすぎてもいけない。
そこに予防線を張った上でそう言うと、
「かお、このお姉さんが……」
「そか、良かった」
老婦人に気を使わせないためか、二人は小声で言い合うと、恵美に揃って目礼した。
恵美は首を小さく横に振って、そこで会話が終わる。
『大変お待たせいたしました、電車発車します、お立ちのお客様、ご注意ください』
まるでその瞬間を見計らっていたように、電車がゆっくりと動きはじめる。
ようやく地上に出ると、車掌の乗り換え案内と、ダイヤ乱れによる車間調整、そして、
『電車内でのお客様同士のトラブル』
という、誰もが遠慮なく『迷惑！』と思える内容の緊急停止の原因に関する説明があった。
「ささちー、バッグ、これ」
笹塚駅が近づいてきて、女子高生二人が降りる準備を始める。
リボンの子が席を譲る際にショートボブの子に鞄を預けていたのだろう。
ショートボブの子が鞄を持ち主に返すと、恵美と目を合わせる。
恵美は頷いて、彼女と位置を交換し座席に腰を下ろした。
二人はもう一度恵美に小さくお辞儀をすると、笹塚の駅で降りる客の波に呑まれてすぐに見

えなくなった。

恵美が座席の後ろの窓から外を振り返ると、ショートボブの子は向かいのホームに来ていた各駅停車に乗り換え、リボンの子はこちらを気にしつつ階段の方へと向かっていた。

その後、通常の倍以上の時間をかけて明大前に辿り着いた電車から、恵美は老婦人を伴って下車する。

ふと車内を振り向くと、あのサラリーマン氏が鷹揚に恵美達がいた座席に腰を下ろしているのが見えた。

最後の一言以降こちらを気にしている様子はなかったが、それでもドアが閉まる瞬間目が合ったのは気のせいではないだろう。

外気に触れて老婦人も大分元気を取り戻したようで、恵美にしきりにお礼を言いながら、帰りついた永福町の駅で別れた。

「少なくとも……」

老婦人と別れて家路を辿る道すがら、恵美はこの数十分あまりのことを回想する。

二人の女子高生と、サラリーマンが、見知らぬの老婦人のために心を砕いた、ほんの少しだけ、心が温かくなる時間。

「まだまだ……魔王の影響は東京には及んでなさそうね」

年の瀬に起こったちょっとしたトラブルの中で触れた人の優しさに、ほんの少しだけ浮き立

つ心を抱えて、恵美は冬の帰り道を歩いていった。

※

笹塚駅の改札を出てガード下のモールを少し歩いたところで、携帯電話にメールが入った。
『出発するまで見てたけど、あのお姉さん、ちゃんとお婆さん送ってくれそうだったよ』
友人の東海林佳織からのメールを見て、リボンの女子高生、佐々木千穂は嬉しそうに顔を綻ばせた。
最初は余計な気の使いすぎかと思ったが、サラリーマンの男性とOLのお姉さんのおかげで、お婆さんに無事席を譲ることができた。
自己満足かもしれないが、間違った判断ではないと思う。
『そっか、良かった』
千穂は立ち止まって壁際に寄ると、短くメールを返す。
するとすぐに佳織から返信。
『今日は買い物付き合ってくれてありがとね。ところでさ、ささちー、年明けヒマ？　初詣一緒に行かない？』
「……初詣かぁ」

クリスマスが終わったばかりで気が早い気もするが、そんなことを言っても正月はすぐそこだ。

笹幡北高校に入学して、もう一年近くが経とうとしている。

高校受験が終わってしばらくは先のことを考えなくていいと思っていたのに、これではすぐに大学受験で悩む日々を迎えてしまいそうだ。

『予定無いよ。一緒にどっか行こうか』

千穂は慣れた手つきで携帯電話を操作し返信しながら、帰りがけに母に頼まれていた買い物をするべく、駅前のスーパーへ向かったのだった。

※

「かおー！　かおどこー!?」

千穂は声を張り上げるが、一度はぐれてしまった友人の姿はなかなか見つからない。

何せ立ち止まることすら容易ではないこの人ごみである。

千穂は川に流される木の葉のように、くるくると回転しながら佳織の姿を探すと、

「ささちー！　前！　前！」

ようやく応答があった。

この状況でどうやってそこまで先行したのか、佳織が後ろ向きに歩きながらこちらに手を振っていた。

「いた！　今行く！」

「はいよーうわっ!!」

後ろ向きに歩いている佳織は躓いたのか、バランスを崩して頓狂な声を上げる。

千穂が「危ない」と思うより早く、

『危険です、列に合わせて前方へゆっくりお進みください！』

人の川の外から拡声器を通した指導が飛ぶ。

千穂が拡声器の方を見ると、一段高い所に立っている警備員の男性が、めまぐるしく動く人の川の隅々まで気を配っているのが見えた。

お正月なのに、大変だなぁ。

千穂は心からそう思うが、ふと油断すると自分も後ろから押されて倒れそうになってしまう。

千穂は細心の注意を払いながら、やや前方に流されていた佳織と三分後に合流した。

「やあっと会えたささちー、マジぱないねこの人の数」

興奮したような佳織の言葉に千穂も頷く。

「でも私達もその中の一人なんだよ」

「やー、これいつになったらお参りできるんだろーね、全然前見えないや」

新年、一月一日。

一年の幕開けに相応しい抜けるような晴天の下、東京都杉並区の大宮八幡宮の表参道は、集まった参拝客でごった返していた。

年末に佳織と初詣に行く約束をしてから、折角なら大きな神社に行こうと考え、当初は明治神宮が候補地として挙がっていた。

ところが、そのことを両親に告げると、

「死ぬほど混んでるぞ」

警察官である父、千一が、顔を顰めて言うではないか。

「本当、正月の神社近くの警備はしたくない」

「行きたいなら止めないけど、あの人数の中から神様があなたのお願い聞き届けてくれるかしらね？」

母の里穂もそう言って、千穂の前途に複雑な影を落とす。

今まで家の近所の神社か、両親の実家近くの神社にしか行ったことのなかった千穂。

佳織に電話で再び相談を持ち掛けると、

『じゃあさ、大宮八幡とかどうよ』

と、あまり馴染みのない神社の名前を出してきた。

「埼玉まで行くの？」

「その大宮じゃないよ！　杉並大宮八幡宮って言ったかな。永福町にある大きな神社だよ。お正月に奉納弓道射会があるらしいんだ」

「へぇ」

学校では弓道部に所属する千穂と佳織である。

神事で行われる弓道の行事というものには興味が湧いた。

「じゃあ、そこにしようか」

『おっけー。んじゃ明大前駅の乗り換えんとこで待ち合わせね。ま、大きいっつったって全国的に有名ってわけじゃないから、混雑もそれなりでしょ」

そんな悠長なことを話していた年末を、千穂も佳織も思い出していた。

それなりどころの話ではない。永福町駅前から既に参道への道案内の警備員が立っており、道を進めば進むほど人が詰まってくる。

おまけに表参道に通じる参道商店街は道幅が狭く、それでいて正月初売りで賑わっているため神社に到着するのにかなりの時間を要した。

しかもである。

「……明日かっ！」

「うわぁ……」

表参道を抜け、ようやく神社の境内に入った二人を待っていたのは非情な現実だった。

二人の大きな目的の一つであった奉納射会『小笠原流蟇目の儀・大的式』は、一月二日に催されるというのだ。

「ささちーゴメン！　もっときちんと調べてくるんだった！」

佳織は手を合わせて平謝りの体だ。

「仕方ないよ。私も確認しなかったし、なんだったら明日もう一回来ても……あ、ほら、あっちに天満宮もあるし、折角だから後でそっちも行こう？」

「う、うん、あーあ……新年一発目にやらかしちゃったー……」

千穂は本当に気にしていないが、やはり誘った側の佳織はそれだけでは済まないのだろう。

快晴の新年の初詣なのにがっくりと項垂れながら、行列に沿ってゆっくりと本殿へと近づいてゆく。

千穂はそんな佳織を元気づけるように肩を叩いて言った。

「ねぇかお、この後お買い物とか行かない？　初売り、楽しいかもよ？」

「うん、いいけどでも……」

佳織はふと、今まで時間をかけて歩いてきた背後を振り返る。

「どこも混んでるんじゃないかなぁ。それこそ原宿とか新宿とか、最初に行こうって言ってた神社だらけじゃん」

「そ、そうか。そうかもね」

朝のMHKのニュースは、都内の主な神社の初詣の様子を中継していた。
その人ごみを思い出して千穂も自分の提案がいささか浅はかだったことに気づく。
だが、千穂が自分を励ますために言ってくれていることが分からない佳織でもない。
反対に千穂の気持ちを暗くしてはそれこそ意味が無いので、大きく頷いて気持ちを切り替えた。
「うん、でもごめんね。暗い顔してるよりはお買い物に突撃して発散したほうがいいかもね。でも、とりあえずここ終わったらどっかで一旦お茶しよ」
「うん、そうしよっか」
苦笑し合っていると、いつのまにか押し合いへし合いして本殿の目の前まで辿り着いていた。
「さっと済ませないと、後ろから押し潰されそうだね」
佳織の言うこともあながち大げさではない。
二人は財布を取り出すと、小銭入れをまさぐって硬貨を取り出す。
「かおは、五円玉？」
「え？　そうだけど、ささちーは？」
「うーん、四十円かな」
「なにその半端なの」
「うーん、お父さんの田舎で聞いた話なんだけど……」

五円玉を転じて『ご縁』とするのはよく聞く話だが、それが十円になると『十分縁があるように』となる。

二十円だと『じゅう』が二つあるということで、『重々縁があるように』。

そこからなぜか四十円に飛び、今度は『始終縁があるように』という言葉とかけているのだそうだ。

「なんだかよく分かんないけど、結局は気持ちだからなんでもいいんじゃない？」

「そうかな、じゃあ……あっ」

納得した千穂はきっかり十円玉四枚を取り出そうとした。

が、そのときたまたま後ろから押し出されてきた男性が千穂の腕に当たってしまい、あっと思ったときにはもう遅く、千穂は四枚の硬貨を足元に取り落としてしまう。

「あ、す、すいません」

その男性も千穂が小銭を取り落したのが自分のせいだと気づいたらしく、慌てた様子で千穂の小銭を追う。

行列の先頭で手間取るという、日本人なら絶対避けたいトラブルに巡り合ってしまい、千穂はもちろん男性も大分焦っているらしい。

千穂よりいくらか年上の、黒髪の男性が、

「ほんと、すいません」

「いえ……どうも」
と渡してきた硬貨は、
「あ、あれ？」
五枚あった。
千穂が落としたのは十円玉が四枚。なのに、そこに五円玉が一枚増えていたのだ。
「増えた……あ、あの……あれっ？」
別の誰かが落としたか、そうでなければ男性自身のものか、とにかく自分のものではない五円玉をどうしたものかほんの数瞬悩んだ間に、黒髪の男性の姿は人ごみの中に掻き消されてしまっていた。
「ささちー、どうしたのさ」
「あ、うん、その……」
千穂は逡巡する。
たかが五円、されど五円。本来は千穂が持っているべきお金ではない。
ここは神聖な神社の境内である。
自分のものではない五円玉をどうするか、千穂は真剣に悩んだ。
悩んだ末に千穂は、
「……えいっ」

自分の四十円と一緒に、その五円を賽銭箱に投げ込んだ。
賽銭箱の前で増えたのなら、先程の男性が投じるつもりであった浄財である可能性が高い。
手間取りまくった千穂は急いで手を合わせ、
『あの五円玉の持ち主の人にもご利益がありますように』と祈った。
トラブルはあったもののなんとかお参りを済ませ、行列から外れた千穂は、佳織に一体何を手間取っていたのかを尋ねられる。
後ろから誰かにぶつかられて小銭を散らばしたこと、戻ってきた小銭が増えていたことを話すと、
「やっぱ変に小銭多くしたから、神様に欲掻いたって思われたんじゃない？」
「欲掻いたわけじゃないよぉ」
神様は金額でこちらを差別するようなことはないだろうが、それでもなんとなく縁起が悪い出来事のような気がしてならず、一瞬顔を顰める千穂だったが、
「でもま、結果的には良かったんじゃない？」
「え？」
「ちゃんとささちーは神様の前で正直にその五円もお賽銭として収めたわけで、金額もさっきの話と照らしたら、始終ご縁がある、ってことになんじゃん」
それはそう、なのだろうか。

なんだかこじつけのような気がしないでもないが、それが一番心の整理をつけられる答えのような気がして、もう一度だけ本殿に向かって小さく手を合わせた。

「で、ささちーは何かお祈りできたの？」

佳織の問いに、千穂は手を下ろすと肩を竦めた。

「一応ね」

どことなく後味の悪いお参りになってしまった千穂は、本殿を遠くに振り返り、

「五円落とした人にもご利益があるようにっていうのと、今年も、平穏無事に過ごせればいいなって」

佳織には、年寄りくさいと笑われてしまった。

※

「ささちー！　おみくじやろうおみくじ！」

行列から解放された途端に元気になった佳織は、今度はおみくじに群がる人ごみに飛び込んでゆく。

千穂も後に続くと、佳織は早くも百円を投じておみくじ札を一枚引いている。

「……」

だが、その表情は思わしくない。
「どうだったの？」
「一番つまんないの」
手渡されたのは、身も蓋もなく『吉』の札。
おみくじにつまんないとは罰当たりな話だが、確かに吉より凶でも引いたほうが盛り上がるのは事実だ。
「結んできてもう一回やろうかなぁ」
そういうやり直しはアリなのかと突っ込むのも野暮なので、千穂も百円玉を取り出して自分もおみくじ箱に向かう。

「魔王様、ですからおみくじと言っても所詮はプリンターで大量に印刷された紙ですからそう大したご利益は……」
「分かってねぇな！　気持ちだ気持ちこーゆーのは！　大体意味ねぇってんならこんだけ大勢のお願いいちいち聞いてたら、神社の神様が過労で死んじまうし皆いい思いしまくって世界が大混乱だろ！　実体がどうとかゆー話じゃねぇんだよ！」
「あのですね……」

おみくじの箱の前で不毛な言い争いをする真奥と芦屋。

「吉を引いたらラッキーでいい気分、凶を引いたら気を引き締めて頑張る、そういうもんだろ。いいじゃん一回くらい！　大体お前が言い出したんだろ、初詣で一年の初めを仕切ろうってさ！」

それを言われると芦屋もグウの音も出ない。

年末に永福町で実入りの良いアルバイトができたので、良縁を結ぶと評判の神社で新年を幸先の良いものにしたいと思ったことは確かだ。

それに芦屋は内心、悪魔の身で本心から神様に祈り捧げてはいない、ということにしている。だが主の魔王は、神様からのご託宣が書かれているというおみくじに興味津々で、貴重な百円を投じて引きたいと言って譲らないのだ。

「新年早々いきなり他人様の金散らばして、しかも自分の五円玉は失くしちまったんだぞ。出だし最悪じゃねぇか！　一丁この悪い流れを変えるために、景気づけにやってみてもいいだろ！」

五円玉を失くしたというのだって、先客に手が当たって小銭を散らばしてしまい、回収に協力していたら勢いで自分が掴んでいた五円も一緒に渡してしまった、というだけの話だ。

だが子供の様に喚く真奥にはそんな冷静な分析は通じそうにない。

「……一回だけですからね」

芦屋は仕方なく、母親のような広い気持ちでおみくじを許可する。
「よっしゃ！　見てろよ！　大吉引き当ててやるからな！」
その運で商店街の福引でも当ててほしいと思う芦屋だが、意気揚々とおみくじに向かう真奥に言っても仕方がない。
芦屋はもはや、真奥が大凶を引いて落ち込むことがないよう、願うだけだった。

「何がパワースポットよ……こっちがパワー吸われたわよ全く……」
恵美はぶつくさ言いながらお参りを終え、行列を外れて御守などを売っている社務所の前で大きく息を吐いた。
仕事が入っていないとはいえ年の初めの一日を家に閉じ籠っていても仕方がない。
魔王探索と並行して聖法気を回復する手段も探している恵美は、まず最初に、有名なパワースポットである明治神宮に向かった。
仮にも巨大な神社で、大勢の人間が集まる場所である。
少しはそれに類するエネルギーの湧出でもあるかと思いきや、単に井戸があるだけだった。
さんざ行列したうえに収穫なしで疲労感が増す恵美。
だがもう一か所、自分が住まいにしている永福町にも、なんでも『首都の臍』という立ち位

置のパワースポットになっている神社があるというのだ。

気力を振り絞って立ち寄ってみれば、歴史の長い神社ではあったものの、恵美が求める聖法気のようなエネルギーを内包している気配は無かった。

一日に二か所の初詣人気スポットを踏破してしまった恵美は、通り一遍のお参りだけを済ませるとおみくじで盛り上がる一角にようやく立ち止まり、大きく息を吐いた。

「……おみくじ、かぁ」

占いは嫌いではない。

エンテ・イスラの旅の間には、結構な頻度で占星術師などの世話になっていたものだ。

もちろんこういうおみくじは、恵美が見てきたような占術を生業にする人が出す卦のように、法術的、科学的根拠に基づいて卦を出しているわけではないだろう。

「でもこれだけ歩き回って、収穫なしってのもね」

おみくじ一つが収穫と呼べるかどうかは微妙だが、どのような事情にせよ、今は日本にいるのである。

少しくらい日本の正月らしいことをしても良いだろう。

恵美はお気に入りのキャラクター、リラックス熊の財布から百円玉を取り出すと、おみくじを引くべく箱の前に立つ。

「わ」

「お」

「あ」

三つの異なる手が引いた番号は、同じ籤を引き当てさせる。

「私、初めて引いたかも！」

佐々木千穂は無邪気に結果を喜び、

「おおい芦屋！　やったぞ！　俺やったぞ！」

真奥貞夫は周囲が何事かと振り返る勢いで喜びを露わにし、

「ま、悪い気はしないわね」

遊佐恵美はまんざらでもない顔をして、籤を財布にしまう。

全く異なる生活を送る三人の男女の新しい年の運勢を、同じ一枚の籤が示す。

大吉

山河春色昇　願望・叶う　方角・東よし
月光紫雲照　造作・障りなし　祝い事・末々までよし
人集相扶先　待人・来る也少し遅い
未見新天晶　失せ物・出る

同じおみくじ箱から引き出された『大吉』の運勢と、年の変わり目がすれ違わせた縁。
それらが異なる二つの世界を巻き込んでうねりはじめるのは、もう少し先のこと。
この年の春が来てからである。



作者、あとがく　―AND YOU―

今回のあとがきには若干のネタバレ要素があります。
あとがきから先行される方、ご注意ください。

本書は電撃文庫『はたらく魔王さま！』の1巻から数えて12冊目に当たりますが、タイトルは『12』ではなく『0』です。
皆さまのお手元に本書が届くのが2014年9月10日以降ですが、もちろん『12』もなるべく早い段階で皆様のお手元にお届けできるよう頑張って参ります。

『はたらく魔王さま達！　―a long time ago―』
お話の始まり自体は本編11巻よりも後の時間軸に位置します。しかし語られる物語は、現状で明らかになっているどの物語よりも昔の時代を語る、本書0巻を象徴する一話。
第4巻で登場した彼も、メインキャラとして全力で出張っています。

この話を書いていて気づいたのが、芦屋と千穂が二人きりになると、意外にも真奥以外の共通の話題が無い、ということでした。

というかこの二人、あまりにも似た者同士なのです。二人共家事万端得意で、誠実な性格で、頭が切れて優秀で、真奥の力になりたい一心で日々を暮らしていることまで一致しているが故に、逆に話題が無いという。

何を話しても今更感が強い上に、真奥に関することは言わずもがななので、何が一番苦労したって芦屋と千穂を会話させるのが一番苦労しました。

『はたらく魔王さま達！』ではこれまで描かれなかったキャラ、描かれなかった世界、描かれなかった展開をお楽しみいただければ幸いです。

『はたらく勇者さま達！　—a long time ago—』

なんだかどこかのラジオを彷彿とさせるタイトルですね。

第1巻を書いた時点で、恵美達の過去はかなり綿密に決まっていました。

本文中に今まで出てきたことのない街の名前が登場しますが、その街に関わるエピソードもいつか描ければいいなと思っております。

このお話の着想をどこで得たか、ディープな魔王さまファン諸賢にはきっとお察しいただけ

ると思います。

初登場から一貫して悪者であり続けたオルバがまだ正義を遂行していた時代を描けたのが、とても楽しい回でした。

『悪魔と勇者と女子高生　―A happy new year―』

一応は短編集なのに三本中二本が書き下ろしという暴挙に出た本書0巻の中で、唯一既出の物語。

電撃文庫MAGAZINEに掲載された後、アニメ『はたらく魔王さま！』BD/DVD第二巻の初回生産限定特典のドラマCDとして世に出ました。

本書0巻の中で、最も第一巻に近い物語です。

未来に出会う人達と、意外な所ですれ違っているかもよ？　というお話。

今回の物語。珍しく三食食べることの優先度は限りなく低くなりましたが、日々を生きることにかける情熱は過去最高レベルに達する一冊となりました。

そしてもしかしたら、いずれ過去の時間軸の物語がさらに広がる『0！』ならぬ『ZER

O!!』がお目見えすることもあるかもしれません。

今に繋がる過去があるからこそ、未知の世界へと今、飛び出せる。本書はそんな物語の集まりでした。

いずれまた、今はまだ見ぬ未来のあとがきでお会いできる日を心待ちにしております！

◉和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」（電撃文庫）
「はたらく魔王さま！2」（同）
「はたらく魔王さま！3」（同）
「はたらく魔王さま！4」（同）
「はたらく魔王さま！5」（同）
「はたらく魔王さま！6」（同）
「はたらく魔王さま！7」（同）
「はたらく魔王さま！8」（同）
「はたらく魔王さま！9」（同）
「はたらく魔王さま！10」（同）
「はたらく魔王さま！11」（同）
「はたらく魔王さま！0」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.dengeki.com/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「和ヶ原聡司先生」係
「029先生」係

初出

「悪魔と勇者と女子高生　—A happy new year—」
／電撃文庫MAGAZINE Vol.31（2013年5月号）

文庫収録にあたり、加筆、訂正しています。

「はたらく魔王さま達！　—a long time ago—」
「はたらく勇者さま達！　—a long time ago—」は書き下ろしです。

電撃文庫

はたらく魔王さま!0

和ヶ原聡司

発　行　2014年9月10日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
03-3238-1854（営業）

装丁者　荻窪裕司(META + MANIERA)
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2014 SATOSHI WAGAHARA
ISBN978-4-04-866900-9　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.dengeki.com/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司
イラスト／029

世界征服間近だった魔王が、勇者に敗れて辿り着いた先は、異世界・東京。だった!?六畳一間のアパートを仮の魔王城に、フリーターとして働く魔王の明日はどっちだ!?

わ-6-1　2078

はたらく魔王さま！2

和ケ原聡司
イラスト／029

店長代理に昇進し、ますます張り切る魔王。そんなある日、魔王城（築60年の六畳一間）の隣に、女の子が引っ越してきた！　心穏やかでいられない千穂と勇者だったが!?

わ-6-2　2141

はたらく魔王さま！3

和ケ原聡司
イラスト／029

東京・笹塚の六畳一間の魔王城に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた幼い少女は、魔王をパパ、勇者をママと呼んで――!?　波乱必至の第3弾登場！

わ-6-3　2213

はたらく魔王さま！4

和ケ原聡司
イラスト／029

バイト先の休業により職を失った魔王。しかもアパートも修理のため一時退去となる。職と魔王城を一気に失い失意の魔王は、なぜか"海の家"ではたらくことに!?

わ-6-4　2281

はたらく魔王さま！5

和ケ原聡司
イラスト／029

無職生活続行中の魔王が、まさかの薄型テレビ購入を決断！　異世界の監職者・鈴乃もそれに便乗することに。そんな中、恋する女子高生・千穂に危機が迫っていた。

わ-6-5　2348

はたらく魔王さま！6

和ケ原聡司
イラスト／029

マグロナルドに復帰した魔王は、心機一転新たな資格を取ることに。そんな中、千穂が概念送受（イメージング）を覚えたいと言い出す。鈴乃が修行の場に選んだのはなぜか銭湯で!?

わ-6-6　2423

はたらく魔王さま！7

和ケ原聡司
イラスト／029

真奥と恵美がアラス・ラムスのお布団を買いに3人でお出かけ!? 千穂が真奥と初めて出会った頃のエピソードなど、第7巻は他2編を加えた特別編でお届け！

わ-6-7　2490

はたらく魔王さま！8

和ケ原聡司
イラスト／029

恵美がエンテ・イスラに帰省することになり、羽を伸ばす芦屋、心配する千穂。一方真奥はマッグの新業態のために免許試験を受けるが、試験場で思わぬ出会いが!?

わ-6-8　2519

はたらく魔王さま！9

和ケ原聡司
イラスト／029

恵美と芦屋を救出に向かう魔王達は何を持っていくかで大騒ぎ。日本の生活に慣れた恵美はエンテ・イスラでの旅路に大苦戦。庶民派ファンタジーは異世界でも相変わらずです！

わ-6-9　2587

はたらく魔王さま！10

和ケ原聡司
イラスト／029

寄地の恵美に芦屋から手紙が届く。魔王が異世界に来ることを知った恵美は、再び立ち上がる。一方魔王は、お土産を求めてアシエスと街をブラついていた！

わ-6-10　2657

電撃文庫

はたらく魔王さま！11

和ケ原聡司
イラスト／029

異世界から無事帰還した勇者を待ち受けていたものは、バイトのクビと、救出に掛かった経費の精算であった。金欠勇者の新たなバイト先は見つかるのか!?

わ-6-11　2736

はたらく魔王さま！0

和ケ原聡司
イラスト／029

魔王サタンとルシフェルの出会い、そしてアルシエルとの激突までを描いた、魔王たちの始まりの物語。庶民派成分ゼロでお贈りするエピソード・ゼロ！

わ-6-12　2803

未踏召喚：：／／ブラッドサイン

鎌池和馬
イラスト／依河和希

「神々よりも奥に潜む者」さえ呼び出す最新鋭召喚師。その中でも最強と謳われる「不殺王」こと城山救介。彼の唯一の弱点は、「たすけて」という少女の「呪いの言葉」で……。

か-12-50　2802

異世界管理人・久藤幸太郎

鈴木 鈴
イラスト／とよた瑣織

各部屋が異世界の各国に繋がる謎のアパート。その大家の仕事は、住人同士の間諜の調停……国際問題の解決だった。失敗すれば戦争勃発の大任に就いたのは――。

す-5-31　2805

ガーリー・エアフォース

夏海公司
イラスト／遠坂あさぎ

真紅に発光する戦闘機・グリペン、そしてサンライトイエローに輝くイーグル。両機を異次元のマニューバで駆る謎の美少女たちの正体とは!? 鮮烈な美少女×戦闘機ストーリー！

な-12-17　2808

魔界に召喚(よば)れて家庭教師!? ～派遣先は魔王宮～

鷲宮だいじん
イラスト／Nardack

いきなり魔界に強制召喚されてみれば――押しつけられたお仕事は魔王の娘さんの家庭教師!? 魔界の存亡をかけ、人間界で舞踏会デビューを果たすべく、魔物な絶客たちとの秘密のレッスンが始まる！

わ-8-2　2812

神なき世界のトーメンター

仁科裕貴
イラスト／ryoro

時は中世、表向きは捕縛書をしながらも罪なき者を救う元暗殺者のジグは、民を殺す処刑されるはずだった王女の命を救う。だが、貴族による王権争いと時計の裏で蠢く陰謀に巻き込まれ……。

に-8-1　2813

ハコニワフールズ
-精霊、火炎放射魔、古い顔-

佐々山プラス
イラスト／えびら

手製の火炎放射器を振りまくアニさんに監禁されたのは、「自分は精霊」だと言い張る青髪の女。そして彼女と鎖で繋がれた俺は、この狂った田舎を奔走する。バカどもが繰り広げる48時間。

さ-16-1　2814

レターズ／ヴァニシング　書き忘れられた存在

旭 蓑雄
イラスト／おぐち

この世の全ては、文字で出来ている……。肉体の文字を破壊する殺人鬼、「沈黙の文字」を担父に託された少年、そして神から文字で書き忘れられた女。――今、すべてが書き換えられる！

あ-43-1　2815

マグダラで眠れ

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

眠らない錬金術師クースラと、白い修道女フェネシスが紡ぐ、その「先」の世界を目指すファンタジー。「狼と香辛料」の支倉凍砂、待望の新シリーズ始動！

は-8-18　2362

マグダラで眠れII

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

異教徒の町に、近々大きな入植があることに気づいたクースラたち。その波に乗ろうと、伝説の金属の精錬方法を探すこととなり――。眠らない錬金術師の物語第2弾。

は-8-19 | 2424

マグダラで眠れIII

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

カザンの町への入植を許されたクースラたち。だがウェランドが「錬金術師ではない」という疑いを掛けられる。この難題に挑らない錬金術師はどう立ち向かう?

は-8-20 | 2520

マグダラで眠れIV

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

異教徒の町カザンで地盤を築くべく奮闘する錬金術師クースラたちは、工房を手に入れ、新たな生活を営もうとしていた。しかし彼らに過酷な運命が迫り――!?

は-8-21 | 2607

マグダラで眠れV

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

カザンの町から脱出したクースラたちは、騎士団が各地から集結している港町へとやってくる。そして騎士団の権威を取り戻すべく実を練ることになるのだが――。

は-8-22 | 2694

マグダラで眠れVI

支倉凍砂
イラスト／鍋島テツヒロ

異端審問官アブレアの足跡を辿るクースラ達は、ガラス職人が忌み嫌われる町を訪れる。そこで一行はガラス職人と町娘との結ばれざる恋を知ることになり!?

は-8-23 | 2804

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30 2090

ストライク・ザ・ブラッド2 戦王の使者

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

世界最強の吸血鬼・暁古城と、彼を監視する雪菜の前に、欧州の真祖、忘却の戦王の使者が現れる。その目的は古城に対する宣戦布告か、それとも……。

み-3-31 2191

ストライク・ザ・ブラッド3 天使炎上

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

失踪したクラスメイトを追跡して、無人島に漂着した古城と雪菜。そこで彼らが遭遇したのは、魔族特区で生み出された対魔族兵器『人造天使』だった……。

み-3-33 2280

ストライク・ザ・ブラッド4 蒼き魔女の迷宮

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

盛大なお祭りが開催されている絃神島を、古城の幼なじみが訪れる。だがその旧友との再会が、古城の肉体に驚愕の異変を引き起こすことに……!

み-3-34 2351

ストライク・ザ・ブラッド5 観測者たちの宴

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

監獄結界から脱出した〝書記の魔女〟の目的は、絃神島から異能の力を完全に消し去ることだった。魔族特区崩壊の危機の中、傷ついた古城たちの運命は……!

み-3-35 2426

ストライク・ザ・ブラッド6 錬金術師の帰還

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

中等部の修学旅行に参加する雪菜が、一時的に絃神島を離れることに。監視役不在の古城を待ち受けていたのは、怪物と融合した不死身の錬金術師だった。

み-3-37 2494

ストライク・ザ・ブラッド7 焔光の夜伯

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

古城が吸血鬼化した原因を探るため、暁凪沙の過去を調べる雪菜。そのころ絃神島には、もう一人の第四真祖が現れていた。果たして彼女の正体とは!?

み-3-38 2523

ストライク・ザ・ブラッド8 愚者と暴君

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

覚醒したアヴローラと再会する古城。そして彼らを待ち受ける惨劇「焔光の宴」。少年はいかにして世界最強の吸血鬼を殺し、第四真祖へと至ったのか――!?

み-3-39 2568

ストライク・ザ・ブラッド9 黒の剣巫

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

リゾート施設「ブルーエリジアム」で古城が出会った少女、結瞳。新たな「世界最強」の力を秘めた彼女を巡って動き出す、闇の剣巫「六刃」の陰謀とは!?

み-3-40 2624

ストライク・ザ・ブラッド10 冥き神王の花嫁

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

失踪したヴァトラーが古城に託した謎の少女セレスタ。彼女の出現で古城と雪菜の日常にも変化が。そしてセレスタの記憶に隠された、神の王の秘密とは!?

み-3-41 2714

ストライク・ザ・ブラッド11 逃亡の第四真祖

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

帰省中に消息を絶った暁凪沙。彼女を救うため、本土に向かおうとする古城と雪菜。そして二人の逃走を阻止するべく人工島管理公社が派遣した追っ手とは!?

み-3-42 | 2806

神様のメモ帳

杉井 光
イラスト／岸田メル

大きな瞳、真っ白な肌、長い黒髪。アリスと名乗る少女は、自らを"ニート探偵"と呼んだ——。高校生ナルミを変えた冬の出会いと事件を描いた青春ストーリー。

す-9-4 | 1381

神様のメモ帳2

杉井 光
イラスト／岸田メル

ニート探偵事務所の扉をタイ人の少女が叩く。彼女は2億円を抱えていて父親から身を隠すように言われたというが——。ニートティーン・ストーリー第2弾。

す-9-5 | 1448

神様のメモ帳3

杉井 光
イラスト／岸田メル

記憶を失い戻ってきた彩夏。廃部の危機を迎えた園芸部。その創設に絡む死亡事件——ニート探偵アリスの出す答えは? ニートティーン・ストーリー第3弾。

す-9-8 | 1612

神様のメモ帳4

杉井 光
イラスト／岸田メル

かつて四代目とともに平坂組をつくりあげた平坂が街に戻ってくる。因縁ある二人の間に立たされたナルミの決断とは!? ニートティーン・ストーリー第4弾。

す-9-11 | 1800

神様のメモ帳5

杉井 光
イラスト／岸田メル

ミンさんのラーメンや平坂組のバカたちにまつわるエピソードを収録。書き下ろしでは草野球でヤクザと対決!? ニートティーン・ストーリー、初めての短編集。

す-9-13 1943

神様のメモ帳6

杉井 光
イラスト／岸田メル

ミンさんに結婚話!? それを聞いて真っ先に立ち上がったのは……ヒロさんだった! 「電撃文庫MAGAZINE」に連載されたものに加筆訂正、さらに書き下ろしも!

す-9-14 2089

神様のメモ帳7

杉井 光
イラスト／岸田メル

全ニートの厄日、勤労感謝の日を息を潜めてやり過ごしたアリスのもとに依頼にやってきたのは人気のアイドルで——。ニートティーン・ストーリー、第7弾。

す-9-15 2155

神様のメモ帳8

杉井 光
イラスト／岸田メル

雀荘荒らしを調査中のナルミの前に現れたのは、四代目の父親— 平坂組の危機と賭け麻雀騒ぎの裏で、一年前のあの悪夢がふたたび街に忍び寄る……

す-9-16 2186

神様のメモ帳9

杉井 光
イラスト／岸田メル

春休み、ナルミのもとにやってきたのはアリスの姉。闇に包まれていたアリスの過去が次々と明らかになり、紫苑寺家の遺産を巡ってついに殺人事件が——

す-9-22 2768

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」「電撃コミック各誌」からデビュー!

上遠野浩平（ブギーポップは笑わない）、高橋弥七郎（灼眼のシャナ）、
成田良悟（デュラララ!!）、支倉凍砂（狼と香辛料）、
有川 浩（図書館戦争）、川原 礫（アクセル・ワールド）、
和ヶ原聡司（はたらく魔王さま!）など、
常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。
新時代を切り開く才能を毎年募集中!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞・電撃コミック大賞

※第20回より賞金を増額しております。

賞（共通）

大賞……正賞＋副賞300万円
金賞……正賞＋副賞100万円
銀賞……正賞＋副賞50万円

（小説賞のみ）

メディアワークス文庫賞
正賞＋副賞100万円

電撃文庫MAGAZINE賞
正賞＋副賞30万円

編集部から選評をお送りします!

小説部門・イラスト部門・コミック部門とも1次選考以上を通過した全作品に選評をお送りします!

イラスト大賞とコミック大賞はWEB応募も受付中!

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

http://asciimw.jp/award/taisyo/

編集者のワンポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載!

主催:株式会社KADOKAWA　アスキー・メディアワークス